

平榎龜田遺跡
浜黒崎野田・平榎遺跡
横越水窪遺跡
横越遺跡 **発掘調査報告**

— 県営農地整備事業平榎地区に伴う
埋蔵文化財発掘報告Ⅱ —

2018年

平榎龜田遺跡
浜黒崎野田・平榎遺跡 発掘調査報告
横越水窪遺跡
横越遺跡

— 県営農地整備事業平榎地区に伴う
埋蔵文化財発掘報告Ⅱ —

2018年

公益財團法人 富山県文化振興財團
埋 藏 文 化 財 調 査 事 務 所

序

本書は、県営農地整備事業に先立ち、平成28・29年度に実施した平榎亀田遺跡、浜黒崎野田・平榎遺跡、横越水窪遺跡、横越遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

これらの遺跡が立地するのは、常願寺川河口から南に1km余り、神通川と常願寺川によって形成された複合扇状地の扇端部で、東には雄大な立山連峰を、はるか西には二上山を望むことができます。

発掘調査の結果、浜黒崎野田・平榎遺跡では縄文時代から中世までの遺物が多量に出土した溝や古代と考える柱列が、平榎亀田遺跡、横越水窪遺跡、横越遺跡では中世以降の井戸や溝などがみつかり、集落周辺での耕作に利用していた様子が明らかになりました。

こうした発掘調査の成果が、文字の記録に現れることのない人々の生活をひとく一助となり、地域の歴史と文化財の理解に役立てば幸いです。

本書をまとめるにあたり、ご協力とご指導を頂きました関係機関および関係諸氏に厚く感謝申し上げます。

平成30年3月

公益財団法人 富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所

例　　言

- 1 本書は富山県富山市平瀬に所在する平瀬亀田遺跡、富山市野田地内に所在する浜黒崎野田・平瀬遺跡および横越遺跡、富山市横越地内に所在する横越水窪遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は富山県からの委託を受け、公益財團法人富山県文化振興財團が行った。
- 本遺跡の発掘調査期間と本書刊行までの整理期間は下記のとおりである。
- 調査期間 平成28（2016）年8月8日～11月18日
平成29（2017）年9月29日～11月20日
- 整理期間 平成28（2016）年11月19日～平成29（2017）年3月27日
平成29（2017）年11月21日～平成30（2018）年3月26日
- 3 調査に関する全ての資料と出土遺物は、本書刊行後、富山県埋蔵文化財センターで保管する。
- 4 遺跡の略号は市町村番号に遺跡名を続け、平瀬亀田遺跡を「01H K」、浜黒崎野田・平瀬遺跡を「01 H N H」、横越水窪遺跡を「01 Y M」、横越遺跡を「01 Y G」とし、遺物の注記には略号を用いた。
- 5 本書の編集は田中道子が担当した。本文執筆は田中のほか、高柳由紀子、町田賢一が担当し、執筆分担は文末に記した。石材については明治大学黒耀石研究センター客員教授中村由克氏に鑑定を依頼し、玉稿を賜った。
- 6 本書で使用している遺構の略号は以下のとおりである。
- SD：溝、SE：井戸、SK：土坑、SP：柱穴、SX：その他
- 7 遺構番号は遺構の種類に関わらず遺跡ごとに連番とした。
- 8 本書で示す座標は平面直角座標系第7系（世界測地系）を基準とし、方位は全て真北、標高は海拔高である。
- 9 挿図の縮尺は下記を基本とし、各図の下に縮尺率を示す。
- 遺構　溝・井戸・土坑・柱穴：1/40
- 遺物　土器・陶磁器：1/3　土製品・木製品・石製品・金属製品：1/1、2/3、1/3
- 10 土器の赤彩については図右下に○を付し、それ以外については図中に凡例で示した。
- 11 施釉陶磁器の釉の掛かる範囲は1点鎖線で示す。
- 12 土層及び遺構埋土、土器胎土の色については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財團法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』を参照した。
- 13 遺物は種類に関わらず遺跡ごとに連番を付す。平瀬亀田遺跡1～225、浜黒崎野田・平瀬遺跡301～499、横越水窪遺跡501～523、横越遺跡601～604とし、本文・挿図・一覧表・写真図版中の遺物番号は全て一致する。
- 14 本文・挿図で扱った遺構・遺物は、一覧表に掲載している。凡例は以下のとおりである。
- ①遺構の埋土に切り合い関係がある場合は、新>古のよう記号で示す。
- ②遺構規模・土器法量の（ ）内は現存長を表す。残存部が少なく、計測不能なものは空欄とした。
- ③重量はg単位で示す。計測は大きさによって台秤と電子秤を使い分けた。
- 15 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大なご教示・ご協力を得た。記して謝意を表します。（敬称略、五十音順）
池野正男、長田友也、富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センター、富山市教育委員会、富山市埋蔵文化財センター

目 次

第Ⅰ章 調査の経過	1
1 調査に至る経緯	1
2 発掘作業の経過と方法	3
3 整理作業の経過と方法	6
4 普及活動	6
第Ⅱ章 位置と環境	7
1 地理的環境	7
2 歴史的環境	7
第Ⅲ章 平榎龜田遺跡	9
1 概要	9
2 層序	9
3 遺構	11
4 遺物	14
5 総括	17
第Ⅳ章 浜黒崎野田・平榎遺跡	49
1 概要	49
2 層序	49
3 遺構	50
4 遺物	53
5 総括	55
第Ⅴ章 横越水窪遺跡	79
1 概要	79
2 層序	79
3 遺構	79
4 遺物	81
5 総括	82
第Ⅵ章 横越遺跡	87
1 概要	87
2 層序	87
3 遺構	87
4 遺物	88
5 総括	88
第Ⅶ章 浜黒崎野田・平榎遺跡の石器・石製品の石材	91
報告書抄録	

挿図目次

第1図	遺跡位置図	第33図	浜黒崎野田・平榎遺跡D1地区 遺物の出土傾向
第2図	調査位置図	第34~40図	浜黒崎野田・平榎遺跡遺構実測図
第3図	グリッド図	第41~50図	浜黒崎野田・平榎遺跡遺物実測図
第4図	周辺の地形と遺跡	第51~53図	横越水窪遺跡遺構実測図
第5図	平榎亀田遺跡遺構図	第54図	横越水窪遺跡遺物実測図
第6図	平榎亀田遺跡における平榎城関連遺構	第55図	横越遺跡と周辺の遺構図
第7~20図	平榎亀田遺跡遺構実測図	第56~57図	横越遺跡遺構実測図
第21~32図	平榎亀田遺跡遺物実測図	第58図	横越遺跡遺物実測図

表 目 次

第1表	既往の調査一覧	第15表	浜黒崎野田・平榎遺跡溝一覧
第2表	調査体制	第16表	浜黒崎野田・平榎遺跡土坑一覧
第3表	調査一覧	第17表	浜黒崎野田・平榎遺跡土製品一覧
第4表	整理体制	第18表	浜黒崎野田・平榎遺跡石製品一覧
第5表	周辺の遺跡一覧	第19表	浜黒崎野田・平榎遺跡金属製品一覧
第6表	平榎亀田遺跡溝一覧	第20表	浜黒崎野田・平榎遺跡土器・陶磁器一覧
第7表	平榎亀田遺跡土坑一覧	第21表	横越水窪遺跡溝一覧
第8表	平榎亀田遺跡土器・陶磁器一覧	第22表	横越水窪遺跡井戸一覧
第9表	平榎亀田遺跡土製品一覧	第23表	横越水窪遺跡土坑一覧
第10表	平榎亀田遺跡木製品一覧	第24表	横越水窪遺跡土器・陶磁器一覧
第11表	平榎亀田遺跡石製品一覧	第25表	横越水窪遺跡石製品一覧
第12表	平榎亀田遺跡金属製品一覧	第26表	横越水窪遺跡金属製品一覧
第13表	平榎亀田遺跡ガラス製品一覧	第27表	横越水窪遺跡溝一覧
第14表	浜黒崎野田・平榎遺跡柱穴一覧	第28表	横越水窪遺跡土器・陶磁器一覧

写真図版目次

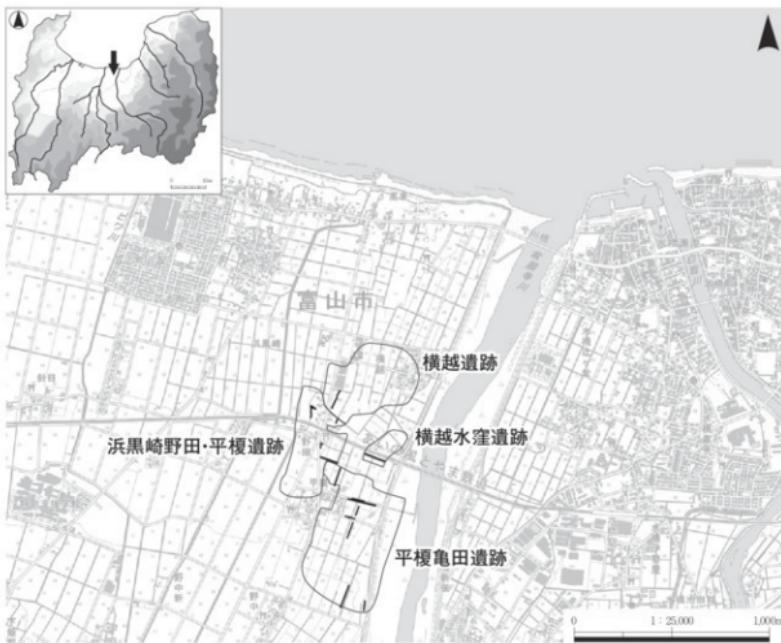
図版1	航空写真（1975年撮影）	図版21~26	浜黒崎野田・平榎遺跡 遺物
図版2~9	平榎亀田遺跡 遠景・全景・遺構	図版26	横越水窪遺跡 遺物
図版10~15	平榎亀田遺跡 遺物	図版27	横越水窪遺跡 全景・井戸
図版16~20	浜黒崎野田・平榎遺跡 遠景・全景・遺構	図版28	横越遺跡 全景・溝

第Ⅰ章 調査の経過

1 調査に至る経緯

(1) 調査の契機

富山市平榎地区において、平成27（2016）年度から31（2019）年度の5カ年にわたり、県営農地整備事業が計画された。事業計画地周辺では複数の遺跡が周知されており、富山市教育委員会（以下、市教委）により平成26（2014）年9月～平成27（2015）年11月にかけ、試掘調査が実施された。平成26年度には市教委から県に対し本発掘調査の対応について要望があり、富山県教育委員会（以下、県教委）は富山市が事業主体ではなく、公益財団法人富山県文化振興財団（以下、財団）が受託する方向で関係部局と検討・調整を重ねた。平成27年4月、市教委からの試掘調査結果報告を受け、富山県農水部、富山県富山農林振興センター、県教委、市教委、財団が工事設計について協議し、6月に当該年度の本調査対象範囲が確定し、順次調査範囲が確定された。財団は県営農地整備事業平榎地区における本発掘調査を受託し、平成27年度に平榎亀田遺跡1,680m²、平成28年度には横越水窪遺跡266m²、浜黒崎野田・平榎遺跡329m²、平榎亀田遺跡1,419m²、平成29年度には平榎亀田遺跡248.2m²、浜黒崎野田・平榎遺跡276.2m²、横越遺跡119.4m²の発掘調査を実施した。



第1図 遺跡位置図 (1/25,000)

(2) 既往の調査

常願寺川左岸の平野部は弥生時代から古代の遺跡が密集する地域で、平復亀田遺跡は古墳時代、古代などの遺物、浜黒崎野田・平復遺跡や横越遺跡も縄文時代、弥生時代、古代にわたる遺物が広く散布する周知の遺跡として確認されていた。平成6～7年には県営低コスト化水田農業大区画は場整備事業（針原北部地区）に伴い、浜黒崎野田・平復遺跡での試掘調査及び本調査が実施され、野田・平復遺跡では縄文時代後期～晩期の土器捨て場や弥生～古墳時代の集落が確認された。横越遺跡では工場建設等に伴う試掘調査が実施され、遺構と縄文土器や古代の遺物が確認された。

県営農地整備事業平復地区に先立つ試掘調査は、平成26（2015）年9月に市教委が平復亀田遺跡から開始し、平成26年9月～平成27年1月末、平成27年10月～11月および平成28年4月には浜黒崎野田・平復遺跡を含む約220,000m²について実施された。一連の試掘調査結果により、平復亀田遺跡は252,500m²、浜黒崎野田・平復遺跡は114,300m²、横越遺跡は141,600m²にそれぞれの遺跡範囲が変更され、平成28年4月に横越水堀遺跡24,200m²が新規追加された。

第1表 既往の調査一覧

遺跡名	試掘調査				本調査			
	年度	調査主体	調査面積(m ²)	調査対象面積(m ²)	文献	年度	調査主体	調査面積(m ²)
平復亀田遺跡	H26	市教委	1815.0	165,230.00	7	H27	財 団	1,680 8・12・14
	H27	市教委	14.3	144.90	8	H28	財 団	1,419 9・13
	H 6	市教委	1,700.0	53,000.00	1・10	H 7	市教委	2,000 11
浜黒崎野田・平復遺跡	H26	市教委	385.0	55,770.00	7	H28	財 団	329 9・13
	H27	市教委	135.2	9,717.89	8			
	H28	市教委	15.0	2,306.76	9			
横越水堀遺跡	H28	市教委	72.4	4,613.52	9	H28	財 団	266 9・13
横越遺跡	H 7	市教委	20.0	600.00	2			
	H 8	市教委	40.0	1,600.00	3			
	H14	市教委	27.0	815.00	4			
	H16	市教委	447.0	6,318.00	5			
	H17	市教委	823.0	2,053.00	6			
	H27	市教委	126.7	20,192.79	8			

文献

- 富山県埋蔵文化財センター 1995『富山県埋蔵文化財センター年報－平成6年度－』
- 富山県埋蔵文化財センター 1996『富山県埋蔵文化財センター年報－平成7年度－』
- 富山県埋蔵文化財センター 1997『富山県埋蔵文化財センター年報－平成8年度－』
- 富山県埋蔵文化財センター 2003『富山県埋蔵文化財センター年報－平成14年度－』
- 富山県埋蔵文化財センター 2005『富山県埋蔵文化財センター年報－平成16年度－』
- 富山県埋蔵文化財センター 2006『富山県埋蔵文化財センター年報－平成17年度－』
- 富山県埋蔵文化財センター 2015『富山県埋蔵文化財センター年報－平成26年度－』
- 富山県埋蔵文化財センター 2016『富山県埋蔵文化財センター年報－平成27年度－』
- 富山県埋蔵文化財センター 2017『富山県埋蔵文化財センター年報－平成28年度－』
- 富山市教育委員会 1995『富山市浜黒崎遺跡 野中新長幅遺跡・野田・平復遺跡』
- 富山市教育委員会 1996『富山市野田・平復遺跡 野中新長幅遺跡・宮条南遺跡・高島鳥浦遺跡』
- 公益財團法人富山県文化振興財團 2016『平成27年度埋蔵文化財年報』
- 公益財團法人富山県文化振興財團 2017『平成28年度埋蔵文化財年報』
- 公益財團法人富山県文化振興財團 2017『平復亀田道路発掘調査報告－県営農地整備事業平復地区に伴う埋蔵文化財発掘報告書I－』



第2図 調査位置図 (1/5,000)



第3図 グリッド図 (1/4,000)

調査は、平成28年度当初、平榎龜田遺跡C3地区・D地区、浜黒崎野田・平榎遺跡A・B・C地区、横越水窪遺跡A地区の3遺跡6地区の予定で着手した。横越水窪遺跡A地区から調査を開始したが、早い段階で浜黒崎野田・平榎遺跡においてA地区およびC地区の一部が工事計画の変更により調査対象外となり、新たに遺跡最南端の平榎龜田遺跡A4・A5地区が追加され、さらに工期終盤に市道平榎東1号線工事に係りC3-2・C3-3・C4・C5地区、同平榎東2号線工事に係りC6・C7地区の調査地が追加された。平成29年度は平榎龜田遺跡C8・C9地区、浜黒崎野田・平榎遺跡D1・D2地区、横越遺跡A地区の3遺跡5地区を調査した。横越遺跡、浜黒崎野田・平榎遺跡D2地区、平榎龜田遺跡C9・C8地区と調査を進め、条件整備に時間を要した浜黒崎野田・平榎遺跡D1地区が最終調査地となった。

3 整理作業の経過と方法

各年度の発掘調査終了後、応急的な整理作業として出土遺物の洗浄・注記・仕分けを調査員が行い、木製品・石製品・金属製品・ガラス製品については各製品台帳、図面・写真については資料台帳を作成し、パソコンコンピューターを使用してデータ入力を行った。調査概要是、『埋蔵文化財年報』（平成28年度）として発刊している。

平成28年度の本格的な整理作業は平成29年1月から開始し、遺物実測、遺構の挿図作成、自然科学研究、原稿執筆を行った。平成29年度は12月から開始し、遺物実測、報告書掲載用挿図作成、遺物写真撮影、原稿執筆を行った。作成した挿図の一部を派遣オペレーターがデジタルデータ化して印刷原稿とした。遺物・遺構のデータは観察表として掲載している。

第4表 整理体制

実施年度	調査事業担当				
	総括	所長	岸本雅敏	整理総括	調査課長 島田美佐子 副主幹 田中道子
平成28年度 (2016)	総務	總務課長 主査	松尾瓦 青山晃	担当	主査 金三津道子 主査 高柳由紀子
	総務	所長	岸本雅敏	整理総括	調査課長 島田美佐子
平成29年度 (2017)	総務	主査	青山晃	担当	副主幹 田中道子 主査 町田賢一
	総務				

4 普及活動

調査成果報告会 平成29年3月11日（土）

発掘調査及び遺物整理の最新成果を広く一般に公開するもので、平成28年度は県内3遺跡の発掘調査と2遺跡の遺物整理成果を報告し、県内外から70名余の参加があった。平榎龜田遺跡外については、発掘調査によって明らかになった3遺跡の概要説明と出土土器などを展示・解説した。
(田中道子)



第Ⅱ章 位置と環境

1 地理的環境

平榎亀田遺跡、浜黒崎野田・平榎遺跡、横越水窪遺跡、横越遺跡は、富山市街地の北東8kmほどの富山市平榎及び野田地内に所在する。遺跡は、富山県のほぼ中央部を北流する常願寺川左岸の平野部に立地する。神通川と常願寺川により形成された複合扇状地末端の低地部で、北方1.5~2kmには日本海が広がる。常願寺川は、日本屈指の暴れ川として知られ、氾濫の度に川筋を変えてきた。明治24(1891)年の大洪水を期に国から派遣された技術者ヨハネス・デ・レーケにより、東に大きく蛇行していた河道が、白岩川と分離され、現在のようにまっすぐ日本海に流れる形に改修された。遺跡は、現在では常願寺川左岸縁に位置するが、このデ・レーケ改修前の河道からはやや西に離れた位置にある。平榎亀田遺跡一帯は、常願寺川左岸の扇状地扇端部、氾濫平野にあたり、平榎亀田遺跡外の標高は4~6mを測る。遺跡は網目状に広がる常願寺川の旧河道の間に点在する微高地から現常願寺川左岸にかけて広がり、調査区の多くは自然堤防状の微高地上に位置する。

2 歴史的環境

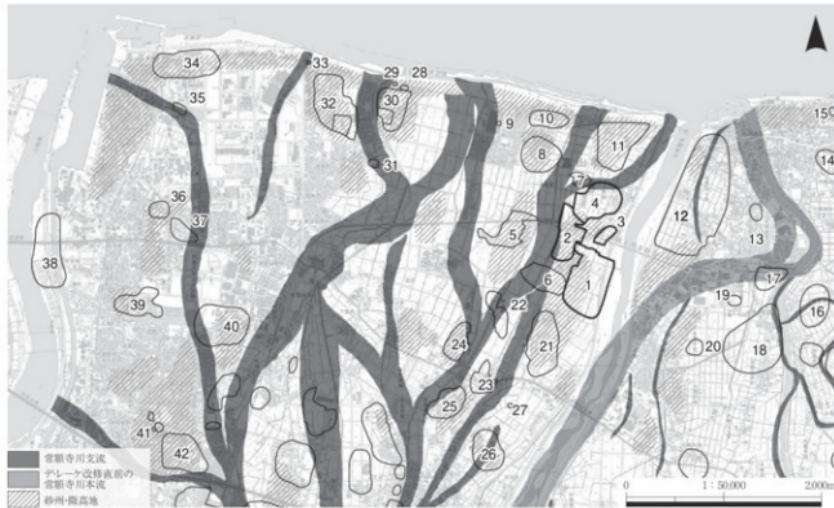
平榎亀田遺跡外が位置する常願寺川扇状地の扇端地域では、遺跡の分布状況が海岸部の古代を中心とする遺跡群、海岸からやや内陸に入った縄文時代後~晩期、弥生時代に出現し、古代に最も発展し中世まで継続する遺跡群、内陸の古代、中世を中心とする遺跡群という3群に大きくまとまる。

旧石器~縄文時代中期までの遺跡はほとんど知られておらず、神通川右岸の海岸砂丘部に晚期前半の岩瀬天神遺跡、やや海岸から離れた微高地上に後期~晩期の浜黒崎野田・平榎遺跡、高島島浦遺跡などがある。弥生時代~古墳時代には海岸部の日方江遺跡、やや海岸から離れた微高地上の浜黒崎野田・平榎遺跡、浜黒崎悪地遺跡、高島島浦遺跡、千原崎遺跡などの集落が営まれ、内陸の農田地区には古墳時代前期の方墳とされているちょうちょう塚、湿地の肩部に豊田大塚・中吉原遺跡などがある。

古代では海岸部の高来遺跡、浜黒崎町畠遺跡、水橋荒町・辻ヶ堂遺跡、海岸からやや離れた内陸に浜黒崎野田・平榎遺跡、針原中町I遺跡、米田大覚遺跡など多数の遺跡がある。水橋荒町・辻ヶ堂遺跡は『延喜式』記載の越中八駅の1つ「水橋駅」の推定地、米田大覚遺跡は越中国新川郡衙(郡家)あるいは磐瀬駅の推定地とされており、神通川と常願寺川に挟まれた低地部には、官衙的、祭祀的な性格の遺跡が多いことから、古代新川郡の中心地域と考えられる。

中世では海岸部に浜黒崎飯田遺跡、日方江遺跡、大村遺跡、そうけ塚、やや内陸に横越水窪遺跡、水橋伊勢屋B遺跡、宮条南遺跡、針原中町I遺跡、宮町遺跡などがあり、常願寺川左岸では中世集落が密集している。中世後半には海岸部に日方江城、大村城、東岩瀬城、やや内陸に平榎城、新庄城、小西北遺跡などの城館が築かれ、平榎城は平榎亀田遺跡周辺に比定されている。これらの城館は海岸部を通る浜街道や内陸部の北陸街道沿いの交通の要衝に面し、戦国期には軍事上の拠点となつた。近世には平榎亀田遺跡外周辺は加賀藩領新川郡で、常願寺川・神通川両河川の運んだ土壌により生产力が高く、大規模な村が多い。その一方で明治~昭和にかけても大雨の度に氾濫が繰り返され、常に常願寺川の水害に悩まされてきた地域でもある。

(田中道子)



第4図 周辺の地形と遺跡（1/50,000）

富山市教育委員会2002『木橋町・北ノ堂遺跡』第2回を基に加筆

第5表 周辺の遺跡一覧

遺跡名	種類	時代	遺跡名	種類	時代
1 平根龜山	集落、城郭、防衛施設	縄文、後、古墳、奈良、平安、中世、近世	23 別屋中町 I	集落	縄文（後）、弥生（中）、古墳、奈良、平安、中世、近世
2 法界寺跡・平根	集落	縄文（中～後～前）、弥生、古墳（後）、奈良、平安、中世、近世	24 高島	城郭	縄文（後～前）、弥生、古墳、奈良、平安
3 梶原水原	集落	中世	25 別屋中町 II	集落	縄文（後）、弥生、古墳（後）、奈良、平安、中世、近世
4 梶原	集落	縄文（後）、奈良、平安、中世、近世	26 宮城	城郭	奈良、平安、中世、近世
5 法界寺跡	集落	縄文（後）、奈良（中）、古墳（後）、奈良、平安、中世、近世	27 別屋中町中性寺	城郭	中世、近世
6 野中新幹線	集落	縄文（後）、弥生、古墳（後）、奈良、平安、中世、近世	28 日方江日	城郭	奈良、平安
7 法界寺跡II	城郭	縄文（後～前）、弥生、古墳（後）、古代	29 不今町塚	城郭	中世
8 法界寺跡II	城郭	奈良、平安、中世、近世	30 日方江	集落	縄文（後～前）、弥生、奈良、平安、中世
9 法界寺	城郭	奈良、平安、中世	31 宝来寺	城郭	日方江城跡
10 法界寺跡	城郭	奈良、平安	32 大村	集落	中世
11 玉米	集落	縄文（後）、奈良、平安、近世	33 五村城跡	城郭	平安（後）、奈良、平安、中世、近世
12 水橋寺跡・法ノ堂	集落、官署	縄文（後）、奈良（後）、古墳、奈良、平安、中世、近世	34 桶狭瀬	城郭	中世
13 水橋寺	城郭	水、内郭、近世	35 別屋大寺	集落	縄文（中～後）、奈良（後）、古墳（後）、奈良、平安、中世、近世
14 水橋寺跡	城郭	平安、中世	36 茅ヶ崎	城郭	近世
15 水橋寺跡	城郭	奈良、平安	37 別屋大寺II	城郭	縄文（後～前）、奈良（後）、古墳（後）、奈良、平安、中世、近世
16 水橋寺跡	城郭	奈良、平安	38 開	城郭	縄文（後）、奈良、平安、近世
17 水橋寺跡	城郭	縄文（後）、奈良、平安、中世	39 通町	城郭	奈良、平安、中世、近世
18 水橋寺跡II	城郭	縄文（後）、奈良、平安、中世	40 田中大堤	集落	縄文、奈良、平安、中世、近世
19 在原	城郭	中世、奈良	41 ちきょうよし塚	古墳	古墳（前）
20 在原中村	城郭	奈良、平安	42 西田大寺・中吉原	集落	縄文（後）、奈良（後）、中世、近世
21 在原	集落	縄文（後～前）、弥生（中）、古墳（後）、奈良、平安、中世、近世	43 西田大寺・中吉原	集落	縄文（後）、奈良（後）、中世、近世
22 在原周辺	集落	縄文（後）、弥生、古墳（後）、奈良、平安、中世、近世			

参考文献

公文書館による富山市文化財調査報告書「2017「平根龜山遺跡発掘調査報告書」-富根龜山遺跡の整備案」、国土交通省古跡保存課「2006「古跡整理する上に加筆の実業」」

高橋 順 2014「我が国における古庄屋・武将の痕跡」『富山考古学資料選編』第33号 富山市考古資料組

武将首次公認 1998「富山市における遺跡群の質問」『富山考古学研究』第14号（財）富山市文化財振興会振興会事務所

富山市 1983「富山市史 安治編」近松 下

富山市 1990「富山市史 第1回富山県地誌図説」

富山県教育委員会 1980「富山県歴史の調査会報告書」北洋街道

富山市 1987「富山市史」通史（上巻）

富山県教育委員会 1994「富山市史」法界寺跡遺跡発掘調査報告書

富山県教育委員会 1995「富山市史」奈良高島城跡・別屋中町 I 遺跡・計別屋中町 II 遺跡

富山県教育委員会 1996「富山市史」奈良高島城跡・別屋中町 II 遺跡・計別屋中町 III 遺跡

富山県教育委員会 1999「富山市史」別屋中町 I 遺跡・奈良高島城跡報告書

富山県教育委員会 2001「富山市史」別屋中町 II 遺跡・奈良高島城跡報告書

富山県教育委員会 2002「富山市史」別屋中町 III 遺跡・奈良高島城跡報告書

富山県教育委員会 2002「富山市史」水橋寺跡・二ノ山遺跡発掘調査報告書

富山県教育委員会 2005「富山市史」二ノ山遺跡発掘調査報告書

富山県教育委員会 2006「富山市史」水橋寺跡発掘調査報告書

富山県教育委員会 2010「富山市史」大通跡・奈良高島城跡報告書

富山県教育委員会 2013「富山市史」大通跡・奈良高島城跡報告書

富山県教育委員会 2013「富山市高島跡」所蔵・近松記念墓地所在地周囲

深見第三・米尾、著 2004「くるると富山市史研究」富山市開拓社

参考文献2は2011「立山カルデラ跡跡博物館研究会」第12号「立山カルデラ跡跡博物館研究会」第12号

第Ⅲ章 平榎龜田遺跡

1 概 要

A 平成28年度調査

平榎龜田遺跡は常願寺川左岸の平野部に位置し、あいの風とやま鉄道の南側に広がる。調査区は遺跡範囲の南端、中央、北端に点在する。現況は水田・水路で、水路工事部分を対象に調査を行った。

調査区は10箇所あり、平成27年度の発掘調査に統いて地区名を付け、南端をA 4・A 5地区、中央をC 3・C 3-2・C 3-3・C 4・C 5・C 6・C 7地区、北端をD地区とした。C 3-2・C 3-3地区はC 3地区調査完了後に追加された隣接地区に便宜的に付した地区名で、調査後はC 3地区に一括している。A 4・A 5・D地区は南、C 3・C 6地区は西、C 3-2・C 4・C 5・C 7地区は東を起点、C 3-3地区はC 3-2地区に続く地区で、C 3地区1.5m地点を東端の起点とし、起点からの距離を基準に調査を行ったが、調査後は座標に変換した。検出面の標高はA 4・A 5地区が4.1~4.6m、C 3・C 4・C 5・C 6・C 7地区が3.8~4.5m、D地区が4.0~4.3mで、若干高低差はあるが地点間に大きな差ではなく、ほぼ平坦な地形である。

遺構は溝41条、土坑24基を検出した。遺物の量は少ないが、縄文土器から近世の土器・陶磁器、木製品、石製品、金属製品、ガラス製品がある。
(高柳由紀子)

B 平成29年度調査

調査区はC 8・C 9地区の2地区で、遺跡範囲の中央に位置し、平成27年度に調査したC 1地区北半部およびC 2地区の東側に位置する。現況は水路および農道である。検出面の標高はC 8地区が4.0~4.2mで、C 9地区が4.3mである。地山からは湧水し、遺構検出は困難を極めた。

C 8地区的遺構は溝9条、土坑3基、遺構の時期は中世～近代。遺物は土師器6(63g)、須恵器4(177g)、近世以降陶磁器1(32g)、羽口1(45g)の計12点(317g)が出土。このうち実測を行ったのは、全体の25%にあたる12点である。

C 9地区的遺構は溝8条、土坑8基、遺構の時期は中世～近代。遺物の出土した遺構が調査区北側に集中することから、集落により近いと考える。遺物は土師器15(87g)、須恵器5(19g)、瀬戸美濃1(33g)、中国製青磁1(166g)、近世以降陶磁器5(1,581g)、漆器碗1(26g)の計29点(1,920g)が出土。このうち実測を行ったのは、全体の24%にあたる29点である。
(田中道子)

2 層 序

A 平成28年度調査

基本層序は、I a層：灰黄色砂質シルト・灰白色砂質土～砂・黄灰色シルト（耕盤土・盛土）、I b層：黒褐色シルト・暗褐色シルト・灰黃褐色粘土質シルト～粘質土（盛土）、I c層：黒褐色粘土質シルト・暗褐色砂質シルト・黒褐色シルト・黒色シルト（盛土）、II層：黒褐色粘土質シルト（遺物包含層）、III層：にぶい黄色粘土質土～砂質土・黄褐色砂質シルト～砂質土・明黄褐色粘土質シルト～シルト（地山）となる。現況の表土（耕作土）は、ほ場整備本体工事業者により発掘調査前に除去されたため記録していない。
(高柳由紀子)



第5図 平櫻龟田遺跡遺構図 (1/2,500)

B 平成29年度調査

C 8 地区の基本層序は I a 層：暗灰黄色砂質シルト（表土）、I b・c 層：黄褐色または暗灰黄色砂質シルト（盛土）、II a・b 層：黒褐色シルト（遺物包含層）で、地山は北側がオリーブ黄色粘土質シルト（III a 層）、南側が明黄褐色砂質シルトとなっている。

C 9 地区の基本層序は I a 層：暗灰黄色砂質シルト（表土）、I b～d 層：黄褐色または暗灰黄色砂質シルト（盛土）、II a・b 層：黒褐色シルト（遺物包含層）で、地山は明黄褐色砂質シルトとなっている。
(田中道子)

3 遺構

A 平成28年度調査

(1) 溝

701号溝（SD701、第16図）

D 地区南端に位置し、南西から北東へ延びる。幅1.12m、深さ0.18mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物はない。

702号溝（SD702、第16図）

D 地区南端に位置し、西から東へ延びる。幅1.00m、深さ0.18mを測る。埋土はSD701と同様に黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物はない。

719号溝（SD719、第16図）

D 地区中央に位置する。SD735と同様に、調査区内で最も年代の新しい溝である。幅0.8m、深さ0.8mを測る。上層は以前のは場整備の際に埋められているため、埋土は I a 層で、下層は黒褐色粘土質シルト・黒色粘土質土を基調とする。横越水窪遺跡SD32や浜黒崎野田・平復遺跡SD107上層と同様に昭和21年以前に埋められた溝と考える。その他の遺構はこれよりも古く、中近世と考える。出土遺物はない。

727号溝（SD727、第16図）

D 地区北側に位置し、幅0.57m、深さ0.12mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。遺物は土師器、中世土師器が出土した。

730号溝（SD730、第16図）

D 地区北側に位置し、幅0.78m、深さ0.24mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。遺物は土師器、須恵器、中世土師器、唐津、伊万里が出土した。

732号溝（SD732、第16図）

D 地区北端に位置し、幅0.57m、深さ0.09mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。遺物は中世土師器、珠洲が出土した。

735号溝（SD735、第16図）

D 地区南端のSD701とSD702の間に位置し、幅1.54m、深さ0.60mを測る。SD719と同様に、調査区内で最も年代の新しい溝である。上層は以前のは場整備の際に埋められたため、埋土は I a 層で、下層は黒褐色粘土質シルト・暗褐色シルト・黒色粘土質シルト・黒褐色粘土質土を基調とする。溝の底部が地山の上面の高さにあり、断面でのみ確認した。横越水窪遺跡SD32や浜黒崎野田・平復遺跡SD107上層と同様に、昭和21年以前に埋められた溝と考える。その他の遺構はこれよりも古く、中近世と考える。

る。出土遺物はない。

801号溝 (SD801、第16図、図版4)

市道平榎東1号線とほば重複する東西水路で、C3地区東側のほか、C4・C5の各地区に渡って検出した。C4・C5地区ではSD801のみを検出した。幅6.50m、深さ0.77mを測る。埋土は暗褐色粘土質シルト～シルトを基調とする。は場整備の際の盛土の一つであるIb層を切っており、Ib層の下で検出されたSD804～SD808よりは新しく、近世・近代以降の溝である。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、中世土師器、珠洲、瀬戸、中国製白磁、中国製青磁、瓦質土器、越前、越中瀬戸、唐津、伊万里、近代陶磁器、土製品、木製品、石製品、金属製品、ガラス製品が出土し、特に近世・近代以降のものが多い。

804号溝 (SD804、第16図)

C3地区東側に位置し、幅0.82m、深さ0.28mを測る。埋土は上層が黒褐色粘土質シルト～シルト、下層が黒色粘土質土を基調とする。SD801に切られ、中近世の造構と考える。出土遺物はない。

805号溝 (SD805、第16図)

C3地区東側に位置し、幅2.70m、深さ0.72mを測る。埋土は上層が暗オリーブ褐色シルト・暗褐色シルト～粘土質シルト・黒褐色粘土質土～砂質シルト、下層が黒褐色砂質土を基調とする。SD801に切られ、中近世の造構と考える。遺物は土師器、中世土師器(105・106)、珠洲、越中瀬戸、木製品、石製品(107)が出土。

806号溝 (SD806、第16・17図)

C3地区西側に位置し、幅4.04m、深さ0.73mを測る。埋土は上層が黒褐色粘土質シルト～シルト・黒色粘土質土、下層が黒褐色砂質土～粘土質土を基調とする。SD801に切られ、中近世の造構と考える。遺物は縄文土器(108)、弥生土器(109)、土師器、須恵器、珠洲(110・111)、越中瀬戸、伊万里、石製品が出土。

807号溝 (SD807、第17図)

C3地区西側に位置し、幅6.33m、深さ0.58mを測る。埋土は上層が黒褐色粘土質シルト～砂質シルト、中層がにぶい黄褐色砂質土、下層が黒褐色～黒色粘土質土を基調とする。切り合は見られなかつたがIb層よりも下で検出しており、SD801よりも古い造構であるため中近世の造構と考える。遺物は弥生土器、唐津が出土。

808号溝 (SD808、第17図)

C3地区西端に位置し、幅11.32m、深さ0.62mを測る。埋土は上層が黒褐色粘土質シルト、下層が黒褐色砂質土を基調とする。切り合は明瞭に見られないがIb層より下で検出しており、SD801より古いことから中近世の造構と考える。遺物は須恵器、中世土師器(112)、珠洲が出土。

901号溝 (SD901、第8図)

A5地区中央に位置し、幅0.41m、深さ0.15mを測る。埋土は褐灰色砂質シルトを基調とする。SD902・SD903を切る。出土遺物はない。

902号溝 (SD902、第8図)

A5地区中央に位置し、幅0.63m、深さ0.34mを測る。埋土は黒色シルトを基調とする。SD901に切られる。出土遺物はない。

903号溝 (SD903、第8図)

A5地区中央に位置し、幅0.60m、深さ0.45mを測る。埋土は黒色シルトを基調とする。SD901に切

られる。出土遺物はない。

1110号溝 (SD1110、第12図)

C 7 地区東端に位置し、残存幅0.65m、深さ0.5mを測る。市道平復東2号線と重複し、東壁面で溝の一部を確認した。埋土は褐色粘土質を基調とする。出土遺物はない。西側のC 1 地区SX402、C 8 地区SD2109の延長と考える。1946年（昭和21年）の航空写真では、SD1110付近には蛇行した細長い区画の水田があり、これが現在も同様な区画で存在する。SX402の出土遺物は土師器碗体部片ほか小片、珠洲鉢口縁部片、砾石である。

(2) 土坑

1101号土坑 (SK1101)

C 6 地区ほぼ中央に位置し、調査区北へ延びるため、不整形を呈する。出土遺物には弥生土器(120)、土師器(121・122)、須恵器、珠洲がある。

（高柳由紀子）

B 平成29年度調査

(1) 溝

1201号溝 (SD1201、第19図、図版9)

調査区南端にあり、ほとんどが調査区外で北肩部のみ検出。遺物は土師器(113)が出土。既刊報告書で堀として報告されたSD527^⑪に繋がるもので、検出した部分は底面が平坦であり、南側堀とみられる。一方、それに重複する薬研堀の北側堀は確認されなかった。

1202・1203号溝 (SD1202・1203、第19図)

調査区南側にあり、ともに南西-北東に流れる。出土遺物はない。

1204号溝 (SD1204、第19図)

調査区南側にある東西方向のもの。出土遺物はない。

1209号溝 (SD1209、第20図、図版9)

調査区北側にある南西-北東方向のもので、SD1210に切られる。南側が一段下がり、その底面付近から中国製青磁碗(115)が出土しており、中世の溝と考える。遺物は土師器3点(33g)、須恵器3点(5 g)、瀬戸1点(33 g)、中国製青磁1点(166 g)、越中瀬戸3点(66 g)が出土。

1210号溝 (SD1210、第19図、図版9)

調査区北側にある東西方向のもので、SD1209を切る。底面からほぼ完形の越中瀬戸描鉢(118)と漆器碗(119)が出土し、近世の溝と考える。遺物は土師器1点(6 g)、須恵器1点(11 g)、越中瀬戸2点(1515 g)、漆器1点(26 g)が出土。

1212・1213号溝 (SD1212・1213、第19図、図版9)

調査区北側にあり、南北方向に流れ、SK1211を切る。埋土は整地のため突き固めたように硬い層、その上部に焼土層があり、近世以降に生活の場として使われたと考える。出土遺物はない。

2109・2110号溝 (SD2109・2110、第18図、図版8)

埋土がⅢ a 層を切っており、近代以降の溝。SD2109からは土師器1点(11 g)が出土。それぞれ西側のC 1 地区SD424、同SD410に繋がるもので、現在の水路の流路と重複する水田関係の用水と考える。

2104～2108・2111・2112号溝 (SD2104～2108・2111・2112、第18図、図版8)

浅く、断面逆台形を呈するもので、SD2105はSX401につながる。出土遺物はないが、西側のC 1・C 2 地区の状況から、中世～近世と考える。

(2) 土坑

1205号土坑 (SK1205)

調査区南側にあり、不整形を呈する。出土遺物はない。

1206号土坑 (SK1206、第15図)

調査区南側にあり、東側が調査区外で全形は不明。出土遺物はない。

1207・1208号土坑 (SK1207・1208、第15図)

調査区南側にあり、西側が調査区外で全形は不明。出土遺物はない。

1211号土坑 (SK1211、第15図、図版9)

調査区北側にあり、楕円形を呈し、SD1213に切られる。土師器1点（3 g）が出土。遺構の時期は古代～中世と考える。

1214号土坑 (SK1214)

調査区北側にあり、楕円形を呈する。出土遺物はない。

1215・1216号土坑 (SK1215・1216、第15図)

調査区北側にあり、いずれも浅い。出土遺物はない。

2101～2103号土坑 (SK2101～2103、第15図、図版8)

調査区北側にあり、円形を呈し、浅い。いずれも出土遺物はないが、C9地区の遺構時期から中世～近世と考える。

4 遺物

A 平成28年度調査

縄文時代～近世までの遺物が出土しており、SD801から出土した遺物がその主体となる。包含層出土遺物は2箇年分を本項で記述する。

SD801（第21～27図、図版10～12）

1は縄文土器。2・3は弥生土器。2は高杯で、外面にわずかに赤彩が残る。3は平縁甕。摩耗が激しく、調整は不明。4・5は土師器。4は挽口縁部。外に開く体部から屈曲して端部が立つ。いずれも摩耗が激しい。9世紀代のものか。6～17は須恵器。6～8は蓋。6・8は頂部にヘラケズりがあり、8は紐を欠損する。7は端部が丸く巻き込むもの。9・10は杯B。9は高台がやや内側につき、外にやや踏ん張る。10は高台が体部屈曲部の近くにつく。11は杯A。底部が厚く、体部が外に直線的に開く。12は双耳瓶。耳は単孔でのびる。13～15は壺。13は肩部に2条の沈線が巡る。14は頸部が剥離したもので、肩部が大きく張る。15は台付壺の高台。やや外に踏ん張る。16は横瓶。外面には細かいカキメがある。17は甕体部で、酸化して赤褐色を呈する。16を除けば9世紀代のもの。18～21は中世土師器皿。口縁端部を外につまみだし、尖るものが多い。20は内外面に厚くタール状の付着物があり、21は外面に炭化物が付着している。概ね16世紀のもの。22は中国製白磁の四耳壺。口縁部が外反し、端部を外に折り曲げる。23は龍泉窯系青磁碗。高台置付けとその内部は露胎で、砂粒が付着している。24～28は瀬戸戸。24は小壺の肩部。25は挽底部。高台部は露胎。26は底部内面の釉を拭い取った見込みに16弁菊花の印花文がある端反皿。27・28は灰釉の卸皿で、外面は露胎。29～39は珠洲。29・38は壺。29は口縁端部をわずかに下方に引き出す。30～34は甕。口縁部には方頭・円頭があり、34はくの字に折れる。35～37・39は片口鉢。37はI期のもの。40～65は越中瀬戸。40～42は鉄釉の丸椀。

43は筒形椀。44は天目茶碗。輪高台で露胎に鋸軸が掛かる。45~49・52・53・56・57は内禿皿。53・56・57の見込みには印花文があり、53は被熱により全面が炭化している。56の底部高台内面には「二」と墨書があるほか、57にも墨痕がある。55の内面見込みには重ね焼き痕がある。50・51・54は向付。59~65は擂鉢。口縁端部に緑帯があり、卸目は9~12本である。58は水滴。66~77は肥前陶磁。筒丸碗、広東碗や端反碗があり、文様は多様である。76・77は型押成形の方形水滴で、76は陽刻のもの。79は唐津の擂鉢。高台は高く、細かい卸目。80~82は瓦質陶器。80は香炉か。81・82は蓋で、83~85は土師質陶器。83は火鉢。84・85はバンドコで、85の透かし窓は粗雑に彫り込まれる。86~90は土鍤。89の端部には穴が穿たれている。

91~94は木製品。91は漆器椀。内面は赤色漆塗り、外面には家紋とみられる文様がある。92は一端を欠損した箸。93は中央に孔がある板。94は連歛下駄で、台は小判形で、歌は台と同じ幅で縦断面は方形。半身を欠損し、前歌はわずかに輪郭を残す。95~100は石製品。95は打製石斧。96~98は砥石。99は五輪塔の火輪、100は五輪塔の水輪。ともに盤痕がよく残る。101は寛永通寶。102は鉄滓。103・104は輪の羽口。先端部には溶着物が付着している。

SD805（第27図、図版13）

105・106は中世土師器皿。口縁端部をつまむ。107は硯。海部を欠損し、四隅は花形に装飾される。

SD806（第27図、図版13）

108は繩文土器。波状口縁で端部にキザミがあり、外面は横位条痕。晩期のもの。109は弥生土器の壺。頭部はタテハケ後ミガキ、肩部はヨコハケ後ケズリ。110・111は珠洲。110は四耳壺で、肩部に自然釉がかかる。111は壺で、口縁部はくの字に屈曲し、方頭で端部が下方にのびる。

SD808（第27図）

112は中世土師器皿。体部は直線的に大きく開き、口縁端部をつまむ。16世紀のもの。

SK1101（第28図、図版13）

120は弥生土器の高杯。内外面とも摩耗が激しい。121・122は土師器の壺。口縁端部を面取りする。包含層出土（第28~32図、図版14~15）

123~130は弥生土器。123・124の高杯の脚部、125の有段鉢、127の擬凹線甕には赤彩がわずかに残る。128・129は口縁端部に刺突がある。131~142は須恵器。131・132は杯蓋で、131は端部を小さく折曲げ、132は三角形である。133~136は杯B。高台は低く小さい。138は高台付の皿。139は口縁が大きく開く鉢か。140~142は壺。140は肩が張らず、2本の沈線が巡る。141の体部外面はケズリ。142は低いが外に踏ん張る高台。9世紀後半~10世紀が主体である。143~150は土師器。143は底部回転系切の椀か。144は鍋で、口縁端部を巻き込むもの、145~150は壺で、口縁端部の形態は丸く、巻き込むものが多い。10世紀のもの。151~161は中世土師器。体部が大きく開き、口縁端部を引き出し尖るものが主体である。153・161は外面に炭化物が厚く付着している。162・163は龍泉窯系青磁碗。163は見込みに双魚の貼付文（凸文）、外面に片彫り蓮弁文がある。164~167は瀬戸。164は卸皿。165~167は丸皿。166の口縁端部は肥厚し面取りされており、壺の口縁端部に似る。15世紀後半~16世紀のもの。168~181は珠洲。169~174は壺で、口縁部がくの字に屈曲するⅢ期のもの。175~181は片口鉢。175・177は口縁端部を面取りする外傾口縁。176・178は口縁端面が肥厚し内傾するもの。179~181は静止糸切りの底部。182~205は越中瀬戸。182~197は皿。内禿皿が主で、192は内面見込みに印花文、193・194は底部高台内部に墨書がある。198は鉄釉と灰釉の掛け分けがあるひだ皿。199・200は鉄釉の鉢とみられ、200は付高台。201・202は鉄釉の壺。203は鋸軸の擂鉢で、口縁部を折り返す。204

は鉄軸の陶鍤で、両端は露胎。206～215は伊万里。206～212は碗。罐反碗や筒丸碗が主で、文様は多样である。210・211は揃い碗。213～215は皿。216～218は土鍤。219は轆の羽口。先端部に溶解物が付着する。220は砾石で、被熱している。221は小柄。全面に緑青がみられる。222は和鏡。「亀鈕菊花双雀鏡」で、表面に緑青がみられる。223～225は鉄滓。

B 平成29年度調査

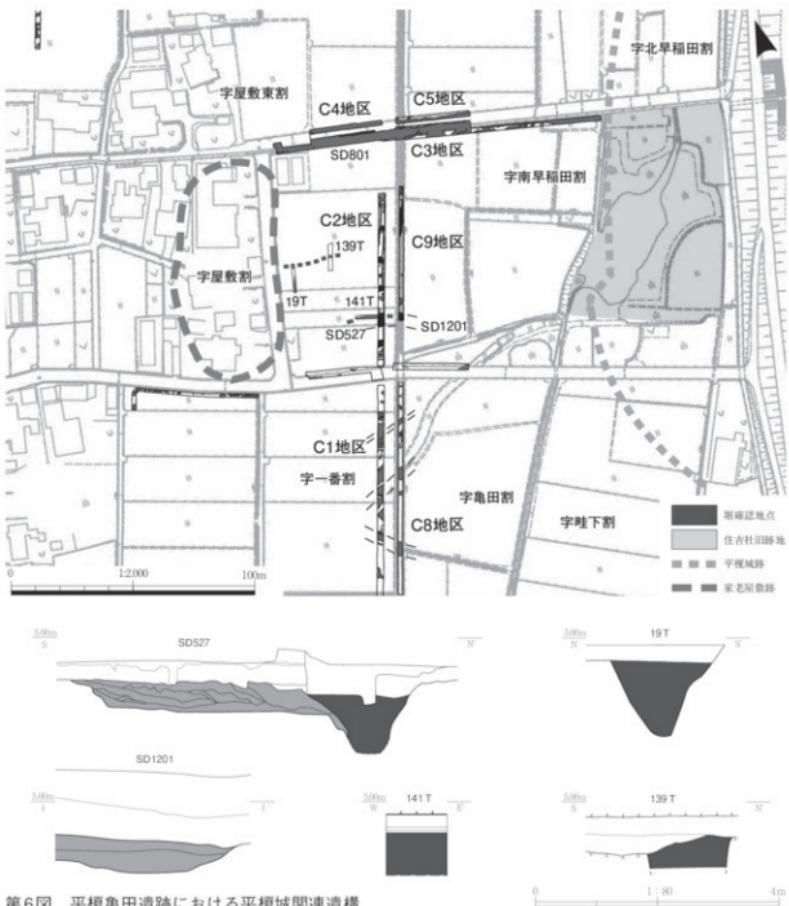
古代～近世の遺物が主に溝から出土したが、出土量は少ない。

SD1201（第27図、図版13）

113は土師器椀で、回転切約の底部。

SD1209（第27図、図版13）

114は瀬戸。香炉もしくは匣鉢の底部で、外面に灰釉が掛かる。115は龍泉窯系青磁椀。外面にヘラ書き文、内面見込みに草花文の印刻がある。高台外端を斜めに面取りし、高台内部を釉剥ぎする。断



第6図 平櫻龜田遺跡における平櫻城関連遺構

笠山市教育委員会作成の試掘トレンチ位置図・平面図・土層図を参考とした。

面には塗接ぎの痕跡がある。116は越中瀬戸。内面見込みに16弁菊印花文がある灰釉の皿。

SD1210（第28図、図版13）

117・118は越中瀬戸。117は灰釉の内禿皿。内面見込みには16弁菊印花文、重ね焼き痕がある。118は描鉢で、口縁端部外方の縁帯部下端が垂下し、内面には12本1単位の卸目が施される。119は漆器碗の底部。高台端部は欠損しているが、底部の厚みはない。内面見込みに赤色漆の紅葉、高台内部にも赤色漆で「一」が描かれる。

5 総 括

平樅亀田遺跡の発掘調査は3カ年にわたり実施したが、わずかな範囲の調査から広大な遺跡の全体像をとらえるのは困難である。既刊報告書では時期別の遺物分布状況から、C1・C2地区は各時代にわたり出土遺物が集中していることを指摘している¹²。北に位置するC3・C4・C5地区、東に位置するC8・C9地区での遺物分布状況も同傾向である。また、平樅地区にあったと伝えられる「平樅城」との関連から、堀としたSD527は箱堀の南側堀とそれを切る断面V字状の薬研堀の北側堀が重複しているが、C9地区南端で検出したSD1201はその形状から南側堀につながるものと考える。一方で、市教委の試掘調査の19Tから139Tにつながる東西方向の薬研堀は幅1.6m、深さ1.2mで、それに並行して南に位置する141TとSD527の北側堀につながる薬研堀は幅1.6m、深さ1mであるが、SD1201の北では確認できなかった。C9地区には続かないことから、堀は屈曲する、または陸橋状に途切れるなどの可能性がある。平樅城が存在した時期に合致する遺物がまとまって出土することからも、平樅城および家老屋敷の一角である可能性は高い。

（田中道子）

注1 朝田ア紀子 2017「第Ⅲ章 道構・遺物」・金三津道子 2017「第V章 種括」「平樅亀田遺跡発掘調査報告－県営農地整理事業平樅地区に伴う埋蔵文化財発掘報告I－」公益財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所を参照。

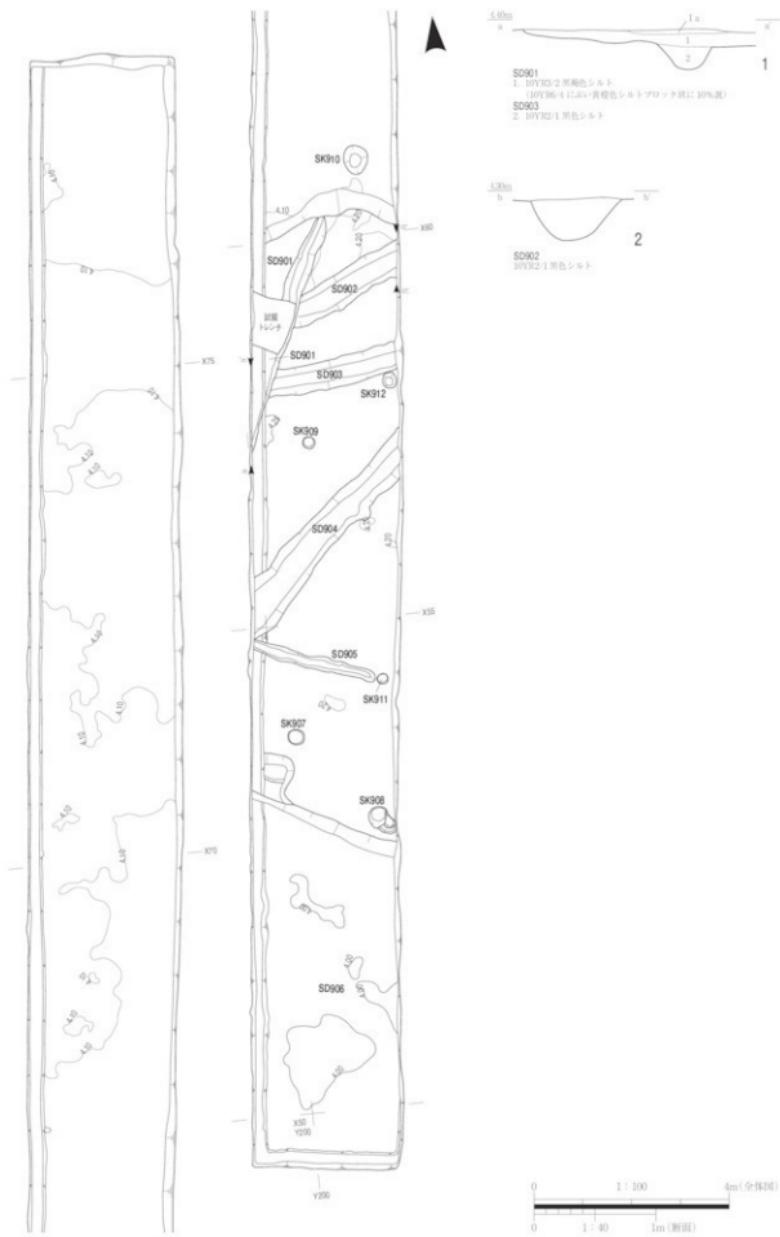
注2 金三津道子 2017「第V章 種括」『同上』同上を参照。

参考文献

- ＊本書で参考にしたものを一括して掲載する。
- 池野正男 2013「越中古代後半の土師器食器」「富山考古学研究」第16号 公益財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所
- 福島尚美・井伊浩一郎・新宅輝久・藤田慎一 2003「赤土1号遺跡発掘調査報告」小杉町教育委員会
- 内田ア紀子 1999「富山県の古代施釉陶器」「紀要 富山考古学研究 第2号」財团法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所
- 長田友也 2012「石棒の製作と流通」「季刊 考古学 第119号」姫山閣
- 鹿島昌也 1996「富山市野田・平樅遺跡・野中新長幅遺跡・宮森南遺跡・高島鳥浦遺跡」富山市教育委員会
- 金三津道子・朝田ア紀子 2017「平樅亀田遺跡発掘調査報告」「平成27年度埋蔵文化財年報」
- 九州近世陶磁学会 2000「九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－」三光
- 古吉弘 2001「煙管」『JR西日本考古学研究事典』江戸遺跡研究会
- 公益財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所「平成27年度埋蔵文化財年報」
- 公益財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所「平成28年度埋蔵文化財年報」
- 後藤信祐 1986「繩文後晩期の刀劍形石製品の研究(上)」「考古学研究 第33巻 第3号」考古学研究会
- 小林高範・堀沢祐一 1995「富山市浜黒崎悪地遺跡・野中新長幅遺跡・野田・平樅遺跡」富山市教育委員会
- 齋藤孝正 2000「日本の美術 第409号」越州青花と銀輪・灰釉陶器」至文堂
- 太宰府市教育委員会 2000「【太宰府】美術館X V - 陶磁器分類編 -」
- 鏡盛英夫 1980「平樅城」小泉印刷所
- 富山県埋蔵文化財センター 2017「富山県埋蔵文化財センター年報 平成28年度」
- 富山市教育委員会埋蔵文化財センター 2017「富山市の遺跡物語 第18号」
- 永井久美男 『古世の出土銭II 分類図版編』兵庫県埋蔵銭調査会
- 永井久美男 『新版中世出土銭の分類図版』高志書院
- 齋藤良祐 1993「瀬戸大窯の時代」「瀬戸市史 陶磁史編四」
- 宮田進一 1997「第4節 越中瀬戸の変遷と分布」「中・近世の北陸－考古学が語る社会史－」桂書房
- 森隆 1991「近江系縁釉陶器縁釉陶器の編年と器形的系譜に関する若干の試論」「考古学雑誌 第76巻 第4号」日本考古學會
- 吉岡康暢 1994「中世須恵器の研究」「吉川弘文館
- 山本正敏・鳥田美佐子・横山和美・中川道子・越前慎子 1996「梅原胡麻堂遺跡発掘調査報告(遺物編)」財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所



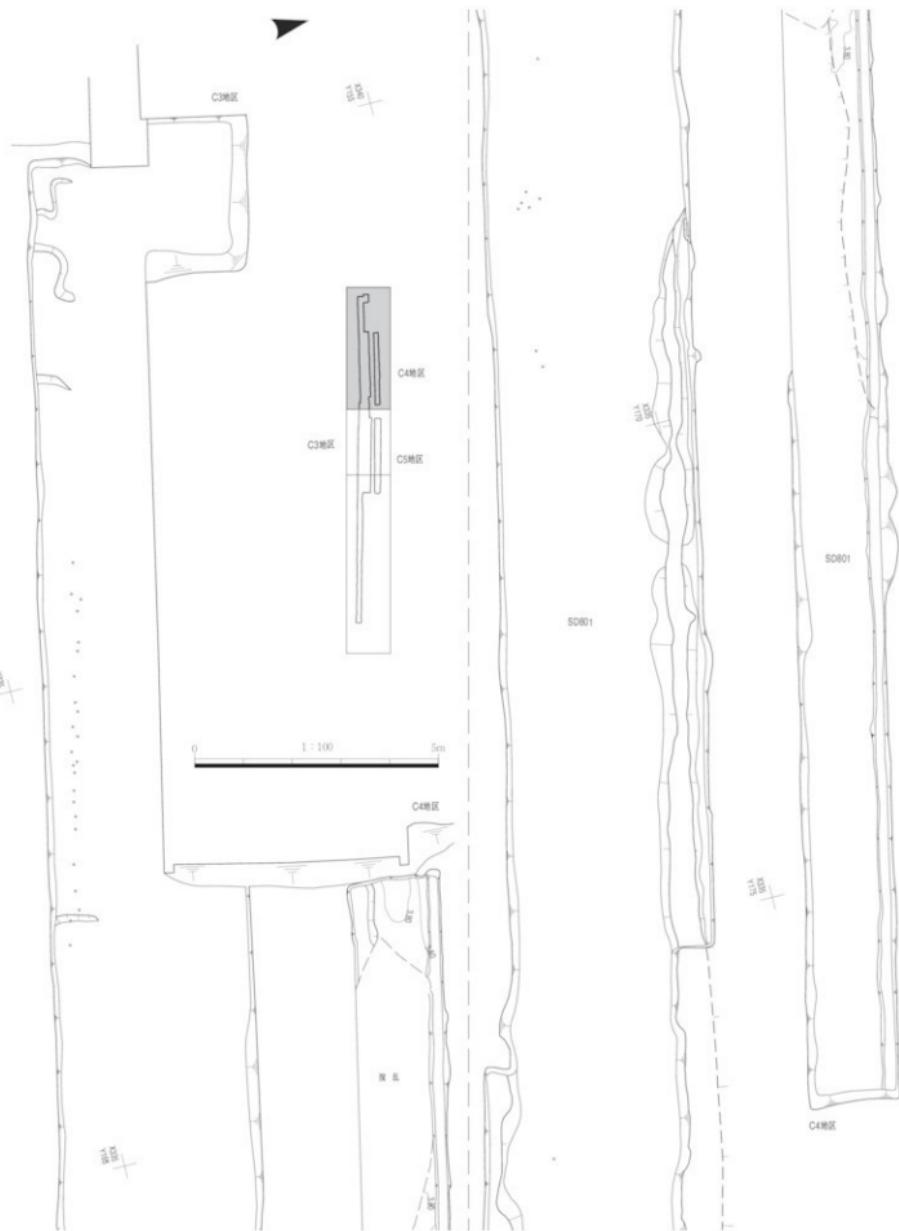
第7図 平櫻龜田遺跡 全体図 (1/100)
A4地区



第8図 平樅龜田遺跡 全体図・遺構実測図 (1/100・1/40)

A5地区

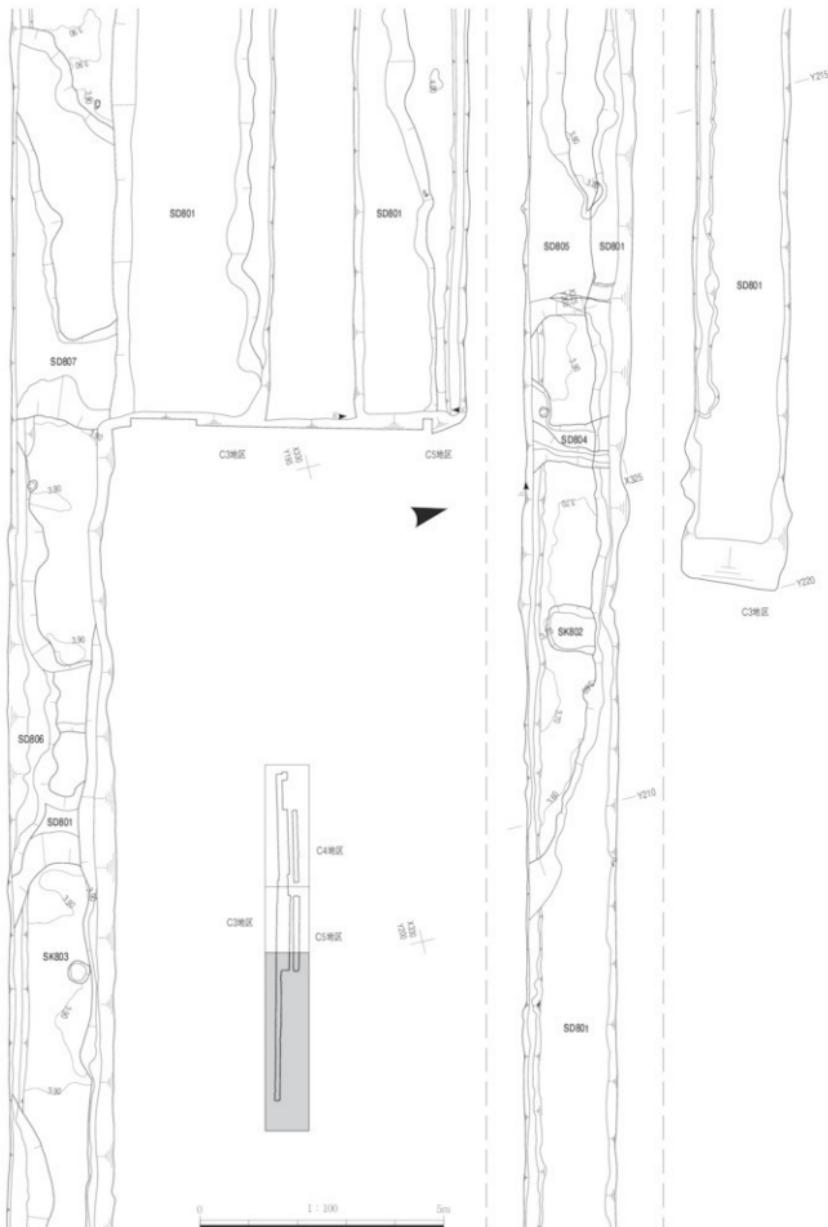
1. SD901・903 2. SD902



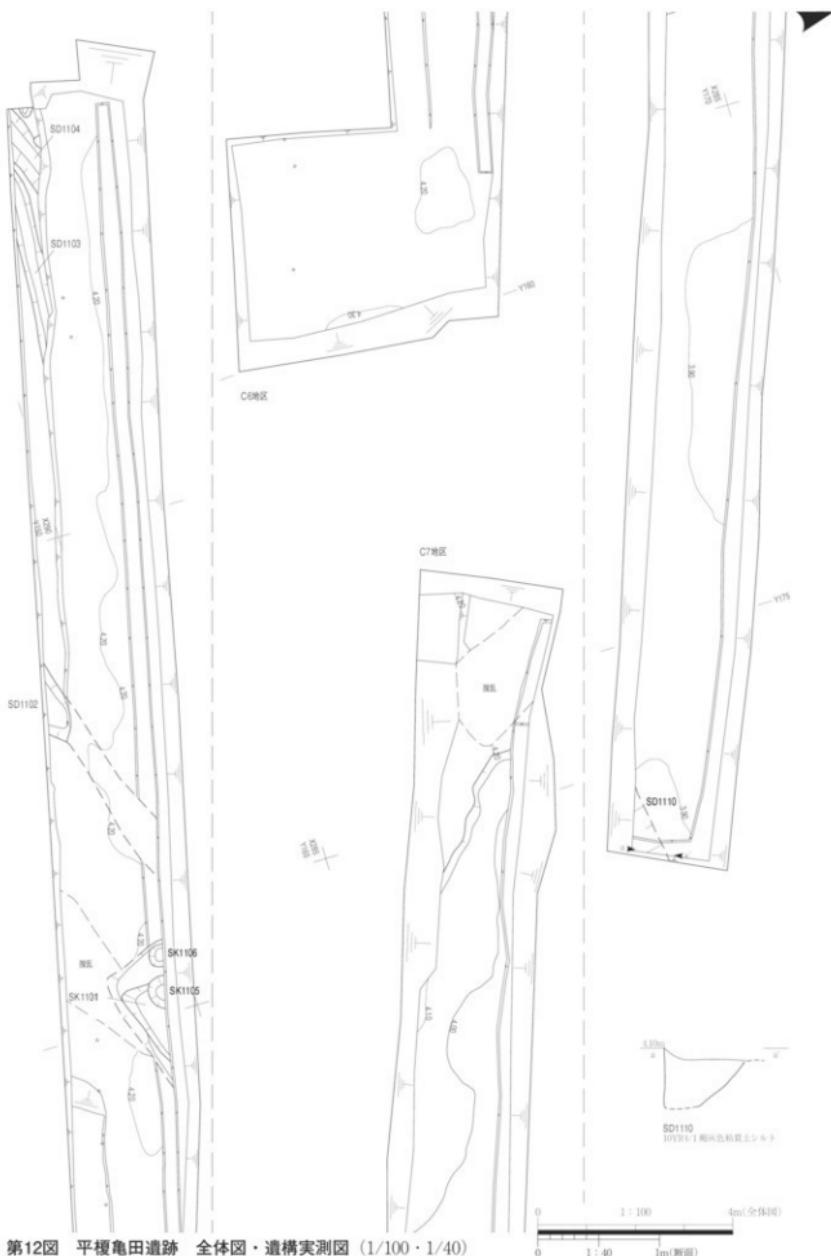
第9図 平櫻龜田遺跡 全体図 (1/100)
C3・C4地区



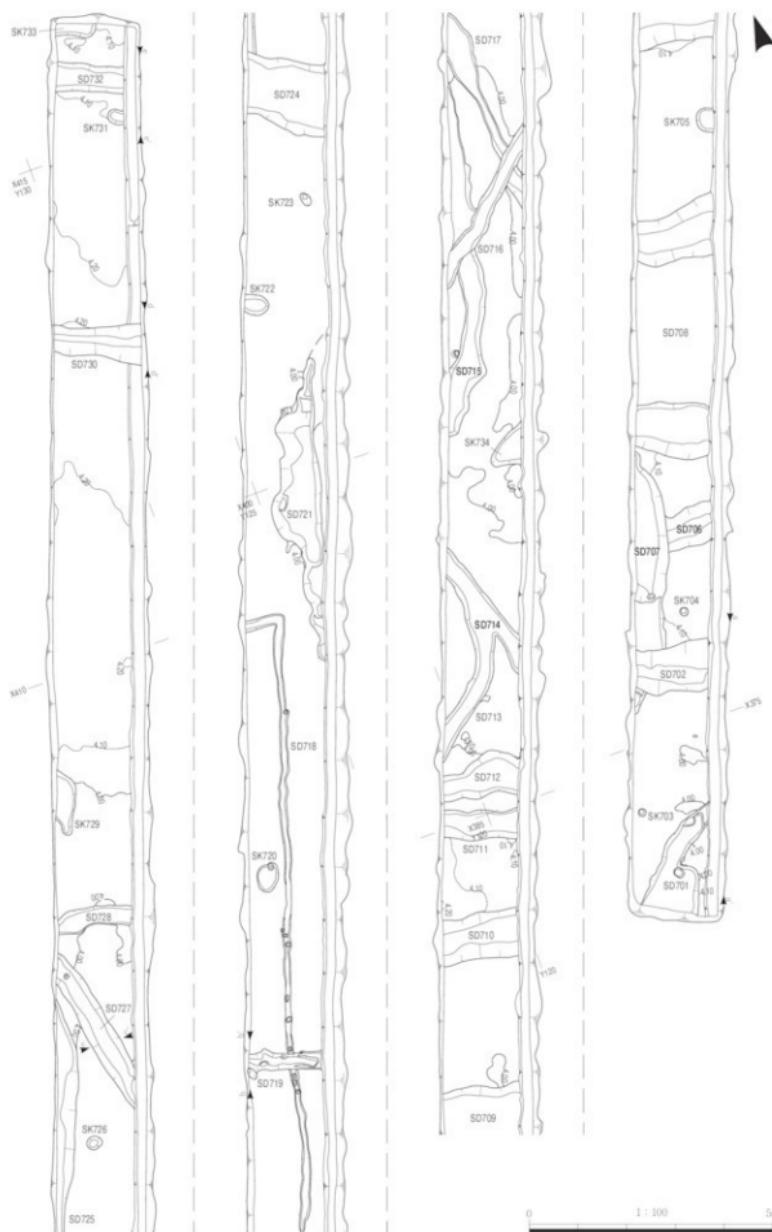
第10図 平櫻龜田遺跡 全体図 (1/100)
C3・C5地区①



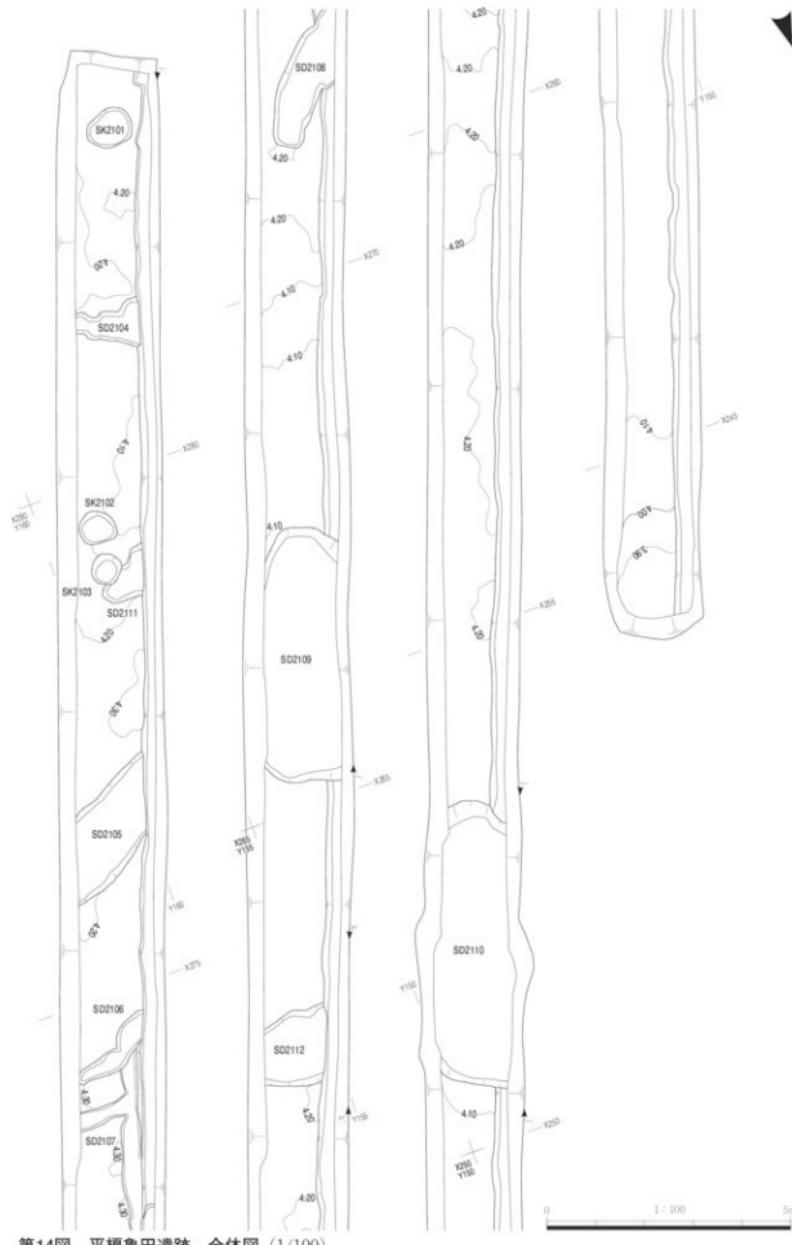
第11図 平櫻龜田遺跡 全体図 (1/100)
C3・C5地区(②)

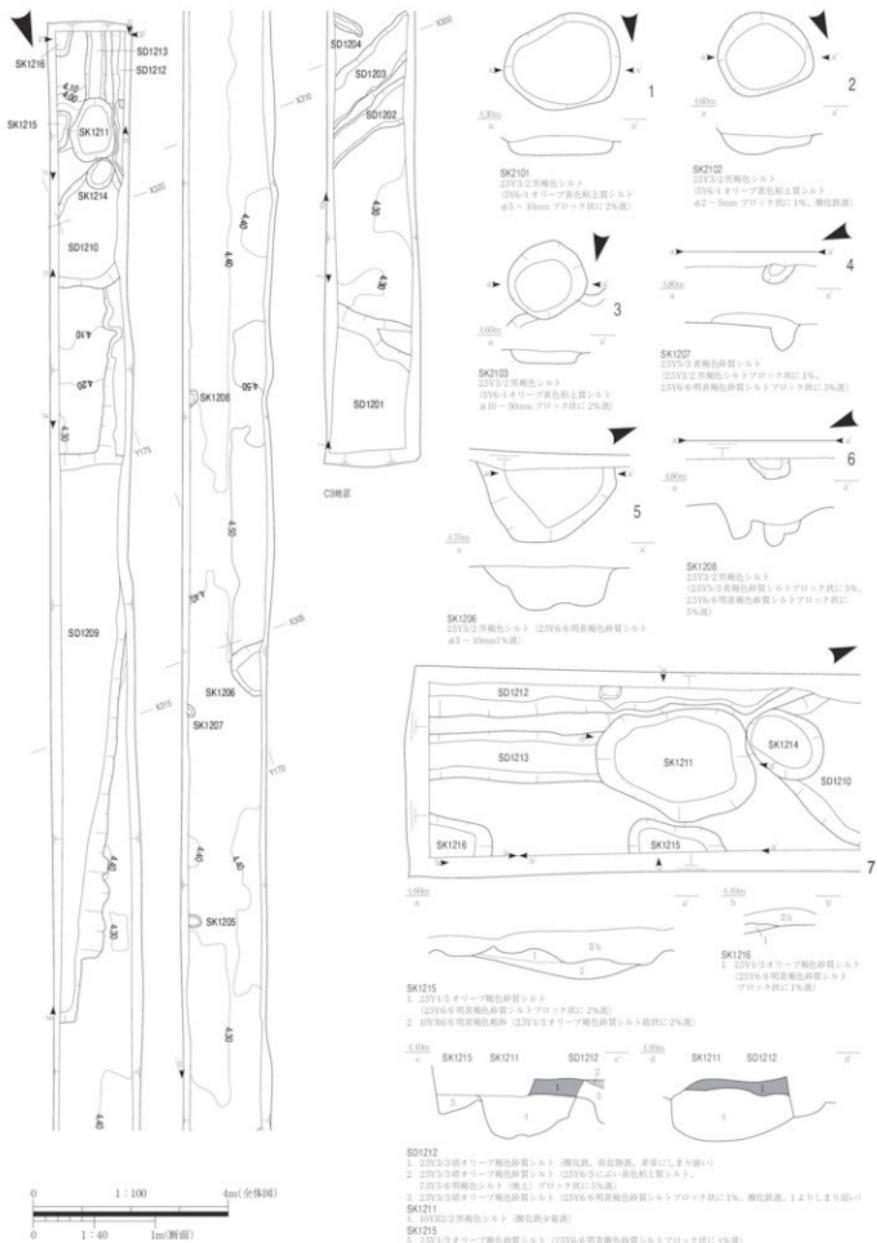


第12図 平櫻龜田遺跡 全体図・遺構実測図 (1/100・1/40)
C6・C7地区
SD1110



第13図 平櫻龜田遺跡 全体図 (1/100)
D地区





第15図 平櫻龜田遺跡 全体図・構造実測図 (1/100・1/40)

C8・C9地区

1. SK1201
2. SK1202
3. SK1203
4. SK1207
5. SK1206
6. SK1208
7. SK1211・SK1215・SK1216

第16図 平櫻龜田遺跡 遺構実測図 (1/40)

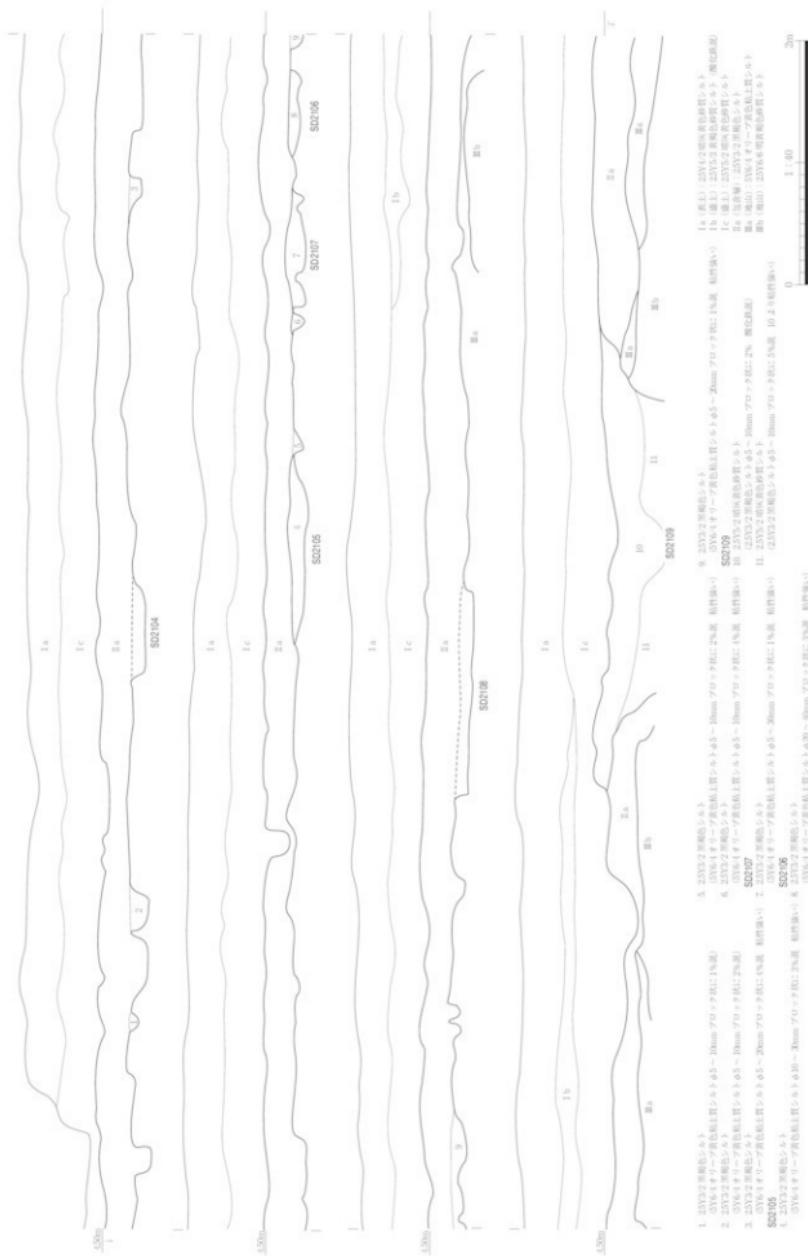
C3 · C5 · D地区

1. SD701・SD702・SD735 2. SD719 3. SD727 4. SD730 5. SD731・SD732 6・7. SD801 27
8. SD804～SD808①

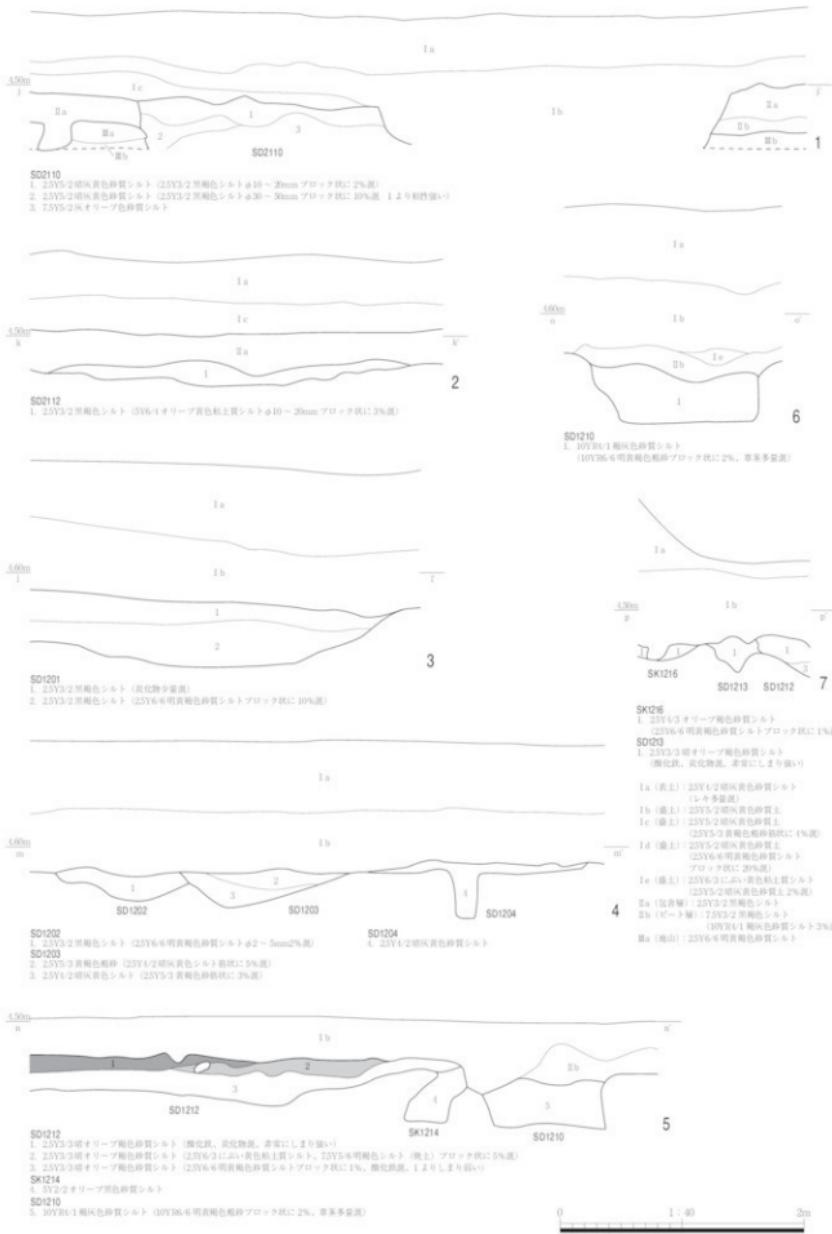
第17図 平櫻龜田遺跡 遺構実測図 (1/40)
C3地区

C3地区

SD804~SD808②



第18図 平榎龟田遺跡 遺構実測図 (1/40)
C8地区
SD2104～SD2109



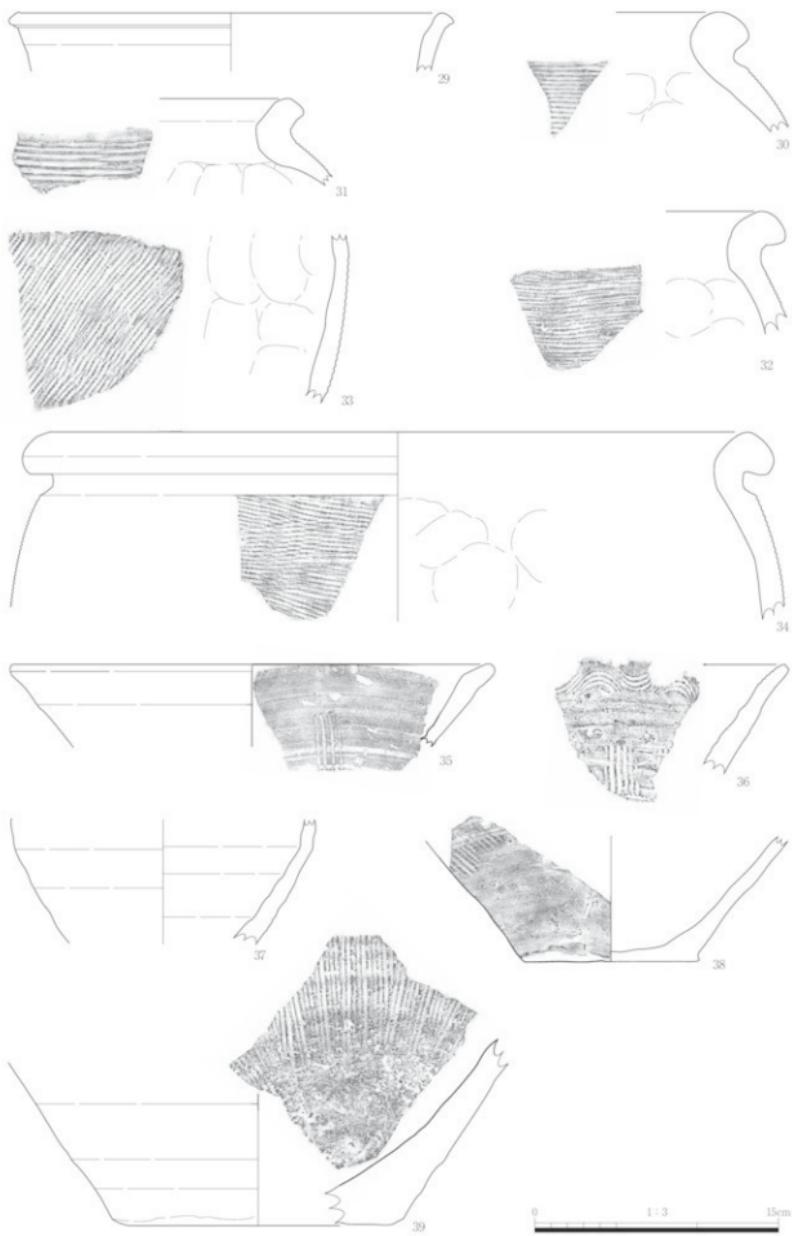
第19図 平鶴亀田遺跡 遺構実測図 (1/40)

C8・C9地区

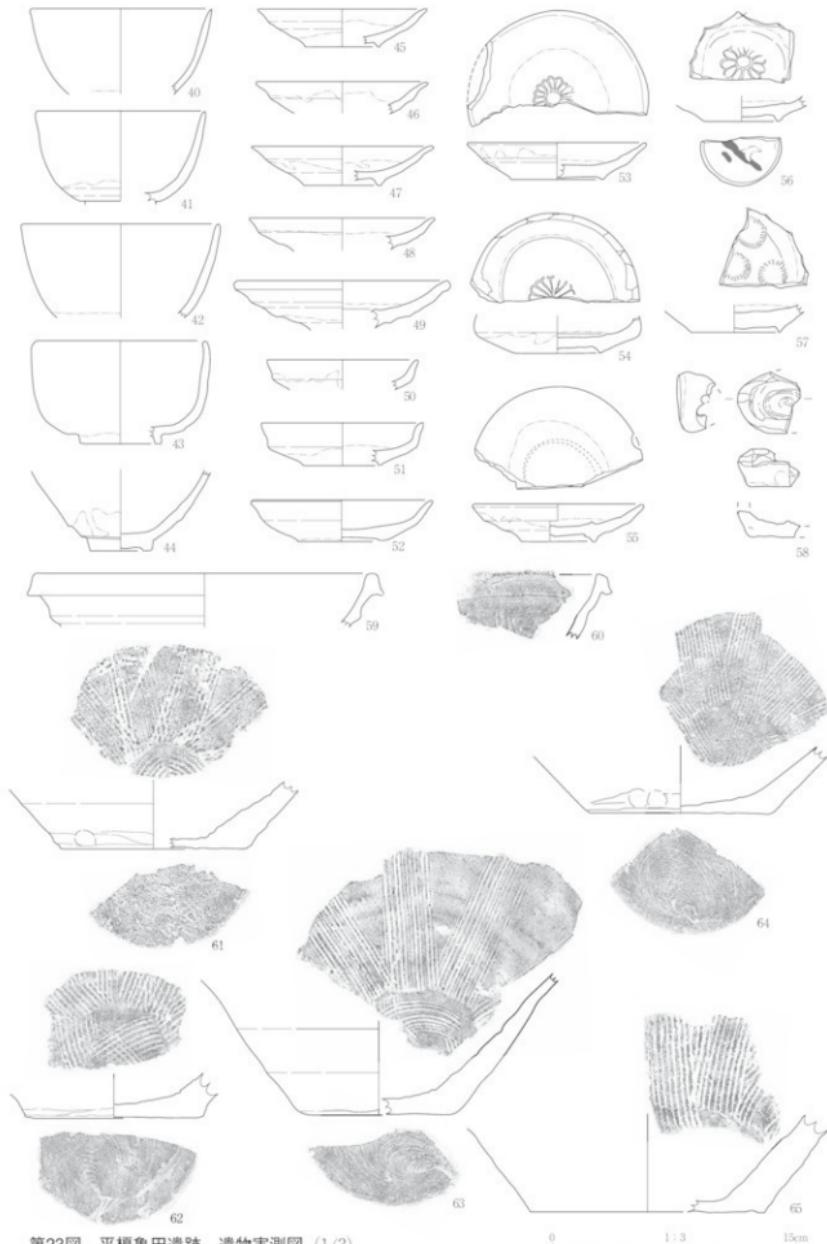
1. SD2110 2. SD2112 3. SD1201 4. SD1202~SD1204 5. SD1210・SD1212 6. SD1210
7. SD1212・SD1213



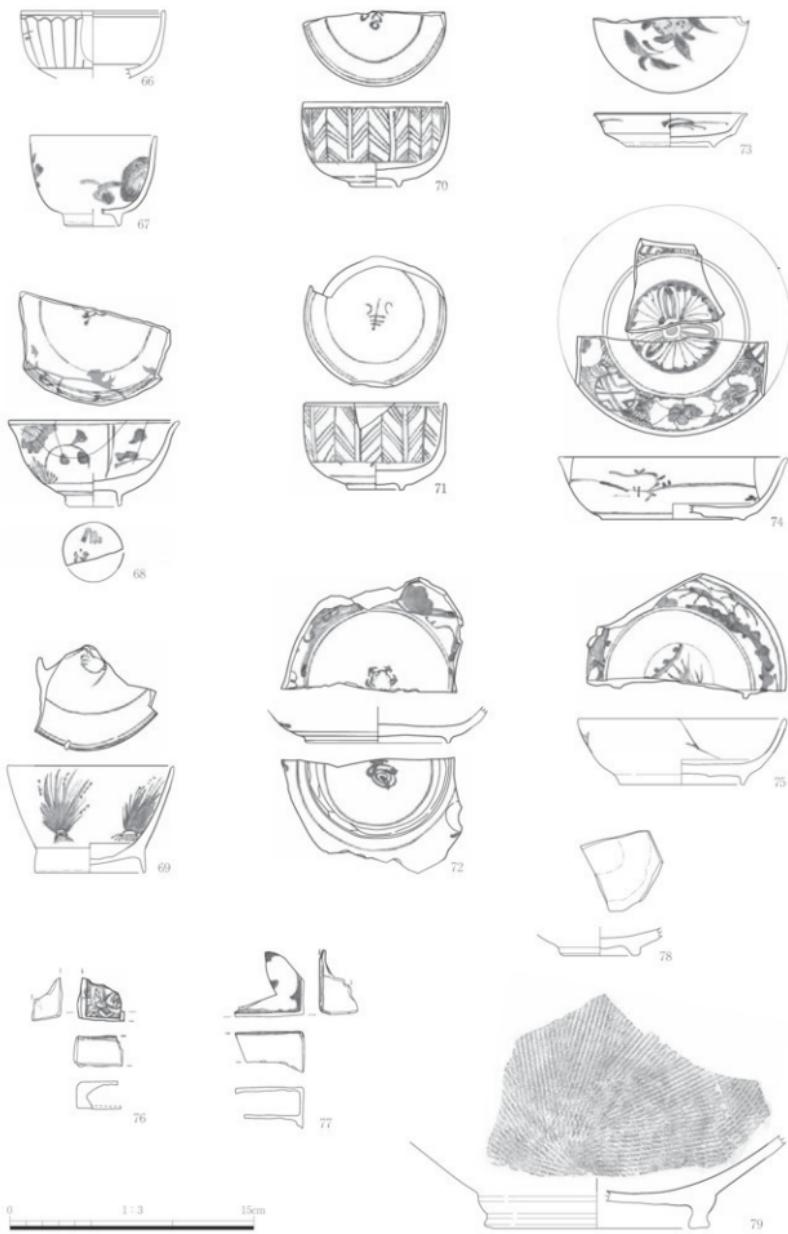
第21図 平櫻龜田遺跡 遺物実測図 (1/3)
SD801



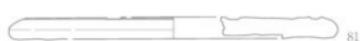
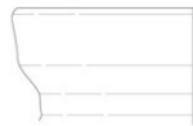
第22図 平櫻龜田遺跡 遺物実測図 (1/3)
SD801



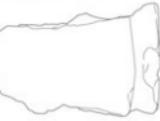
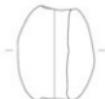
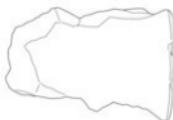
第23図 平櫻龜田遺跡 遺物実測図 (1/3)
SD801



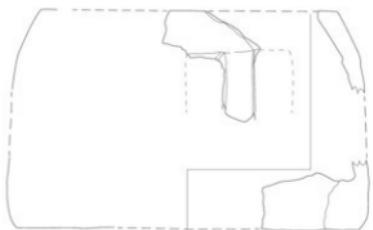
第24図 平櫛龜田遺跡 遺物実測図 (1/3)
SD801



82



84



85

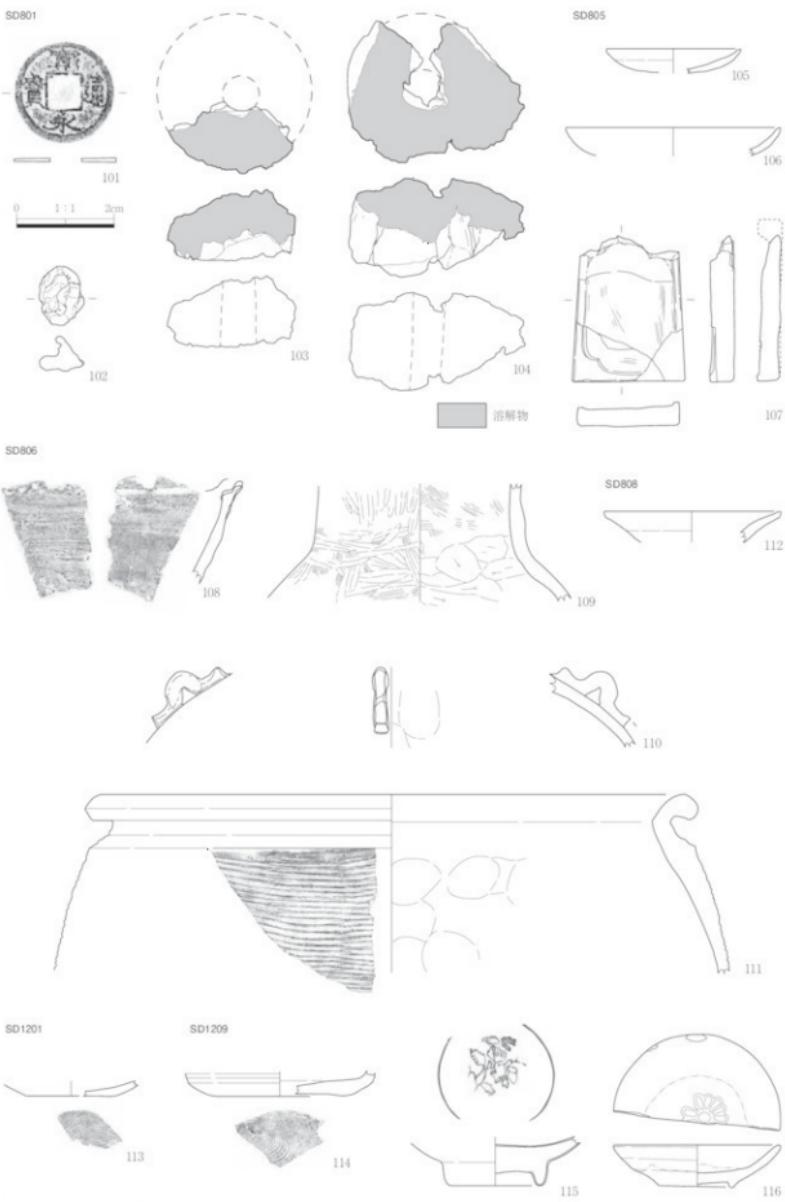
0 1:3 15cm

0 1:4 20cm

第25図 平櫻龜田遺跡 遺物実測図 (80~83・86~90 1/3、84・85 1/4)
SD801



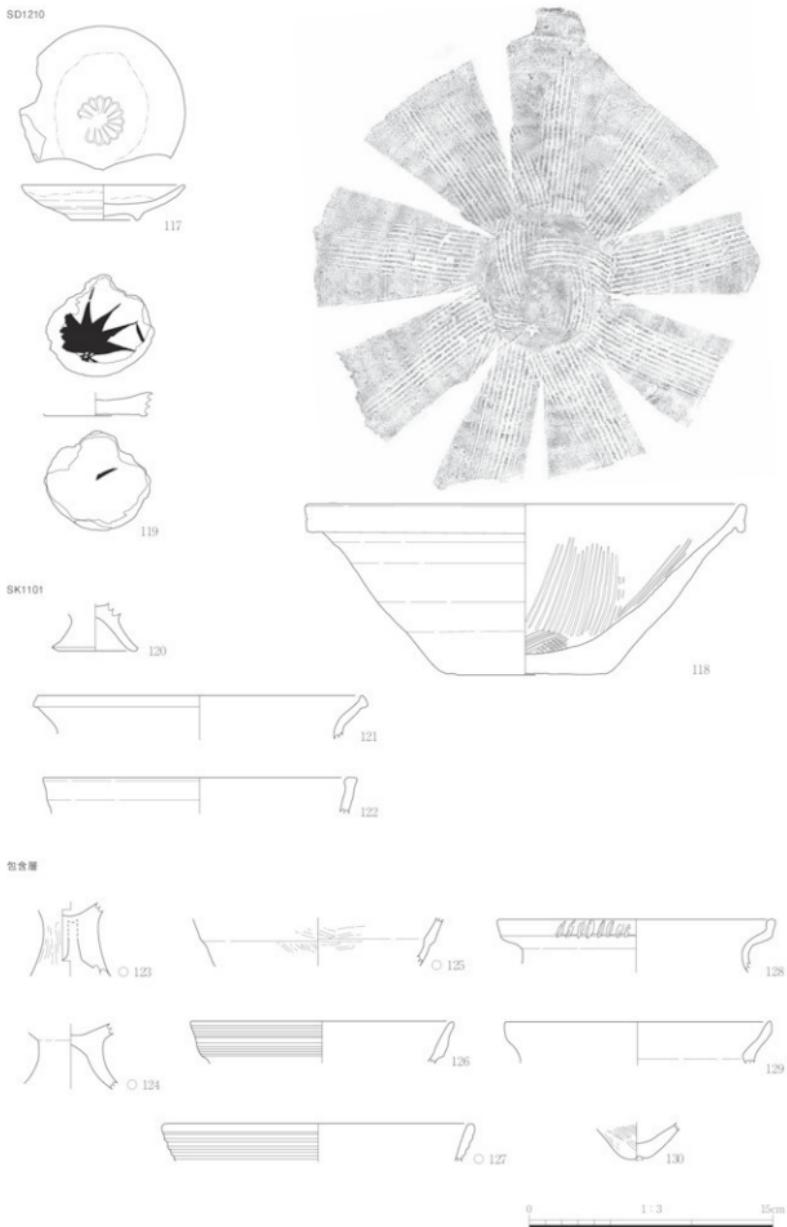
第26図 平櫻龜田遺跡 遺物実測図 (91~93・95~98 1/3, 94 1/4, 99・100 1/6)
SD801



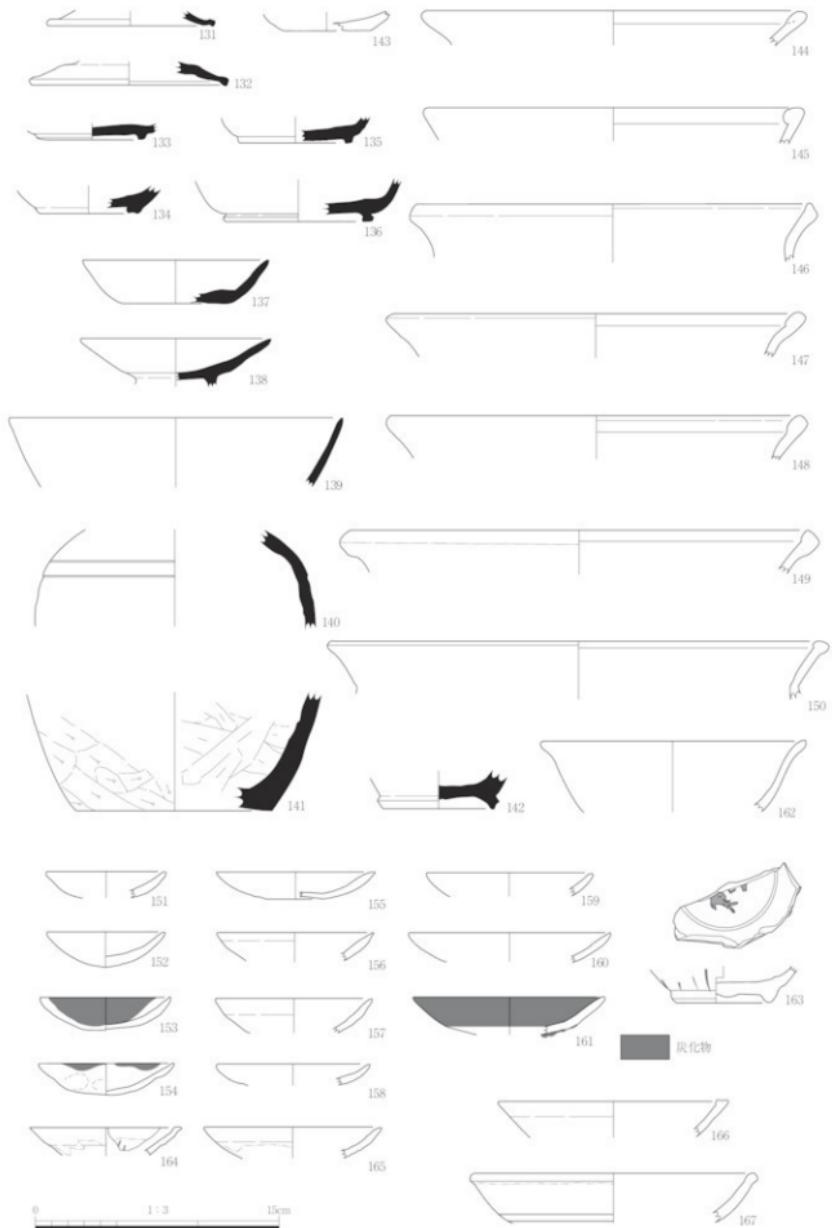
第27図 平櫻龜田遺跡 遺物実測図 (101 1/1, 102~116 1/3)

SD801(101~104) SD805(105~107) SD806(108~111) SD808(112)

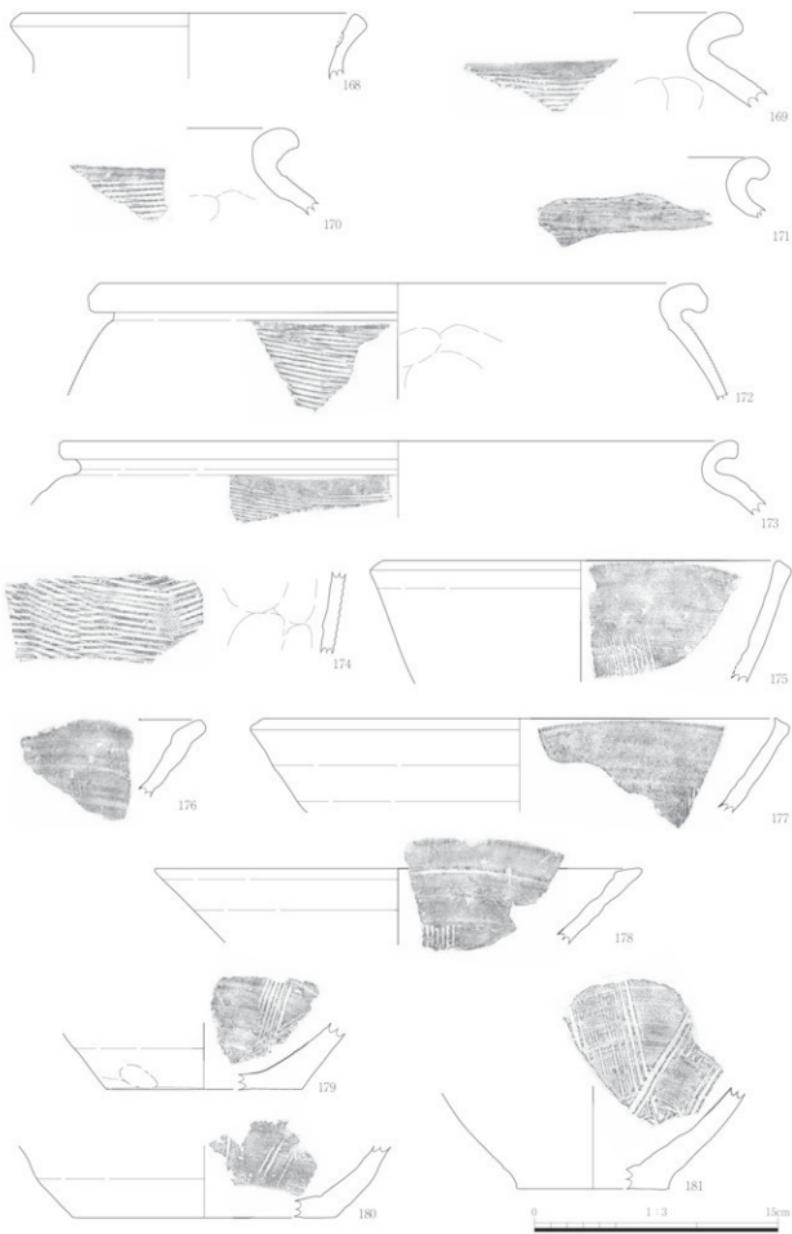
SD1201(113) SD1209(114~116)



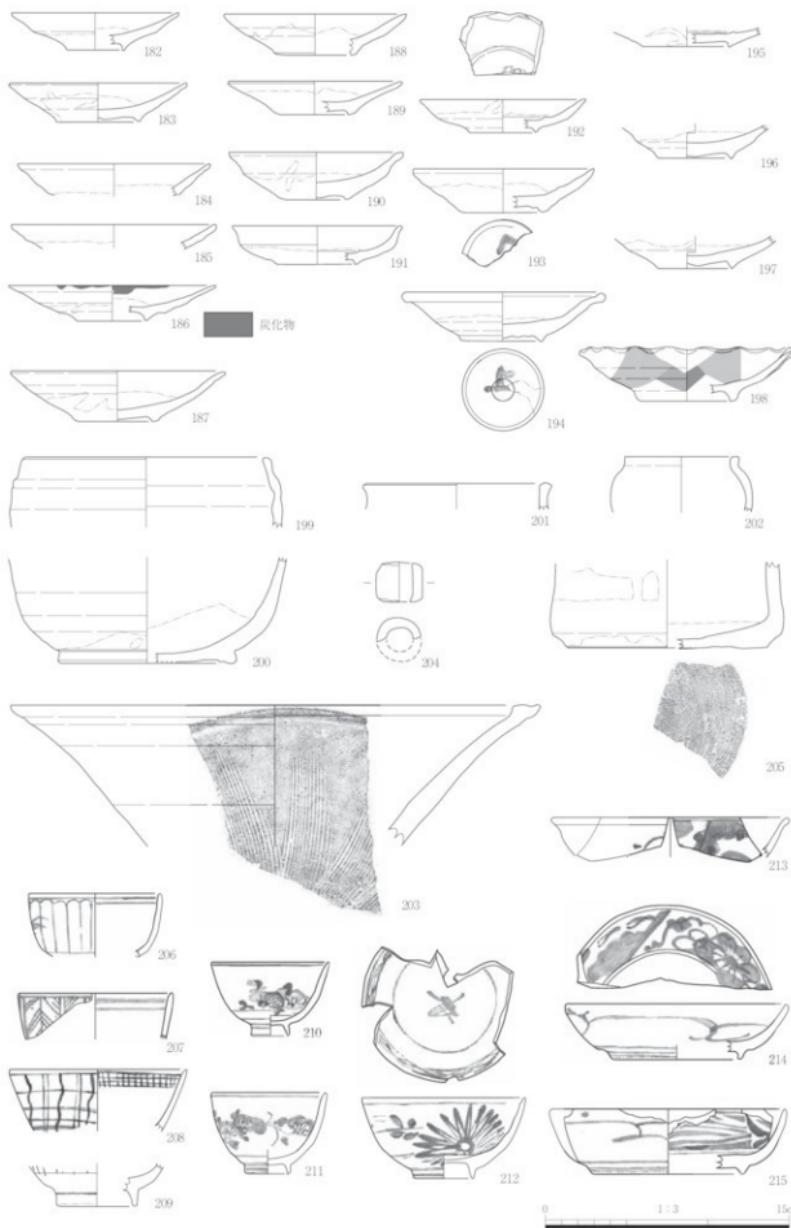
第28図 平櫻龜田遺跡 遺物実測図 (1/3)
SD1210(117~119) SK1101(120~122) 包含層(123~130)



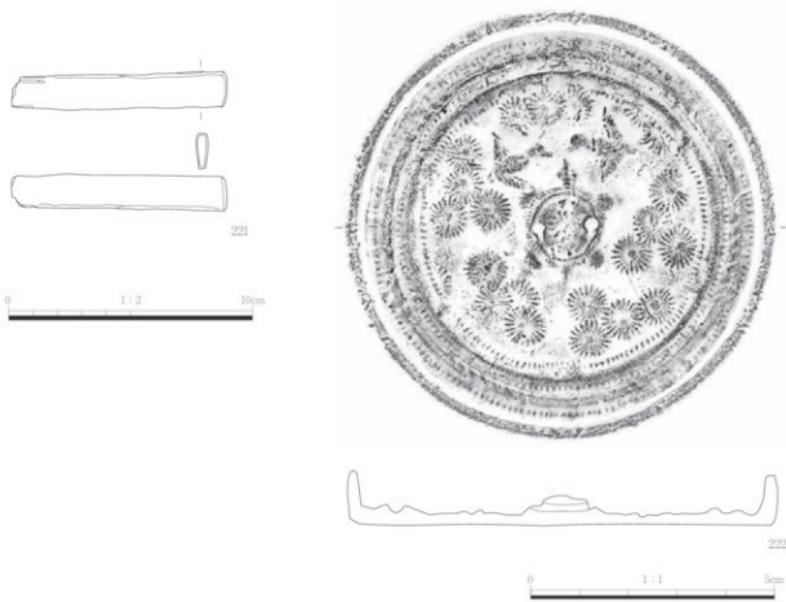
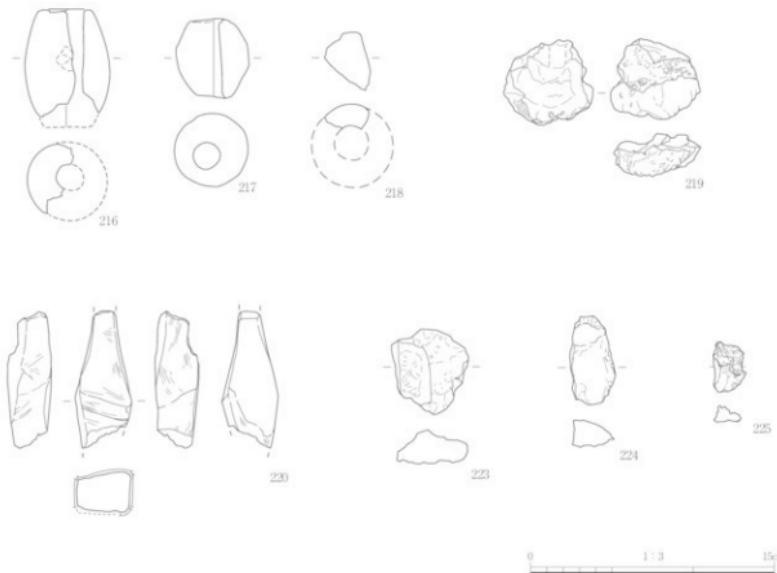
第29図 平櫻龜田遺跡 遺物実測図 (1/3)
包含層



第30図 平榎龜田遺跡 遺物実測図 (1/3)
包含層



第31図 平櫻龜田遺跡 遺物実測図 (1/3)
包含層



第32図 平櫻龜田遺跡 遺物実測図 (222 1/1, 221 1/2, 216~220, 223~225 1/3)
包含層

第IV章 浜黒崎野田・平榎遺跡

1 概 要

A 平成28年度調査

浜黒崎野田・平榎遺跡は常順寺川左岸の平野部に位置し、あいの風とやま鉄道の南北両側に広がる面積114,309m²にも及ぶ広大な遺跡である。平成28年度調査区は線路南側の市道宮条平榎線以東に位置する。現況は水田・水路で、水路工事部分を対象に調査を行った。調査区は2地区あり、南側をB地区、北側をC地区とした。B地区は西を、C地区は市道宮条平榎線に沿った南を起点として、そこからの距離を基準に調査を行った。検出面の標高はB地区が4.1~4.3m、C地区が4.5~4.6mで、現況が水路の箇所を含むB地区よりも水田であるC地区が若干高くなるものの、ほぼ平坦な地形である。遺構は溝13条、土坑4基検出した。遺物は量が少ないが、縄文土器から近世の土器・陶磁器、木製品、石製品、金属製品がある。

(高柳由紀子)

B 平成29年度調査

平成29年度調査区はあいの風とやま鉄道北側で、市道針原中町浜黒崎線の西側をD1地区、東側をD2地区として調査を行った。現況はD1地区が水路と盛り土した畑、D2地区が水路で、は場整備による削平部分および水路工事部分を対象に調査を行った。検出面の標高はD1地区が4.0~4.1m、D2地区が3.7~3.8mとなる。

D1地区は現在の水路と重なる水路工事部分と、削平部分の面調査区からなるL字形の調査区。水路部分では現水路と重複する溝を検出し、面調査区では溝2条、ピット12基があり、弥生時代後期（法仏式期）と平安時代（9~10世紀）集落の一部とみられる。遺物は縄文土器1,036（15,284g）、弥生土器215（3,379g）、土師器832（5,064g）、製塙土器22（466g）、時期不明土器2,675（19,165g）、須恵器400（15,487g）、灰釉陶器2（2g）、綠釉陶器9（130g）、珠洲12（605g）、近世以降陶磁器27（680g）、土製品14（721g）、石製品189（打製石斧53、砥石44、磨製石斧30、磨石14、剥片・石核14、石棒類10、叩石8、スクレイパー4、軽石3、二次加工剥片2、凹石2、石錘2、垂飾2、石錐1の計36,052g）、鉄滓5（443g）の計5,438点（97,478g）が出土している。このうち実測を行ったのは全体の2%にあたる131点である。このほかに植物遺体がある。

D2地区は現在の水路と重なる水路部分からなる南北に長い調査区。遺構は調査区がほぼ重なる溝のみ。遺物は弥生土器2（16g）、土師器3（15g）、時期不明土器2（10g）、須恵器1（75g）、石製品8（叩石3、磨石2、打製石斧1、台石1、砥石1の計7,598g）の計16点（7,714g）が出土している。このうち実測を行ったのは全体の13%にあたる2点である。

(町田賢一)

2 層 序

A 平成28年度調査

基本層序は、B地区はIa層：暗灰黄色シルト（耕盤土・盛土）、Ib層：黒褐色粘土質シルトが混じる灰黄褐色粘土質シルト（盛土）、Ic層：灰黄褐色粘土質シルト（盛土）、III層：灰黄色シルト（地山）、C地区はIc層：黒褐色粘土質シルト（盛土）、II層：酸化鉄分を含む黒褐色粘土質シルト

(包含層)、Ⅲ層：明黄褐色砂質土・砂質シルト（地山）となる。現在の耕作土は発掘調査前には場整備本体事業者により除去されているため記録していない。幾度も被害を受けた常願寺川の洪水の痕跡は、過去の水田の整備の際に削平されたのか、みつからなかった。

（高柳由紀子）

B 平成29年度調査

D 1 地区の基本層序は I a 層：黒褐色砂質シルト（表土）、I b 層：黒褐色砂質シルト（盛土）、I c 層：黄褐色粗砂（盛土）、Ⅲ a 層：灰オリーブ色粘土質シルト（地山）、Ⅲ b 層：灰色粘土質シルト（地山）、Ⅲ c 層：オリーブ黄色砂質シルト（地山）で I b ・ c 層下は地山となる。地山は南から北へⅢ b 層、Ⅲ a 層、Ⅲ c 層と変化している。面調査区では表土直下が削平された地山（Ⅲ c 層）となり、遺物包含層はない。

D 2 地区の基本層序は I a 層：黒褐色シルト（表土）、I b 層：オリーブ黒色シルト（盛土）、Ⅲ a 層：にぶい黄色砂質シルト（地山）、Ⅲ b 層：にぶい黄色粗砂（地山）である。地山は北側がⅢ b 層、南側がⅢ a 層となっている。

（町田賢一）

3 遺構

A 平成28年度調査

（1）溝

1号溝（SD1、第39図）

C 地区の市道官条平復線に沿った調査区の中央に位置し、南西から北東へ延びる。幅0.81m、深さ0.43mを測る。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とする。SD2 と並行し、位置関係からSD1 とSD5 は同一の溝と考える。遺物は縄文土器（305）が出土した。

2号溝（SD2、第39図）

C 地区の市道官条平復線に沿った調査区の中央に位置し、南西から北東へ延びる。幅1.5m、深さ0.68mを測る。埋土は上層が黒色粘質土、下層が黒褐色粘質土～粘質シルト・暗褐色粘質土～シルトを基調とする。SD2 とSD4 は共にSD1・SD3・SD5 と並行して位置しており、SD2 とSD4 は同一の溝と考える。遺物は縄文土器（306）、棒状金属製品が出土した。

3号溝（SD3、第39図、図版17）

C 地区の市道官条平復線に沿った調査区の北西角に位置し、南西から北東へ延びる。幅1.53m、深さ0.94mを測る。C 地区で検出した溝の内、最長である。SD3 はSD2 とSD4 と並行し、SD6 に切られる。埋土は上層が黒褐色シルト、下層が灰黄褐色砂質シルトを基調とする。出土遺物はない。

4号溝（SD4、第39図）

C 地区北西に位置し、南西から北東へ延びる。幅1.37m、深さ0.55mを測る。埋土は上層が黒色粘質土・粘質シルト、下層が暗褐色シルト・黒褐色粘質土を基調とする。SD4 とSD2 は共にSD3 と並行して位置しており、SD2 とSD4 は同一の溝と考える。SD6 に切られる。出土遺物はない。

5号溝（SD5、第39図）

C 地区北東に位置し、南西から北東へ延びる。幅0.83m、深さ0.42mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。SD2 とSD4 と並行して位置しており、SD1 の延長と考える。SD6 に切られる。出土遺物はない。

6号溝 (SD6、第39図)

C地区北東に位置し、南西から北東へ直角に曲がって延びる。幅0.62m、深さ0.24mを測る。埋土は黒褐色シルトを基調とする。SD3、SD4、SD5を切る。出土遺物はない。

7号溝 (SD7、第39図)

C地区北東に位置し、南西から北東へ延びる。幅0.51m、深さ0.46mを測る。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とする。遺物は繩文土器（307）と砥石（308）が出土した。

101号溝 (SD101、第39図)

B地区西端に位置する。残存幅6.35m、深さ0.64mを測る。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とする。幅が広いため自然流路の可能性がある。遺物は青白磁（309）が出土した。

102号溝 (SD102、第39図、図版16)

B地区西側に位置し、南西から北東へ延びる。幅5.68m、深さ0.71mを測る。埋土は上層が暗褐色粘土質シルト、下層が灰黄褐色シルト、黒褐色粘土質シルト～シルト、褐灰色粘質土を基調とする。幅が広いため自然流路の可能性がある。遺物は弥生終末期～古墳前期の土器（310）と緑色凝灰岩剥片が出土した。

103号溝 (SD103、第39図、図版16)

B地区西側に位置し、南西から北東へ延びる。幅0.6m、深さ0.45mを測る。埋土は暗褐色シルトを基調とする。出土遺物はない。

106号溝 (SD106、第39図、図版16)

B地区中央に位置し、西から東へ延びる。幅201m、深さ0.37mを測る。埋土は黒褐色シルトを基調とする。隣接するSD107下層と埋土が類似しているため同時期のものと考える。出土遺物はない。

107号溝 (SD102、第39図、図版16)

B地区中央に位置し、西から東へ延びる。幅0.96m、深さ0.45mを測る。上下2層の年代があり、上層は調査区内で最も新しい年代の溝である。埋土は上層が暗灰黄色シルト～黄灰色粘土を基調とするIa層で、下層は黒褐色粘土質シルト・シルトを基調とする。下層の溝をIc層で埋めて整地し、改めて上層の溝を作り、上層の溝はIa層（現耕作土の耕盤土）で埋められてその上面は現在の水田となっている。1946年（昭和21年）の航空写真を見ると、市道宮条平榎線を境に調査区付近である東側は現在と変化ない水田の区画となっているが、南西側は自然地形を活かした区画となっている。南西側の区画の一つに位置と方向が一致するSD107上層の延長かと予想されるものがあり、SD107上層は昭和21年以前に埋められた溝と考える。SD107下層やそのほかの遺構はこれよりも古く、中近世と考えている。SD107上層はSK105を切る。出土遺物はない。

(2) 土坑**104号土坑 (SK104、第38図)**

B地区東側に位置する。残存長1.17m、幅1.06m、深さ0.25mを測る。埋土は暗褐色シルトを基調とする。出土遺物はない。

105号土坑 (SK105、第38図)

B地区東側に位置する。長さ0.98m、幅0.79m、深さ0.44mを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトを基調とする。断面形は袋状になる。SD107上層に切られる。出土遺物はない。

108号土坑 (SK108、第38図)

B地区中央に位置する。残存長1.5m、幅1.42m、深さ0.53mを測る。埋土は灰黄褐色粘土質シルト

を基調とする。SD106、SK109を切る。ほ場整備前の水田区画の可能性がある。出土遺物はない。

109号土坑（SK109、第38図）

B地区中央に位置する。長さ1.87m、残存幅1.8m、深さ0.34mを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトを基調とする。SK108に切られ、SD106を切る。ほ場整備前の水田区画の可能性がある。出土遺物はない。

(高柳由紀子)

B 平成29年度調査

(1) 溝

201号溝（SD201、第40図、図版20）

D1地区にある現在の水路とほぼ同じ南から北に流れる。埋土は黒褐色砂質シルトで、下層にオリーブ褐色砂質土が入り、流水状況がうかがえる。その上下層の境目付近から破片ばかりであるものの、縄文時代から平安時代にいたる多くの遺物が出土している。南側に縄文、北側に平安時代の遺物が多い傾向にあり、南北で様相が異なる。遺物は縄文土器910（325～373）、弥生土器132（374～384）、土師器699（385～394）、須恵器375（404～420）、製塙土器18（395～398）、灰釉陶器2（399・400）、綠釉陶器9（401～403）、時期不明土器2,294、珠洲12（421～423）、近世以降陶磁器27（424～426）、土鍤8（427～429）、粘土塊1（430）、炉壁？1（431）、打製石斧53（444・446～452）、砥石37（459）、磨製石斧28（439～443・445）、石核・剥片14、磨石13（461）、石棒類9（435～438）、叩石8（462～464）、スクレイパー4（453～456）、軽石3、凹石2（460）、石鍤2（465）、二次加工剥片2（458）、重飾？2、石鍤1（457）、鉄滓5（432～434）の計4,671点が出土。土器・陶磁器に完形品ではなく、石器も破損品ばかりで廃棄や祭祀で用いられた溝と推定する。南側底面近くからオニグルミ核が完形で1点、北側の底～肩部にかけてエゴノキ核の完形3点・破片19点がみつかっている^{注1}。これらは沢や水辺に生育する種であり、溝周辺の環境を示している。

202号溝（SD202、第40図、図版19）

D1地区にある弥生時代後期の溝。北西から南東に走る。埋土は黒色砂質シルトで植物質が含まれる。弥生土器がまとまってみつかる唯一の遺構。遺物は弥生土器61（311～320）、土師器4（321）、縄文土器4、砥石1の計70点（1,265 g）が出土している。遺物は完形品ではなく、廃棄溝とみられる。

203号溝（SD203、第40図）

D1地区にある平安時代の溝か。北西から南東に走る。SP209・212とSP204～206の柱列がこれに沿って並ぶ。遺物は土師器16、弥生土器3の計19点（40 g）が出土している。

301号溝（SD301、第40図）

D2地区にあり、調査区に沿う形で南から北に流れる溝。調査区全体がほぼこの遺構からなる。埋土は2層で上層が灰黄褐色砂質シルトに植物質を含み、下層は暗オリーブ色褐色砂質シルト。

遺物は弥生土器の壺とみられる破片2（322）、土師器2、時期不明土器2、須恵器壺胴部とみられる破片1（323）、磨石2、打製石斧1（324）、台石1の計11点（3,866 g）が出土している。

(2) ピット

204～206号ピット（SP204～206、第37図、図版19）

D1地区にある平安時代の柱穴で、SP209・212同様にSD203に沿って南北方向に並ぶ柱列。いずれも柱痕跡がある。調査区内では東西方向には柱列が展開しないので掘立柱建物とは積極的に言いにくい。SP204からは土師器2点、SP205からは土師器7点（301・302）、SP206からは弥生土器2点、土師器5点（303・304）が出土している。

207号ピット (SP207、第37図、図版19)

D 1 地区にある浅い穴。SP204～206の列上にあるが、埋土が異なる。遺物なし。

208号ピット (SP208、第37図、図版19)

D 1 地区にある平安時代の柱穴か。半分以上が調査区外。SP204～206とは軸がずれる。弥生土器4、土師器2の計6点(11g)が出土。

209・212号ピット (SP209・212、第38図、図版19)

D 1 地区にある平安時代の柱穴で、SP204・206同様にSD203に沿って南北方向に並ぶ柱列。調査区内では東西方向には柱列が展開しないので掘立柱建物とは積極的に言いにくい。遺物はSP212から縄文土器1点が出土。

210号ピット (SP210、第38図、図版19)

D 1 地区にある平安時代の柱穴か。SP209に切られる。遺物なし。

211・213・214号ピット (SP211・213・214、第38図)

D 1 地区にある平安時代の柱穴か。柱痕跡はなく浅い。遺物はSP214から土師器1点が出土。

215号ピット (SP215、第38図)

D 1 地区にある平安時代の柱穴か。SD202を切る。遺物なし。

4 遺 物

A 平成28年度調査

縄文時代晚期から江戸時代までの遺物がある。包含層出土遺物は2箇年分を本項で記述する。

SD1・2・7 (第41図、図版21)

305～307は縄文土器。305は平行沈線間に細かい斜行縄文を施す。306は細かい斜行縄文?地に細い山形沈線と太い縦位沈線を入れ、穿孔し、赤彩。307は深鉢底部。底面に2本超え2本潜り1本ずらしの網代痕がある。晩期前葉(御経塚式)～中葉(中屋式)か。308は砥石で4面に砥面がある。

SD101・102 (第41図、図版21)

309は青白磁で、外面に唐草文が施される梅瓶か。310はくの字状口縁の壺で、内外面磨耗し、調整は不明。弥生終末期から古墳時代前期のもの。

包含層出土 (第49～50図、図版25・26)

466～468は縄文土器。466は縦位条痕に横位平行沈線が入る晩期後葉下野式の深鉢口縁部。467・468は小片で磨耗がひどく、文様が判然としないが、沈線文のあり方から後期末葉(八日市新保式)から晩期前葉(御経塚式)となる。469は深鉢の底部で底面に斜位から縦位の工具痕が残る。470～473は弥生終末期～古墳時代前期の土器。470は高杯の杯から脚部。471は高杯もしくは器台の脚裾部。472は装飾壺上部で内外面赤彩。473は壺の底部。474は土師器椀で底部回転条切痕がある。475は製塙土器。476は須恵器杯A。477は須恵器杯B。478は中世土師器皿で内面に厚く炭化物が付着し、灯明皿とみられる。479は珠洲の甕部。480～482は越中瀬戸。480は削出し高台の灰釉皿。481は貼付高台の鉄釉皿。482は鉄釉の壺口縁部。483は灰釉の茶入で、胴部に横方向の沈線が1本入る。古瀬戸か。484は伊万里の染付碗。485は唐津京焼風の碗。486～488は樽形の土鍤。489は石刀の破片で全面研磨し、一側面に擦り切り溝がある。490・491は弥生時代の管玉製作関連の剥片か。492はヒスイの玉未成品で穿孔のみを行っている。493は砥石を転用したスクレイパーもしくは打製石斧の刃部。494・495は定角式

磨製石斧。494はほぼ全面に敲打痕があり、未成品か。495は刃部のみで風化している。496は砥石で表裏面に砥面、側面に抉りが3か所ある。497は叩石で上下一側面に敲打痕がある。498は棒状の石針で玉製品加工工具か。499は煙管の吸口。銅製で緑青が吹き出し、緑色を呈する。胴部に雲形の陰刻が見える。

B 平成29年度調査

縄文時代晚期から江戸時代までの遺物がある。

SP205・206（第41図、図版21）

301・302は平安時代の土師器碗。301は内外面赤彩。302は高台がつく。303は高杯脚裾部、304は壺。弥生時代後期（法仏式期）。

SD202（第41図、図版21）

311～320は弥生土器。311はくの字口縁の鉢。312～314は高杯で、312は脚裾部、313・314は脚柱部。315は台付壺の胴部。317は壺下半部。316・318～320は壺で、318は斜行刺突を施す受口状口縁、316・319・320は底部。弥生時代後期（法仏式期）。321は土師器の鍋で玉縁状の口縁部。

SD301（第41図、図版21）

322は弥生土器の壺胴部。323は須恵器の壺胴部。324は打製石斧で、短冊形。

SD201（第42～49図、図版22～25）

325～373は縄文土器。後期後葉井口式～晚期後葉下野式がある。325は斜行縄文地に楕円形の突起を付け、刻む。326は横位沈線を縱位沈線で区切る。これらは後期後葉井口式。327・329・332・333は連結三叉文を施す後期末葉八日市新保式。335・359・361は玉抱三叉文を施す晚期前葉御経塚式。345・346は入組文を施す晚期中葉中屋式。344は縱位条痕で口縁部に斜行刺突を入れる晚期後葉下野式。364～368は浅鉢で364～366は口唇部に隆帯を貼り付ける。御経塚式か。370～373は圧痕がある底部。370がスダレ状、371がカゴ状、372・373が網代。374～384は弥生土器。374は内面に矢羽状の刺突を入れる。376・378は壺の底部に穿孔があり、瓶として利用したものか。377は壺底部で底面に格子目状の沈線が施される。380は縱位のハケ、口唇部を刻む壺。これらは中期後半か。375・381～384は壺で375・384は有段擬四綱の口縁部、381は底部、382・383は受口状口縁部。378・379は高杯で378は脚柱部、379は杯部。これらは後期後半法仏式を中心とする。385～394は土師器。385は台付壺の台部か。386・387は高台がつく碗。389～392は底部に回転糸切痕がある碗。390は外側から穿孔する。394は壺の口縁部。385・393を除けば平安時代（9～10C）となろう。393は中世土師器。口唇部を面取りし、体部をロクロナデ。体部外面には「白」「○」とみられる墨書きがあり、内面には墨痕が残る。395～398は製塙土器。399・400は灰釉陶器で、399は内面、400は外面に灰釉がかかること。401～403は緑釉陶器。401・403は薄く硬質で濃い緑色。403は底部糸切りの輪花碗。内面見込みに沈線が巡る。近江産か^②。402はやや軟質で明るい緑色。404～420は須恵器。404～407は杯で、406は底部糸切、407は高台付き。408～415は瓶。408・410は双耳瓶か。412は高台に沈線が入る。414は外面に自然釉がかかること。415は平瓶の把手部分で中央に閉塞痕がある。413の底部には回転糸切痕がある。416～420は壺。416は口縁部下に描寫波状文を施す。418・419は内面に同心円状の當て具痕がある。421～423は珠洲。421は片口鉢で8本鉗目が入る。422・423は壺の胴部。424・425は越中瀬戸。424は鉄釉の皿。425は鉄釉の匣鉢で、底面に回転糸切痕。426は伊万里の皿。内面に唐草文・五弁花？の染付後、蛇の目釉剥ぎ。427～429は樽形の土錘。ユビオサエが残る。430は白色の粘土塊。431は炉壁とみられる土製品。432～434は鉄滓で、いわゆる椀形滓。

435～465は石製品。435～438は石棒類^{注3}。435は両端を欠損する小型石棒。436は表面に敲打痕があり、未成品。438は石刀の表面のみの破片。表面に横・斜格子状の沈線があり、櫻原型石刀（後藤1986）であろう。439～443・445は磨製石斧。440～443は底角式。439は石棒類未成品の可能性がある。445は砥石の転用。444・446～452は打製石斧。444・446は短冊形。447～449・451・452は撥形。450は分銅形。444・449は砥石の転用。446は未成品。453～456はスクレイバーとみられる。454は大型石匙の可能性がある。453は砥石の転用。457は平基の石鎌。458は剥片の一辺を加工した二次加工剥片。459は筋砥石で筋状の凹みが表面2、裏に1本ある。460は凹面で表面に凹み2、側面と上面に抉り。461は磨石で側面に敲打痕。462～464は叩石。463は石棒類の転用か。465は弥生時代の有溝石錘とみられる。

5 総 括

B・C・D2地区は、縄文時代から近世の遺物が出土しているがその量は少なく、遺構は区画溝を主体とし、集落の一部というより中世から近世の水田など農耕地の一部とみられる。とくにD2地区のSD301は現在の水路と重なるように走っており、旧地割りが踏襲されているとみてよい。

一方、D1地区は遺物が多く出土し、近辺に集落が想定される遺構がみつかっている。第33図にあるような遺物の出土傾向からみると、水路部分南側に縄文土器、北側に古代の土師器、面調査区に弥生土器が多い。一方でSD201の土器・陶磁器破片の大きさ分布をみてみると、地点差はほとんどないが、3cm四方以下が多いことがわかる。このことからSD201出土遺物は原位置をとどめているというより上流から流れてきた、もしくは祭祀などで破碎したものを廃棄したと言えよう。

縄文時代においては後期後葉（井口式）から晩期後葉（下野式）の土器があるが、主体となるのは晩期前葉（御経塚式）～晩期中葉（中屋式）である。上流にあたる南側で富山市教委が調査した部分（鹿島1996）にある1995年に野田・平榎遺跡として調査した1区）からも後期末～晩期の土器や遮光器土偶など、ほぼ同時期の遺物が大量に出土している。このことは南側に縄文土器の出土傾向が高いことを反映していると言えよう。打製石斧のほかに磨製石斧や石刀など磨製石器の完成品と未完成品が出土し、砥石も多くあることから、これらの製作遺跡が近辺にある可能性が高い。弥生時代では中期～後期の遺物が出土しているが、大半は後期後半の法仏式期。SD202が当該期の遺構とみられるので、その関係性がうかがえる。それは面調査区に弥生土器が多い傾向を示していることでも裏付けられる。

古代では平安時代（9～10世紀）の遺物が多く、底部回転糸切りの土師器のほかに、県内では珍しい縁袖陶器（内田1999）が複数出ており、射水市赤田I遺跡（稻垣他2003）のような上流ではなんらかの祭祀場として使われていた可能性もある。また、土錘も複数あり漁労が行われていたのであろう。それはオニグルミやエゴノキなど、水辺に生息する植物遺体の出土からも裏付けられる。さらに破片ではあるが製塙土器も複数あり、面調査区と小高くなっている西側の宅地部分にこの時期の集落があったものとみられる。中世以降では遺物量はそれ以前と比べると少なく、活発な利用はみられなくなるものの、1点ながら墨書のある中世土師器がほぼ完形で出ていることから、単に捨て場というよりも祭祀場としての利用も考えてよいだろう。

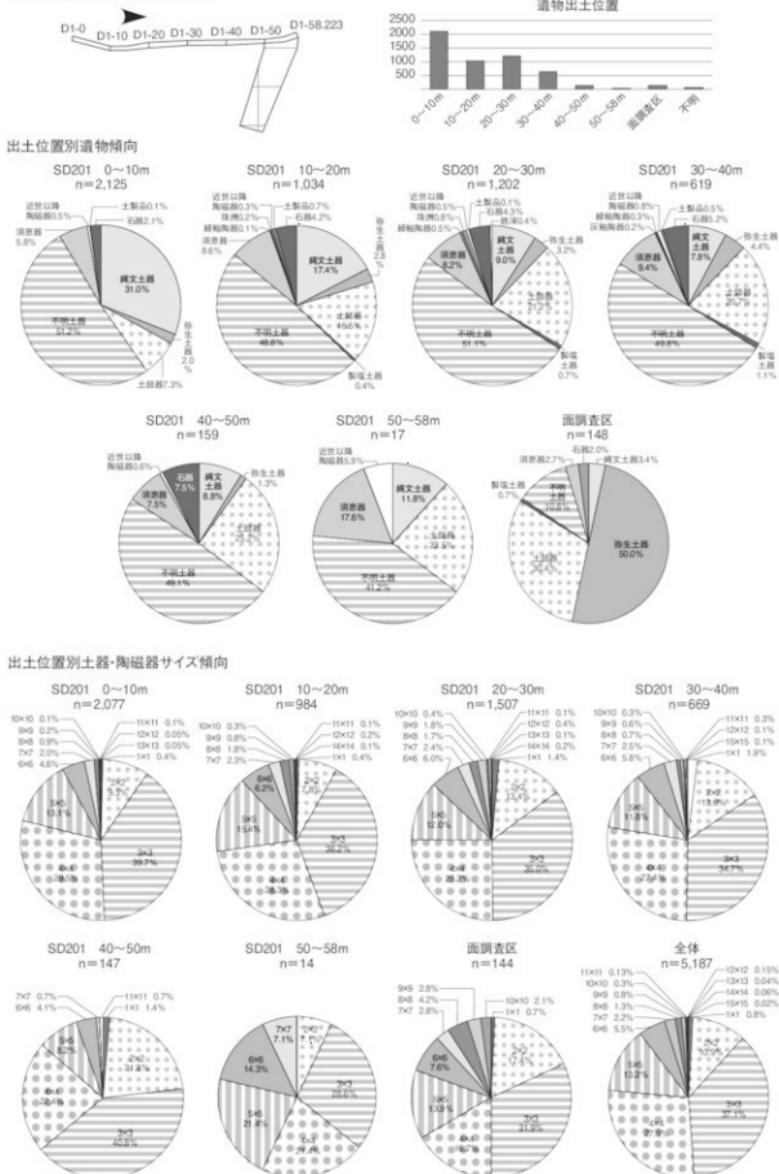
（町田賢一）

注1 植物遺体については島田亮仁氏に同定していただいた。このほかに溝上部からマツ属複離管束葉系（二葉松）の種果2点とスギ種果1点出土しているが、遺跡当時のものというより現代の混入の可能性が高いといふ。

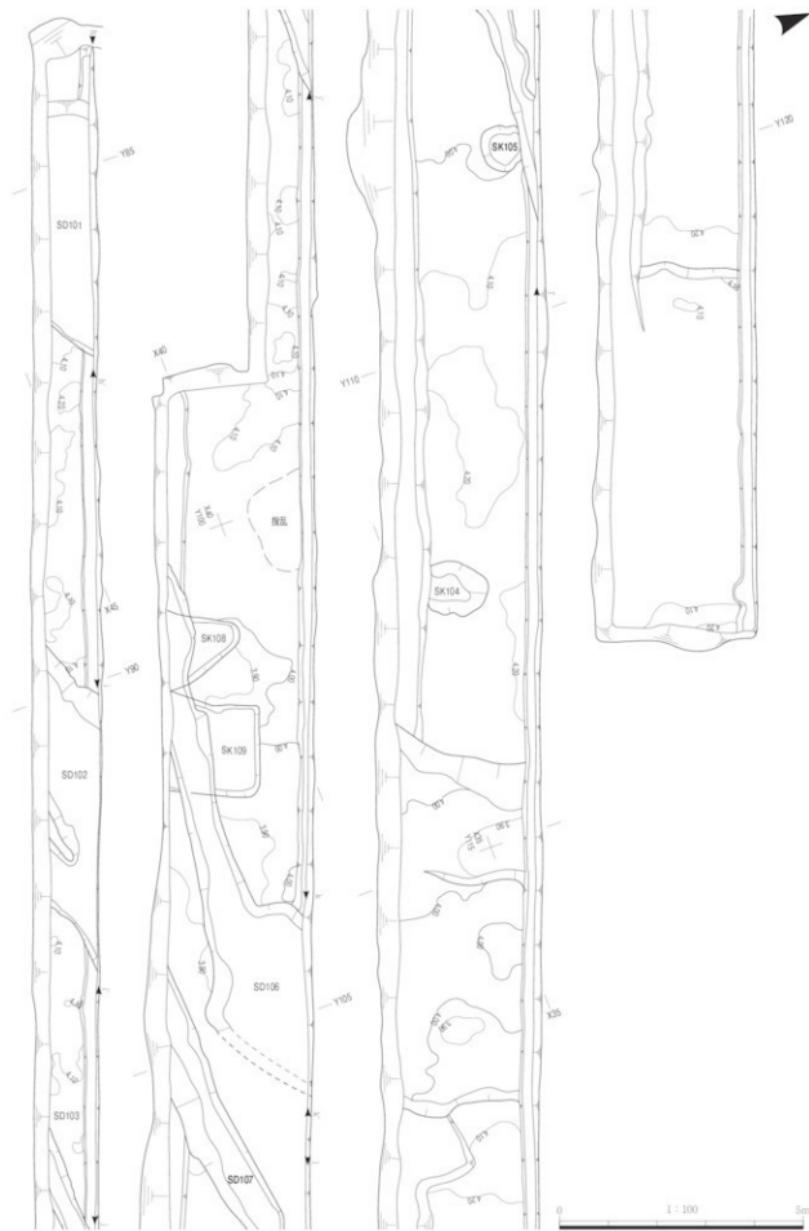
注2 縁袖・灰釉陶器や須恵器については池野正男氏にご教示いただいた。

注3 石棒類については長田友也氏にご教示いただいた。

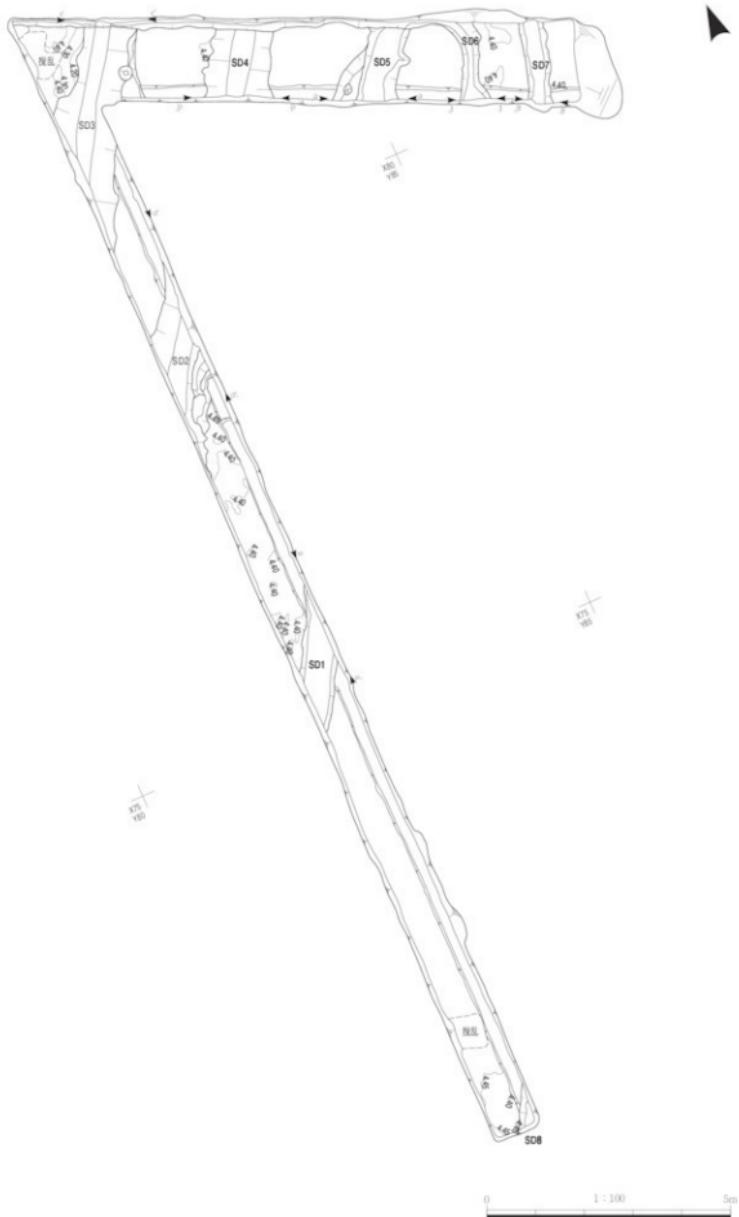
浜黒崎野田・平榎遺跡D1地区



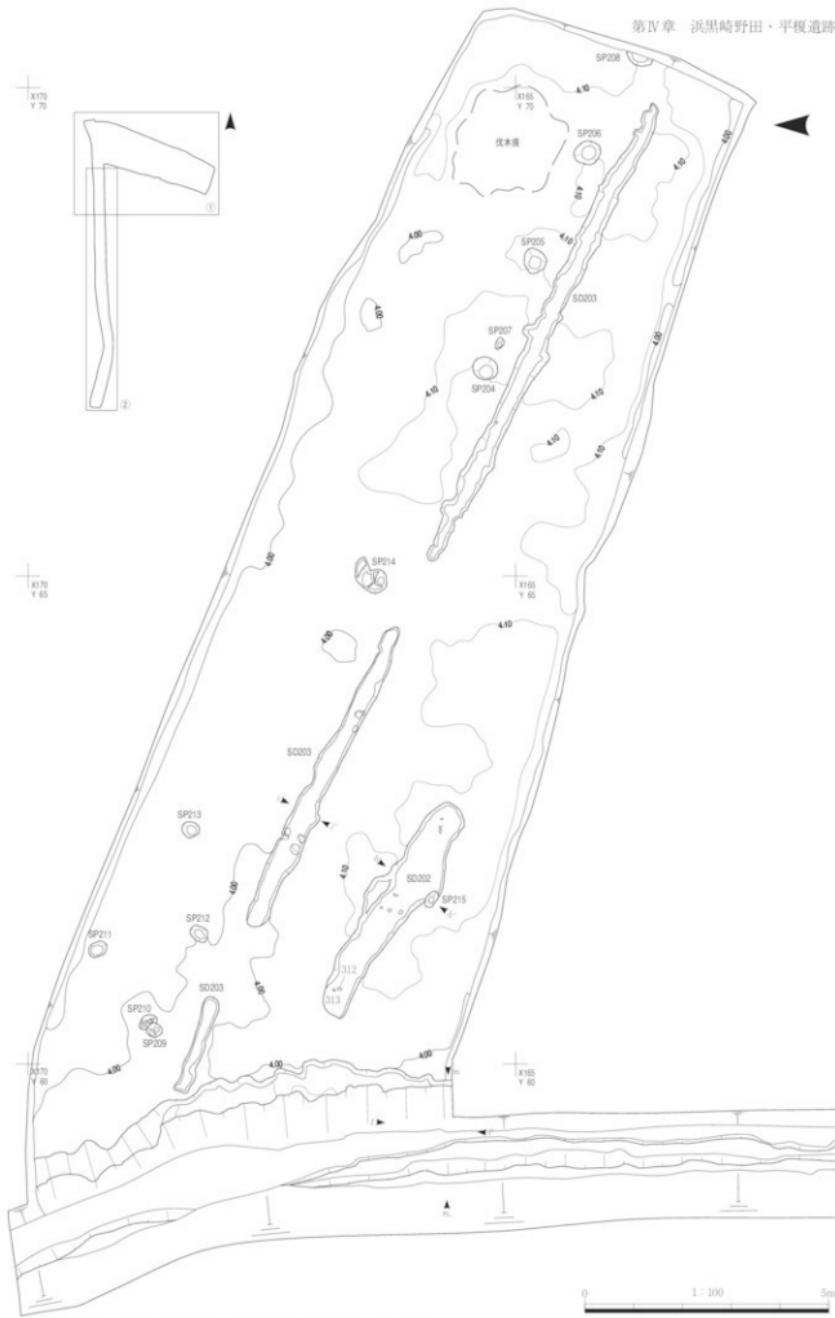
第33図 浜黒崎野田・平榎遺跡D1地区 遺物の出土傾向



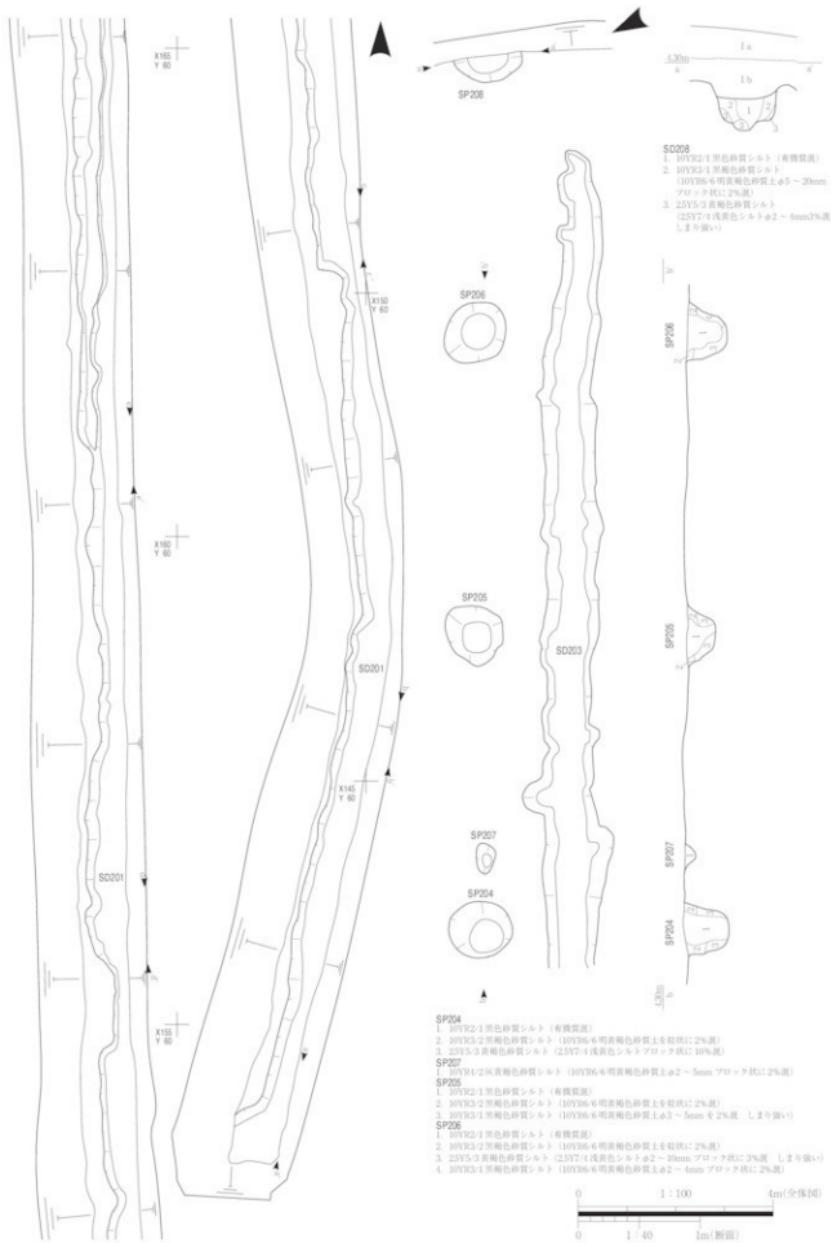
第34図 浜黒崎野田・平櫻遺跡全体図 (1/100)
B地区



第35図 浜黒崎野田・平櫻遺跡全体図 (1/100)
C地区



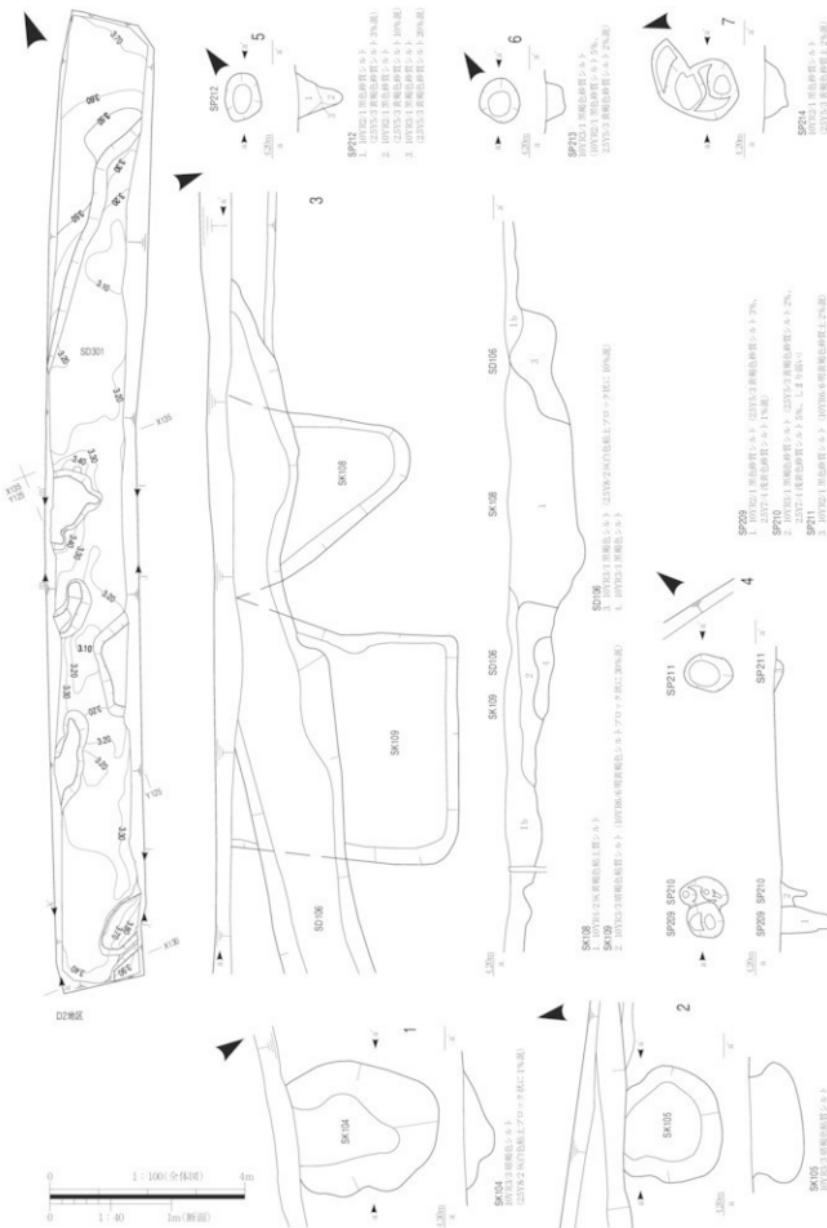
第36図 浜黒崎野田・平櫻遺跡 全体図 (1/100)
D1地図①



第37図 浜黒崎野田・平櫻遺跡 全体図・遺構実測図 (1/100・1/40)

D1地区(2)

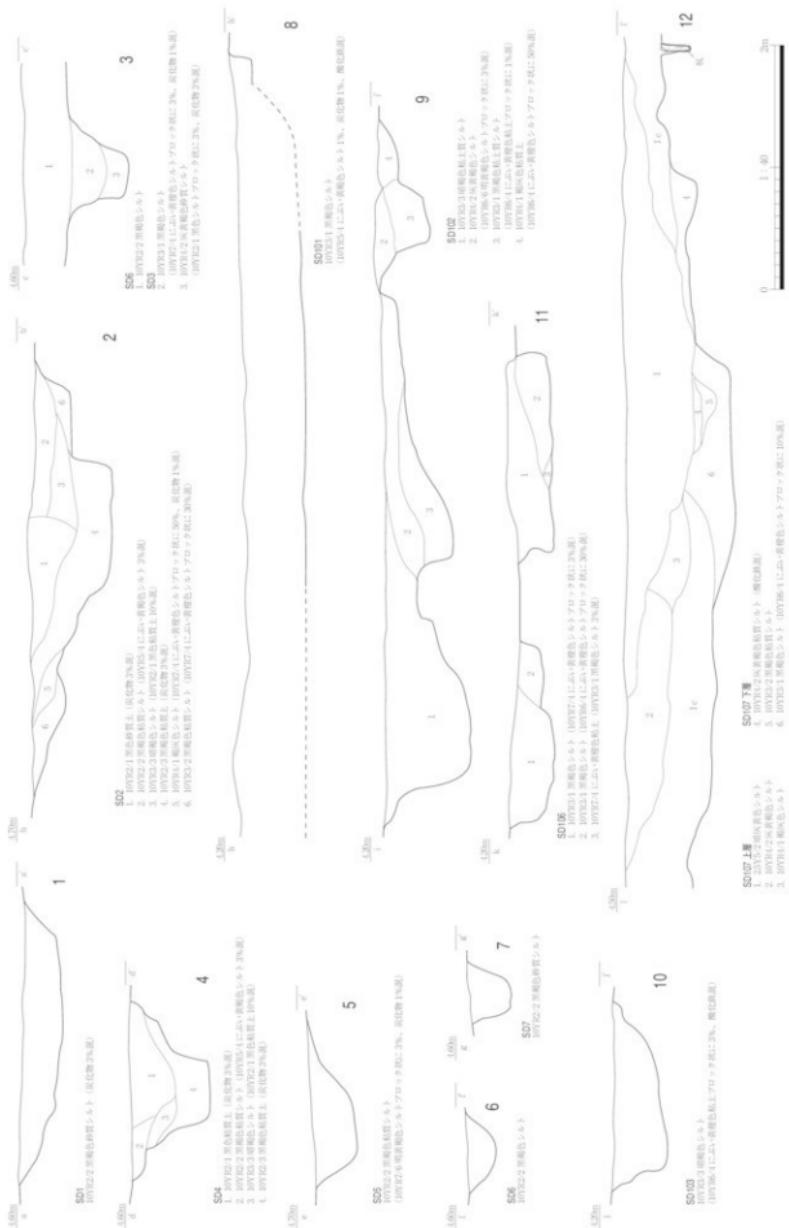
SP204~SP208



第38図 浜黒崎野田・平櫻遺跡 全体図・遺構実測図 (1/100・1/40)

B・D1・D2地区

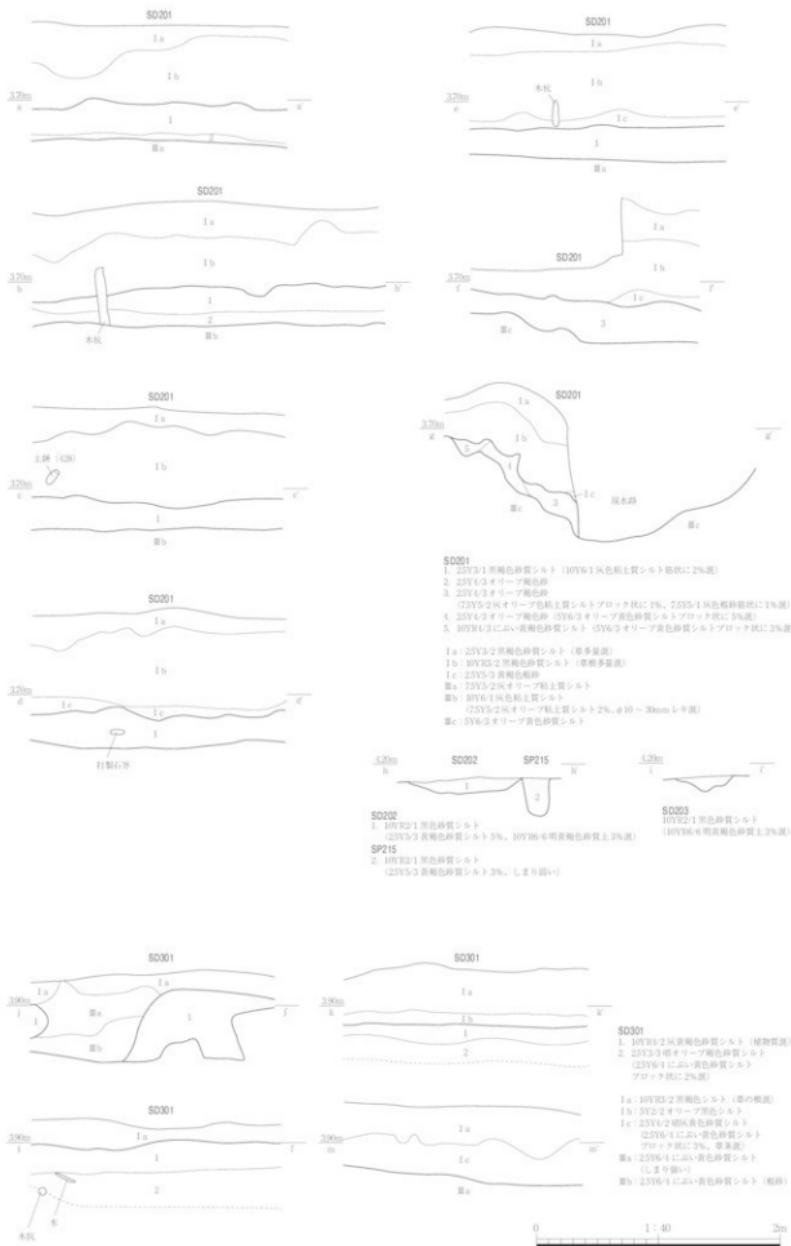
1. SK104
2. SK105
3. SK108・SK109
4. SP209~SP211
5. SP212
6. SP213
7. SP214



第39図 浜黒崎野田平櫻遺跡 遺構実測図 (1/40)

B・C地区

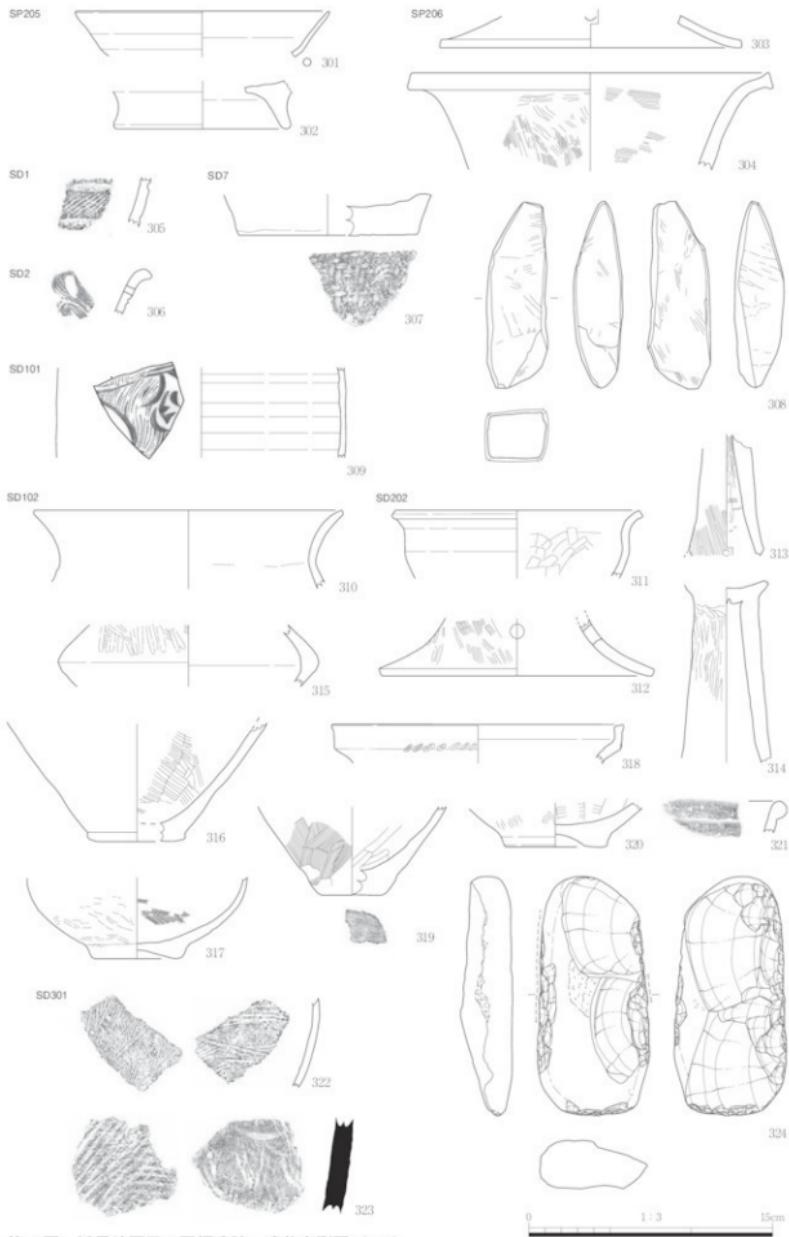
1. SD1 2. SD2 3. SD3・SD6 4. SD4 5. SD5 6. SD6 7. SD7 8. SD101 9. SD102
10. SD103 11. SD106 12. SD107



第40図 浜黒崎野田・平榎遺跡 遺構実測図 (1/40)

D1・D2地区

SD201~203 SD301



第41図 浜黒崎野田・平櫻遺跡 遺物実測図 (1/3)

SP205(301・302) SP206(303・304) SD1(305) SD2(306) SD7(307・308) SD101(309)

SD102(310) SD202(311～321) SD301(322～324)

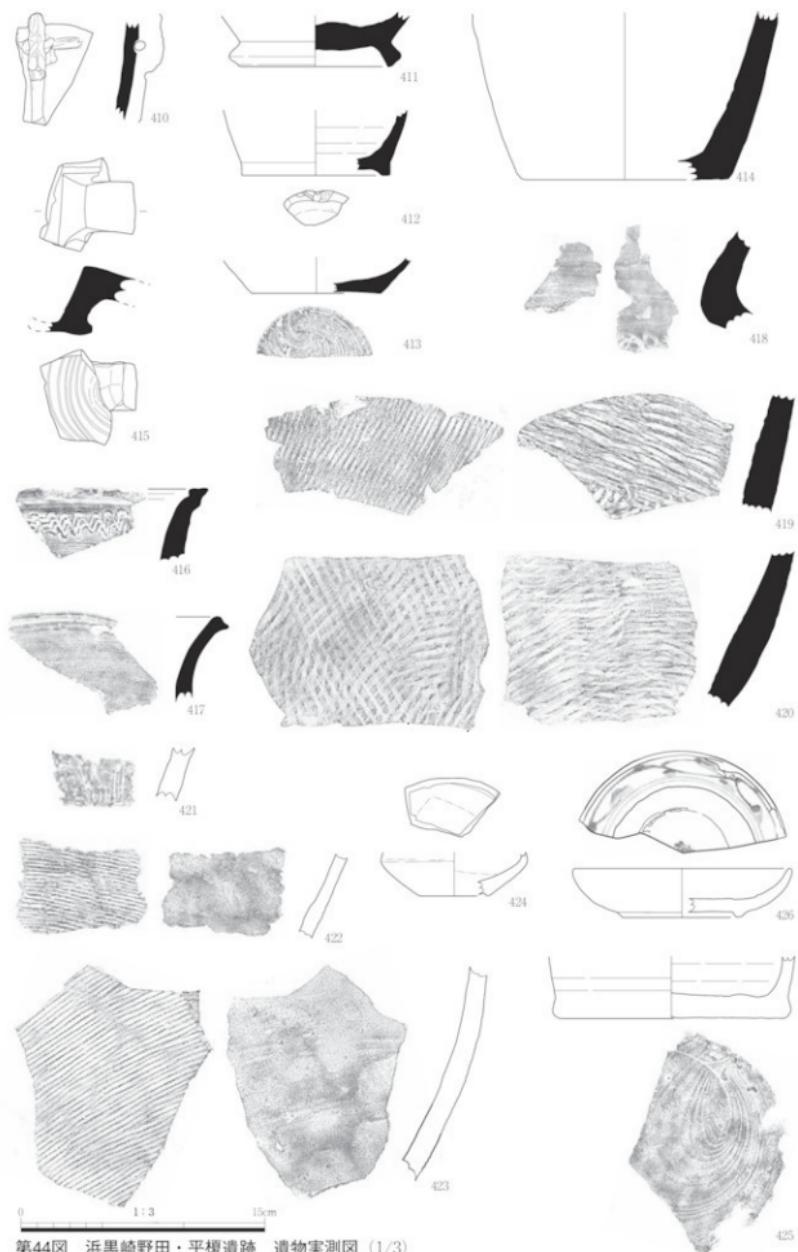


第42図 浜黒崎野田・平櫻遺跡 遺物実測図 (1/3)
SD201

0 1:3 15cm



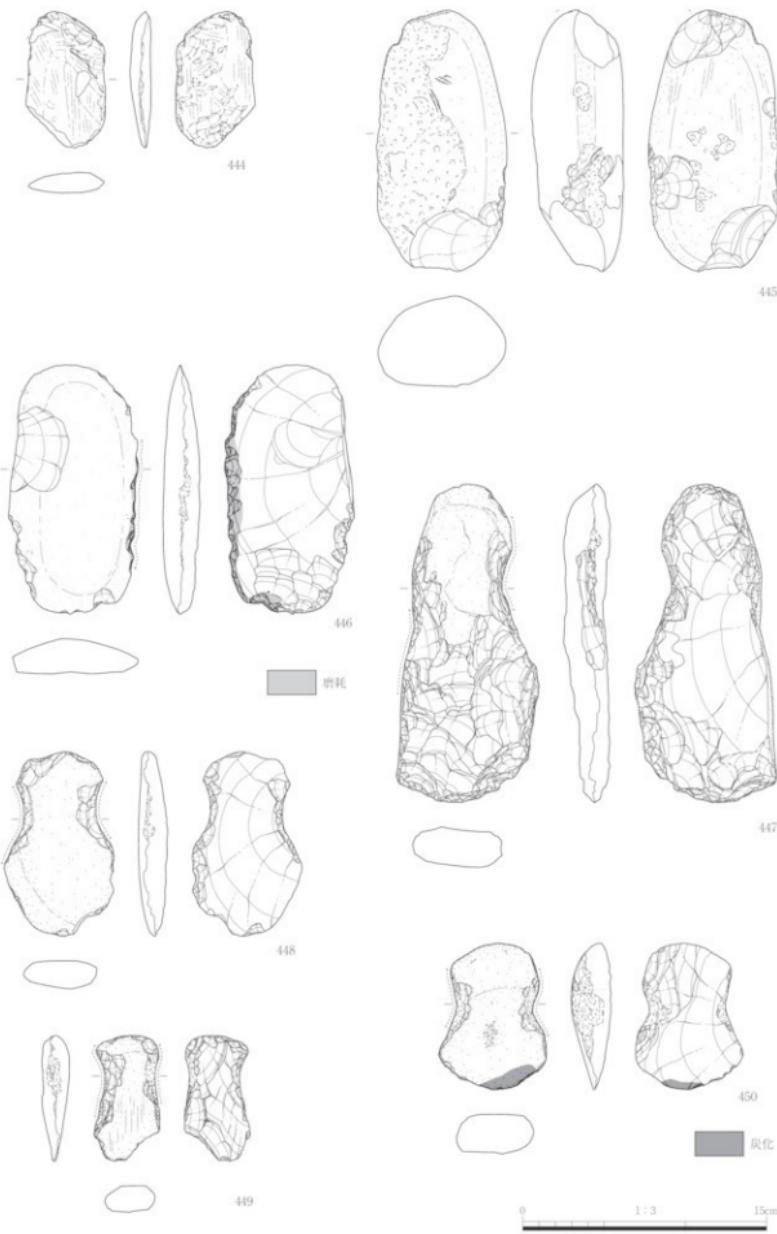
第43図 浜黒崎野田・平櫻遺跡 遺物実測図 (1/3)
SD201



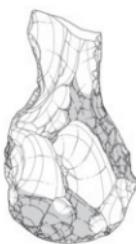
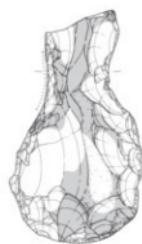
第44図 浜黒崎野田・平櫻遺跡 遺物実測図 (1/3)
SD201



第45図 浜黒崎野田・平櫻遺跡 遺物実測図 (427~434・439~443 1/3, 435~438 1/4)
SD201



第46図 浜黒崎野田・平櫻遺跡 遺物実測図 (1/3)
SD201



451



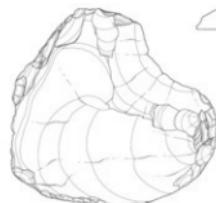
0 1 : 3 15cm



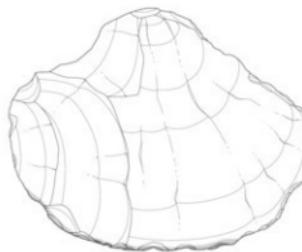
452



453



454

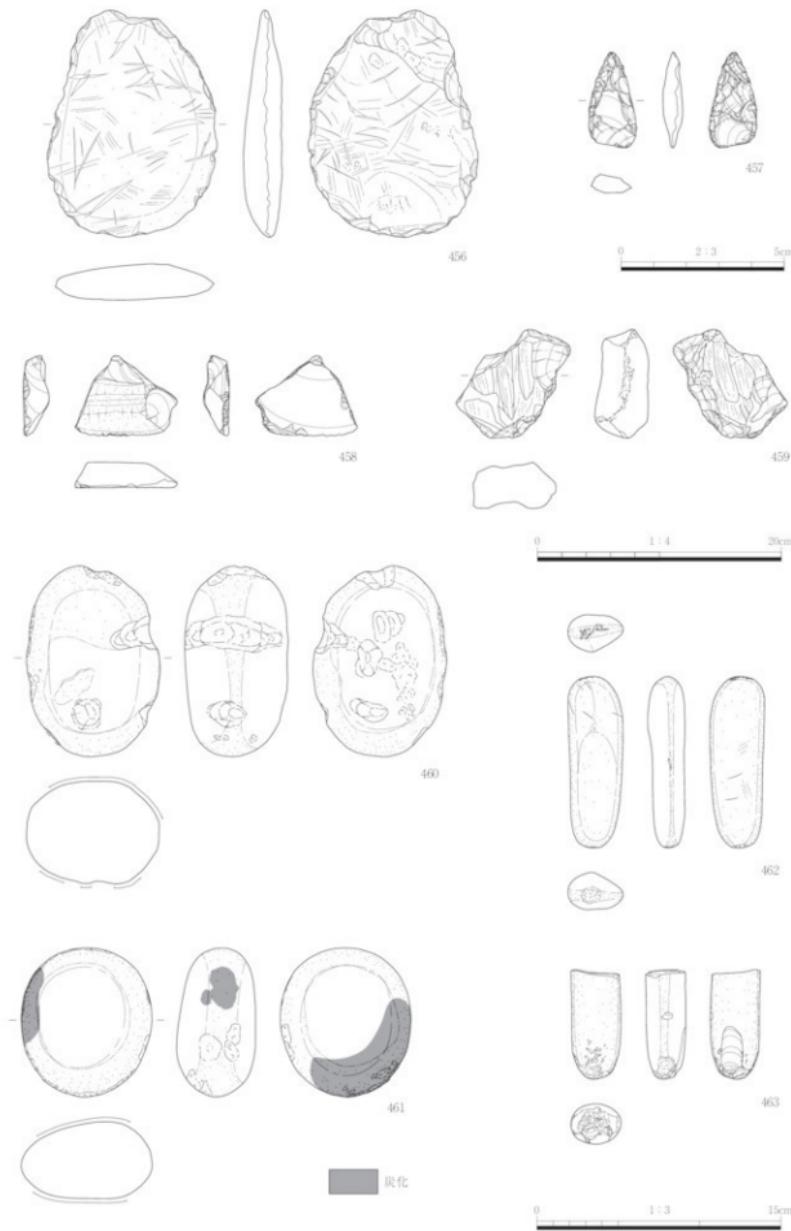


455



■ 削耗 0 2 : 3 5cm

第47図 浜黒崎野田・平櫻遺跡 遺物実測図 (453・455 2/3, 451・452・454 1/3)
SD201



第48図 浜黒崎野田・平櫻遺跡 遺物実測図 (456~458 2/3, 460~463 1/3, 459 1/4)
SD201

SD201



464



465

包含層



466



467



468



469



470



471



472



473



474



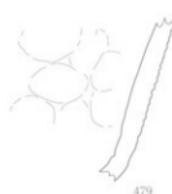
475



476



477



479



480



481



482



483



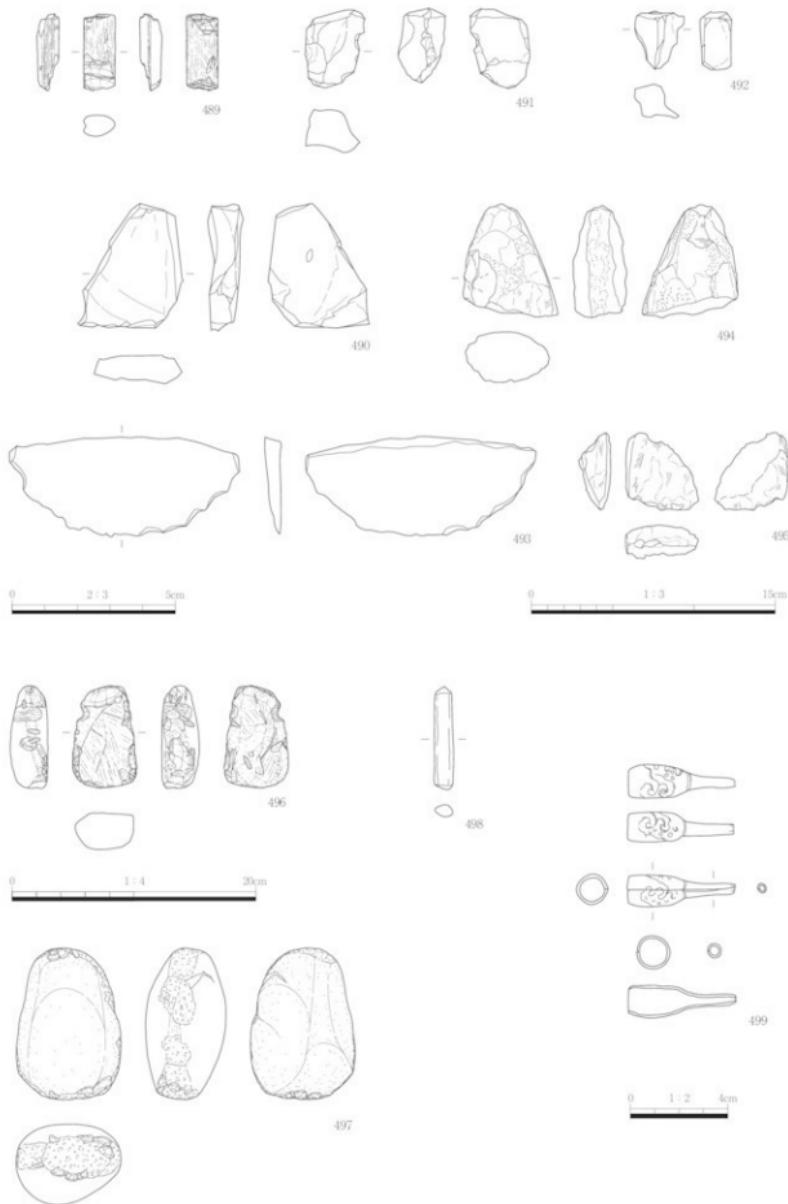
486



488

0 1:3 15cm

第49図 浜黒崎野田・平櫻遺跡 遺物実測図 (1/3)
SD201(464・465) 包含層



第50図 浜黒崎野田・平櫻遺跡 遺物実測図 (499 1/2, 490~493 2/3, 494・495・497・498 1/3, 489・496 1/4)

第20表 浜黒崎野田・平桜遺跡 土器・陶磁器一覧(1)

出土位置	番号	器種	縦横	厚さ	直徑 (mm)	直径 (mm)	高さ	直径 (mm)	底径 (mm)	直徑 (mm)	高さ	直径 (mm)	底径 (mm)	直徑 (mm)
石室	301	S2025	D	手取	25.8	25.8	2.5	手取	25.8	25.8	3.8	手取	25.8	25.8
石室	302	S2026	D	手取	25.0	25.0	2.8	手取	25.0	25.0	3.8	手取	25.0	25.0
石室	303	S2026	D	手取	25.0	25.0	2.8	手取	25.0	25.0	3.8	手取	25.0	25.0
石室	304	S2026	D	手取	25.0	25.0	2.8	手取	25.0	25.0	3.8	手取	25.0	25.0
石室	305	S2031	G	筒	10	10	2.8	筒	10	10	2.8	筒	10	10
石室	306	S2032	G	筒	17	筒	2.8	筒	17	筒	2.8	筒	17	筒
石室	307	S2031	G	筒	17	筒	2.8	筒	17	筒	2.8	筒	17	筒
石室	308	S2031	H	筒	2	筒	2.8	筒	2	筒	2.8	筒	2	筒
石室	309	S2031	H	筒	2	筒	2.8	筒	2	筒	2.8	筒	2	筒
石室	310	S2031	H	筒	2	筒	2.8	筒	2	筒	2.8	筒	2	筒
石室	311	S2032	D	手取	25.6	25.6	2.8	手取	25.6	25.6	3.8	手取	25.6	25.6
石室	312	S2030	D	手取	25.2	25.2	2.8	手取	25.2	25.2	3.8	手取	25.2	25.2
石室	313	S2026	D	手取	25.0	25.0	2.8	手取	25.0	25.0	3.8	手取	25.0	25.0
石室	314	S2026	D	手取	25.0	25.0	2.8	手取	25.0	25.0	3.8	手取	25.0	25.0
石室	315	S2025	D	手取	25.8	25.8	2.8	手取	25.8	25.8	3.8	手取	25.8	25.8
石室	316	S2026	D	手取	25.8	25.8	2.8	手取	25.8	25.8	3.8	手取	25.8	25.8
石室	317	S2026	D	手取	25.8	25.8	2.8	手取	25.8	25.8	3.8	手取	25.8	25.8
石室	318	S2026	D	手取	25.8	25.8	2.8	手取	25.8	25.8	3.8	手取	25.8	25.8
石室	319	S2026	D	手取	25.8	25.8	2.8	手取	25.8	25.8	3.8	手取	25.8	25.8
石室	320	S2026	D	手取	25.8	25.8	2.8	手取	25.8	25.8	3.8	手取	25.8	25.8
石室	321	S2026	D	手取	25.8	25.8	2.8	手取	25.8	25.8	3.8	手取	25.8	25.8
石室	322	S2026	D	手取	25.8	25.8	2.8	手取	25.8	25.8	3.8	手取	25.8	25.8
石室	323	S2026	D	手取	25.8	25.8	2.8	手取	25.8	25.8	3.8	手取	25.8	25.8
石室	324	S2026	D	手取	25.8	25.8	2.8	手取	25.8	25.8	3.8	手取	25.8	25.8
石室	325	S2026	D	手取	25.8	25.8	2.8	手取	25.8	25.8	3.8	手取	25.8	25.8
石室	326	S2026	D	手取	25.8	25.8	2.8	手取	25.8	25.8	3.8	手取	25.8	25.8
石室	327	S2026	D	手取	25.8	25.8	2.8	手取	25.8	25.8	3.8	手取	25.8	25.8
石室	328	S2026	D	手取	25.8	25.8	2.8	手取	25.8	25.8	3.8	手取	25.8	25.8
石室	329	S2026	D	手取	25.8	25.8	2.8	手取	25.8	25.8	3.8	手取	25.8	25.8
石室	330	S2026	D	手取	25.8	25.8	2.8	手取	25.8	25.8	3.8	手取	25.8	25.8
石室	331	S2026	D	手取	25.8	25.8	2.8	手取	25.8	25.8	3.8	手取	25.8	25.8
石室	332	S2026	D	手取	25.8	25.8	2.8	手取	25.8	25.8	3.8	手取	25.8	25.8
石室	333	S2026	D	手取	25.8	25.8	2.8	手取	25.8	25.8	3.8	手取	25.8	25.8
石室	334	S2026	D	手取	25.8	25.8	2.8	手取	25.8	25.8	3.8	手取	25.8	25.8
石室	335	S2026	D	手取	25.8	25.8	2.8	手取	25.8	25.8	3.8	手取	25.8	25.8
石室	336	S2026	D	手取	25.8	25.8	2.8	手取	25.8	25.8	3.8	手取	25.8	25.8
石室	337	S2026	D	手取	25.8	25.8	2.8	手取	25.8	25.8	3.8	手取	25.8	25.8
石室	338	S2026	D	手取	25.8	25.8	2.8	手取	25.8	25.8	3.8	手取	25.8	25.8

第20表 沼黒崎野田・平畠遺跡 土器・陶磁器一覧(2)

登録番号	出土場所	地質	施設	埋深	直徑			口径	底面	腹面	側面	形式	周囲	内面	
					全長	幅	厚さ								
339	S3203	D1-20-301	直	30cm	30	25	5	30	30	30	30	30	コルク付・外輪	縄文	縄文
340	S3203	D1-24-301	直	30cm	30	25	5	30	30	30	30	30	コルク付・外輪	縄文	縄文
341	S3203	D1-25-301	直	30cm	30	25	5	30	30	30	30	30	コルク付・外輪	縄文	縄文
342	S3203	D1-24-301	直	30cm	30	25	5	30	30	30	30	30	コルク付・外輪	縄文	縄文
343	S3203	D1-26-301	直	30cm	30	25	5	30	30	30	30	30	コルク付・外輪	縄文	縄文
344	S3203	D1-25-301	直	30cm	30	25	5	30	30	30	30	30	コルク付・外輪	縄文	縄文
345	S3203	D1-24-301	直	30cm	30	25	5	30	30	30	30	30	コルク付・外輪	縄文	縄文
346	S3203	D1-24-301	直	30cm	30	25	5	30	30	30	30	30	コルク付・外輪	縄文	縄文
347	S3203	D1-24-301	直	30cm	30	25	5	30	30	30	30	30	コルク付・外輪	縄文	縄文
348	S3203	D1-24-301	直	30cm	30	25	5	30	30	30	30	30	コルク付・外輪	縄文	縄文
349	S3203	D1-24-301	直	30cm	30	25	5	30	30	30	30	30	コルク付・外輪	縄文	縄文
350	S3203	D1-25-301	直	30cm	30	25	5	30	30	30	30	30	コルク付・外輪	縄文	縄文
351	S3203	D1-24-301	直	30cm	30	25	5	30	30	30	30	30	コルク付・外輪	縄文	縄文
352	S3203	D1-24-301	直	30cm	30	25	5	30	30	30	30	30	コルク付・外輪	縄文	縄文
353	S3203	D1-25-301	直	30cm	30	25	5	30	30	30	30	30	コルク付・外輪	縄文	縄文
354	S3203	D1-26-301	直	30cm	30	25	5	30	30	30	30	30	コルク付・外輪	縄文	縄文
41	S3203	D1-26-301	直	30cm	30	25	5	30	30	30	30	30	コルク付・外輪	縄文	縄文
357	S3203	D1-24-301	直	30cm	30	25	5	30	30	30	30	30	コルク付・外輪	縄文	縄文
358	S3203	D1-24-301	直	30cm	30	25	5	30	30	30	30	30	コルク付・外輪	縄文	縄文
359	S3203	D1-24-301	直	30cm	30	25	5	30	30	30	30	30	コルク付・外輪	縄文	縄文
360	S3203	D1-24-301	直	30cm	30	25	5	30	30	30	30	30	コルク付・外輪	縄文	縄文
361	S3203	D1-24-301	直	30cm	30	25	5	30	30	30	30	30	コルク付・外輪	縄文	縄文
362	S3203	D1-24-301	直	30cm	30	25	5	30	30	30	30	30	コルク付・外輪	縄文	縄文
363	S3203	D1-24-301	直	30cm	30	25	5	30	30	30	30	30	コルク付・外輪	縄文	縄文
364	S3203	D1-25-301	直	30cm	30	25	5	30	30	30	30	30	コルク付・外輪	縄文	縄文
365	S3203	D1-24-301	直	30cm	30	25	5	30	30	30	30	30	コルク付・外輪	縄文	縄文
366	S3203	D1-24-301	直	30cm	30	25	5	30	30	30	30	30	コルク付・外輪	縄文	縄文
367	S3203	D1-24-301	直	30cm	30	25	5	30	30	30	30	30	コルク付・外輪	縄文	縄文
368	S3203	D1-25-301	直	30cm	30	25	5	30	30	30	30	30	コルク付・外輪	縄文	縄文
369	S3203	D1-25-301	直	30cm	30	25	5	30	30	30	30	30	コルク付・外輪	縄文	縄文
370	S3203	D1-26-301	直	30cm	30	25	5	30	30	30	30	30	コルク付・外輪	縄文	縄文
371	S3203	D1-26-301	直	30cm	30	25	5	30	30	30	30	30	コルク付・外輪	縄文	縄文
372	S3203	D1-24-301	直	30cm	30	25	5	30	30	30	30	30	コルク付・外輪	縄文	縄文
373	S3203	D1-24-301	直	30cm	30	25	5	30	30	30	30	30	コルク付・外輪	縄文	縄文

第V章 横越水窪遺跡

1 概要

横越水窪遺跡は常願寺川左岸の平野部に位置する。平成27年に新たに遺跡地図に追加された遺跡で、あいの風とやま鉄道の線路の南北に広がる。調査区は線路南側に位置し、遺跡の南端に近い。現況は水田で、東西方向の水路工事部分を対象に調査を行った。検出面の標高は3.7~3.9mで、東側が若干低くなるものの、ほぼ平坦な地形である。調査区はA地区のみで、中央の農道を境に、西をA-1区、東をA-2区とし、それぞれ西側を起点として起点からの距離を基準に調査を行った。遺構は溝15条、井戸2基、土坑20基検出した。遺物は量が少ないが、縄文土器から近世の土器・陶磁器、木製品、石製品、金属製品があり、遺構からは主に中世のものが出土している。

2 層序

基本層序はI a層：暗灰黄色シルト（耕盤土・盛土）、I b層：灰黄褐色粘土質シルト（盛土）、I c層：黒褐色粘土質シルト（盛土）、II層：黒褐色粘土質シルト（遺物包含層）、III層：明黄褐色粘土質・灰白色砂質シルト（地山）となる。現在の耕作土は発掘調査前には場整備本体工事業者により除去されているため記録していない。

3 遺構

（1）溝

1号溝（SD1、第52図）

A-2区東端に位置し、南北方向に延びる。調査区内で最も標高の低い箇所となる。最深部は幅1.92m、深さ0.61mを測る。SD1の東側は調査区東端まで埋土が広がり、地形が一段下がる。SD2と並行し、同時期に存在したと考えられる。埋土は黒褐色粘土質土を基調とする。出土遺物に瀬戸（510）があり、直上の包含層からは銅鏡（522・523）が出土している。

2号溝（SD2、第52図）

A-2区東側に位置し、南北方向に延びる。幅2.6m、深さ0.26mを測る。SD1と並行し、同時期に存在したと考えられる。埋土は上層は地山が混じる黒色砂質シルト、下層は黒色砂質シルトを基調とする。出土遺物はない。

8号溝（SD8、第53図）

A-2区中央東寄りに位置する。調査区内の標高の最も高い箇所に位置し、南東から北西に延びる。幅0.55、深さ0.24mを測る。SK9、SK10を切り、埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物はない。

20号溝（SD20、第52図）

A-2区西端に位置し、南東から北西へ延びる。幅1.94m、深さ0.32mを測る。SD21と並行し、同時期に存在したと考えられる。埋土は黒褐色粘土質土を基調とする。遺物は珠洲（509）が出土しており、

遺構の年代は中世と考えている。

21号溝（SD21、第52図）

A - 2 区西端に位置し、南東から北西へ延びる。幅1.00m、深さ0.52mを測る。SD20と並行し、同時期に存在したと考えられる。埋土は上層が黒褐色粘土質シルト、中層は褐灰色粘土質土、下層は黒褐色粘土質シルトを基調とする。遺物は出土していないが、遺構の年代はSD20と同様に中世と考えている。

23号溝（SD23、第52図）

A - 1 区東側に位置し、南北に延びる。幅0.61m、深さ0.20mを測る。埋土は灰黄褐色粘土質シルトを基調とする。SD24と交わるが切り合いではなく、同時期に存在したと考える。遺物は土師器、須恵器が出土した。SD24からは緑色凝灰岩剥片（516）が出土したが、流れ込みと考える。

25号溝（SD25、第52図）

A - 1 区東側に位置し、南北に延びる。幅0.64m、深さ0.13mを測る。埋土は灰黄褐色粘土質シルトを基調とする。SD23・SD26と並行し、同じ埋土であることから、同時期に存在したと考える。出土遺物はない。

26号溝（SD26、第52図）

A - 1 区中央に位置し、東西に延びる。幅1.03m、深さ0.38mを測る。埋土は灰黄褐色粘土質シルトを基調とする。SD25・SD27と並行し、同じ埋土であることから、同時期に存在したと考える。出土遺物はない。

27号溝（SD27、第52・53図）

A - 1 区西側に位置し、南北に延びる。幅1.02m、深さ0.28mを測る。埋土は灰黄褐色粘土質シルトを基調とする。SD26と並行し、同じ埋土であることと位置からSD25と同一の溝の可能性がある。出土遺物はない。

32号溝（SD32、第53図）

A - 1 区中央西寄りに位置し、南西から北東へ延びる。幅3.16m、深さ0.84mを測る。調査区内で最も年代の新しい溝である。上層は以前のは場整備の際に埋められており、埋土はI a層であるが、底部付近である下層はオリーブ黒色粘土質土を基調とする。1946年（昭和21年）の航空写真を見ると、国鉄線路（現あいの風とやま鉄道）を境に調査区付近である南側は現在と変化ない水田の区画となっているが、北側は自然地形を利用した区画となっている。そのひとつに位置と方向が一致するSD32の延長かと予想されるものがあり、SD32は昭和21年以前に埋められた溝と考える。そのほかの遺構はこれよりも古く、中近世と考えている。遺物は砥石（518）が出土した。

33号溝（SD33、第52図）

A - 1 区西端に位置し、南西から東に延びる。幅0.42m、深さ0.13mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物はない。

34号溝（SD34、第52図）

A - 1 区西端に位置し、南西から北東に延びる。幅0.33m、深さ0.20mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。SD35と合流して切るが、埋土が似ており時期差はあまりないと考える。遺物は須恵器が出土した。

35号溝（SD35、第52図）

A - 1 区西端に位置し、南北に延びる。幅0.37m、深さ0.18mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを

基調とする。遺物は土師器が出土した。

(2) 井戸

22号井戸 (SE22、第53図、図版27)

A-1区東端に位置する。調査区境内に掛かるため一部を検出し、平面形は不明である。残存長1.58m、残存幅1.5m、深さ0.81mを測る。埋土は褐色粘質土を基調とする。調査期間中は湧水が著しく水が常に溜まっている状況であった。出土遺物はない。

30号井戸 (SE30、第53図)

A-1区中央に位置する。調査区境内に掛かるため一部を検出し、平面形は不明である。残存長2.12m、残存幅1.06m、深さ0.83mを測る。埋土は上層が灰色粘質土、下層はオリーブ色粘質土を基調とする。遺物は縄文土器、弥生土器（502）、土師器、板、磨製石斧（517）が出土した。遺物の年代は古いものがあるが、井戸の年代は中近世と考える。

(3) 土坑

9号土坑 (SK9、第53図)

A-2区中央東寄りに位置する。調査区境内に掛かるため一部を検出し、平面形は不明である。長さ2.48m、残存幅0.54m、深さ0.39mを測る。埋土は黒褐色粘質土を基調とする。SK10を切り、SD8に切られる。出土遺物はない。

10号土坑 (SK10、第53図)

A-2区中央東寄りに位置する。SK9に切られるため平面形は不明である。長さ1.90m幅1.60m、深さ0.23mを測る。埋土は黒褐色粘質シルトを基調とする。SK9、SD8に切られる。出土遺物はない。

（高柳由紀子）

4 遺物

遺構からの出土遺物は少ないが、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、珠洲、瀬戸、越中瀬戸、肥前陶磁、陶磁器、木製品、石製品、銭があり、中近世のものが主となる。（第54図、図版26）

501は縄文土器。深鉢の胴部で、外面にススが付着する。502は弥生土器。壺の底部で、外面はタテ方向のハケ、スス付着、内面にはコゲが付着する。503~506は須恵器。503・504は杯蓋で、503は端部をつまむ、504は端部が丸い。9~10世紀のもの。506は横瓶の閉塞部。507は中世土師器皿。口縁部が外反して開き、端部をつまむもので、15世紀後半~16世紀初頭のもの。508・509は珠洲。508はIV期の片口鉢。510・511は瀬戸。灰釉の丸皿で、511は全面施釉される。16世紀前半のもの。512は越中瀬戸の向付。灰釉で内糞、被熱しており、17世紀前半~中頃のもの。513・514は伊万里の碗。513は鋸歯状の網目文。514は口縁端部内面がやや肥厚し、内面は釉の掛け分けがされる。17世紀前半のもの。515は唐津の刷毛目文鉢。外面は刷毛目による横線、内面は波状文が施され、見込みに砂目がある。18世紀のもの。516は緑色凝灰岩の剥片。517は磨製石斧の刃部。518は打製石斧で、刃部を欠損している。519~521は凝灰岩製の砥石。519は欠損により1面の砥面のみが残るもの、520は3面、521は4面の砥面があり、よく使われている。522は熙寧元寶（初鑄1023年）、523は天聖元寶（初鑄1068年）であり、いずれも北宋銭である。

（田中道子）

5 総 括

発掘調査では溝・井戸・土坑が見つかった。溝は出土遺物量が少なく、生活に関わる水路ではなく、耕作に関する水路と考える。あいの風とやま鉄道の線路と平行ないし垂直に位置する現在の水路は、1946年の航空写真で確認できる。遺跡範囲を通る富山駅～魚津駅間は1908年（明治41年）に開業しており、現在の水田の原形は1908年～1946年の間に整備されたと考える。発掘調査では、現在の水路に対し斜めに位置する溝が多くみつかっている。整備以前の自然地形を利用した水田の水路と考えられ、今回の調査では少なくとも2時期あったことがわかった。井戸2基は湧水が多く、溝と同様に耕作に関わるものと考える。

(高柳由紀子)

第21表 横越水塗遺跡 溝一覧

遺構	幅(m)	深(m)	出土遺物	時期	切り合ひ	参考	種別	図版
SD01	1.92	0.61	陶片				S2	
SD02	2.60	0.26					S2	
SD08	0.55	0.24			>SK9, SK10		S2	
SD20	1.94	0.32	陶片				S2	
SD21	1.00	0.52					S2	
SD23	0.61	0.20	土器部、頭蓋骨				S2	
SD24	1.72	0.26	陶片(緑色磨灰焼)				S2	
SD25	0.64	0.13					S2	
SD26	1.03	0.38			>SD01		S2	
SD27	1.02	0.28			>SD02		S2	
SD28	0.52	0.08			>SD06, SE30		S2	
SD32	1.16	0.64	石器	近現代	>SK27		S3	
SD33	0.42	0.13					S2	
SD34	0.33	0.20	陶器部		>SD05		S2	
SD35	0.37	0.18	土器部		>SD04		S2	

第22表 横越水塗遺跡 井戸一覧

遺構	平面形状	幅(m)	高(m)	深(m)	出土遺物	時期	切り合ひ	参考	種別	図版
SE02 (不規)	(不規)	1.50	1.50	0.81					S3	27
SE30 (横円)	2.12	1.06	0.63	漢文土器、灰牛土器、土器部、瓶、磨製石斧 中→古世			>SD01		S3	

第23表 横越水塗遺跡 土坑一覧

遺構	平面形状	幅(m)	高(m)	深(m)	出土遺物	時期	切り合ひ	参考	種別	図版
SK9 (方)	正四角	0.54	0.30				>SK10, >SK8		S3	
SK10 (方)	正四角	1.60	0.23				<SK8, SK9, >SK11		S3	
SK13 (円)	(円)	0.28	0.14	0.05					S3	

第24表 横越水塗遺跡 土器・陶器目一覧

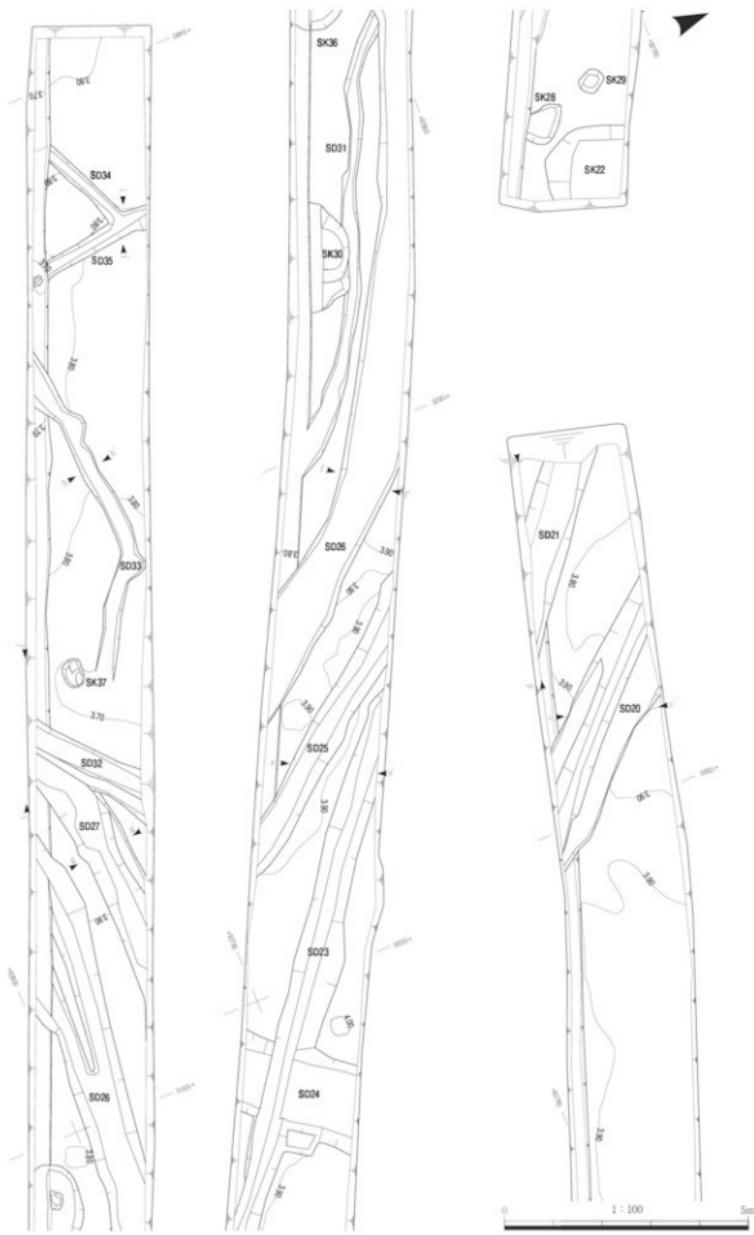
番号	中国	日本国	遺構	出土地点	種類	器形	土厚(cm) G付箇所/断面箇所/断面付箇所	時期	粘土		種	色調	参考
									長(m)	幅(m)			
501			A1-11 Ⅲ層	陶土土器	薄型	罐	4.8	10Y9/12-10灰褐色			粘土	褐灰色、外付保有	
502			SE030 60cm	陶土土器	厚型	罐		23Y7/29褐色、黑色有			粘土	内付保有	
503			A1-3 Ⅲ層	陶土土器	中型	罐	12.5	9～10C			粘土		
504			A1-45 Ⅰ層	陶土土器	中型	罐	11.4	9～10C			粘土	5Y7/28白色	変化的ため測定不可能
505			A1-41 Ⅰ層	陶土土器	中型	罐		6.0	9～10C		粘土	5Y6/26オーブ白色	
506			A2-49 Ⅱ層	陶土土器	中型	罐		9C			粘土	25Y6/1灰白色	
507			A2-51 Ⅱ層	中世土器	中型	罐	14.0	7.5Y6/6灰色			粘土		
508			A1-49 1m	陶土	片			8周			粘土	5Y5/19灰	
509			SE030 A1-70	陶土	無			ESC半手～HCK手	NS-96	色	粘土		内付而て共食ナゲ消失?
510	26		SDH A2-47	洞口	無		12.8	16C前半	23Y8/18白色	灰	粘土	5Y6/3オーブ黄色	
511			A1-31 Ⅲ層	洞口	無		6.5	16C前半	25Y7/24白色	灰	粘土	7Y5Y/38オーブ色	
512			A1-21 Ⅲ層	罐	中	罐	9.8	4.4	8周/17C前後/4a		粘土	前面附着有、既剥、内付有	
513			A1-6 Ⅲ層	伊万里	無		9.8	16C後半～1650年	5Y8/19白色	灰	粘土	9Y16C3/暗青灰色、粗目立	
514			A1-40 Ⅲ層	伊万里?	無		10.0	丸磁Ⅲ期/1630～1650年代	3Y7/19白色		粘土	8付10BG3/暗青灰色	
515			A1-39 Ⅱ層	碧津	無			丸磁Ⅳ期/1600～1600年代	3Y5/28褐色	灰	粘土	10Y3/38褐色	碧毛口文、内面紺目

第25表 横越水塗遺跡 石製品一覧

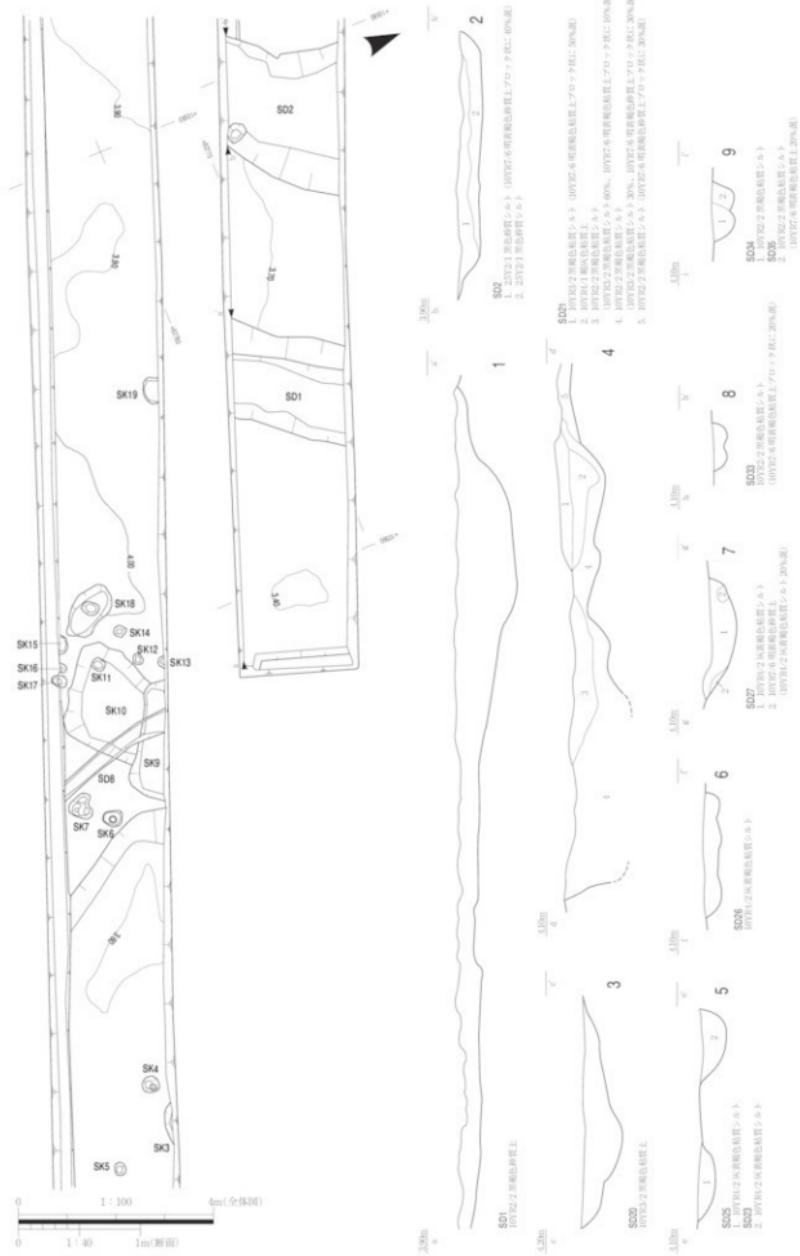
番号	遺構	中国	日本国	遺構	出土地点	種類	法量(cm・g)			石材	名称	略号	参考
							長さ	幅	厚さ				
516				SD94 A1-48		洞片	2.5	2.2	0.8	510	綠色磨灰岩	GT	
517				SK30		磨製石斧	(1.3)	(2.4)	(0.6)	311	透明白岩	万葉小所	
518	26			A2-41 西側	壁面	打制石斧	(10.9)	6.2	2.5	25547	緑灰岩(流紋岩の可能性あり?)	芋U	万葉大所
519				A2-33 北側	壁面	砾石	9.4	(5.8)	(5.0)	18749	緑灰岩(流紋岩の可能性あり?)	芋U	次相 破面4
520				A2-50 Ⅲ層	壁面	砾石	8.0	3.8	3.0	10099	緑灰岩(流紋岩の可能性あり?)	芋U	砾石3
521				SD032		砾石	(7.7)	4.5	2.7	11765	緑灰岩(流紋岩の可能性あり?)	芋U	砾石4

第26表 横越水塗遺跡 金属製品一覧

番号	遺構	中国	日本国	遺構	出土地点	種類	法量(cm・g)			参考		
							長さ	幅	厚さ			
54	S22			A2-51	西側		2.5	2.5	0.1	2435	天保元寶 北木 初唐1023年	
	S23	26		A2-51	西側		2.5	2.5	0.1	200	天保元寶 北木 初唐1023年	



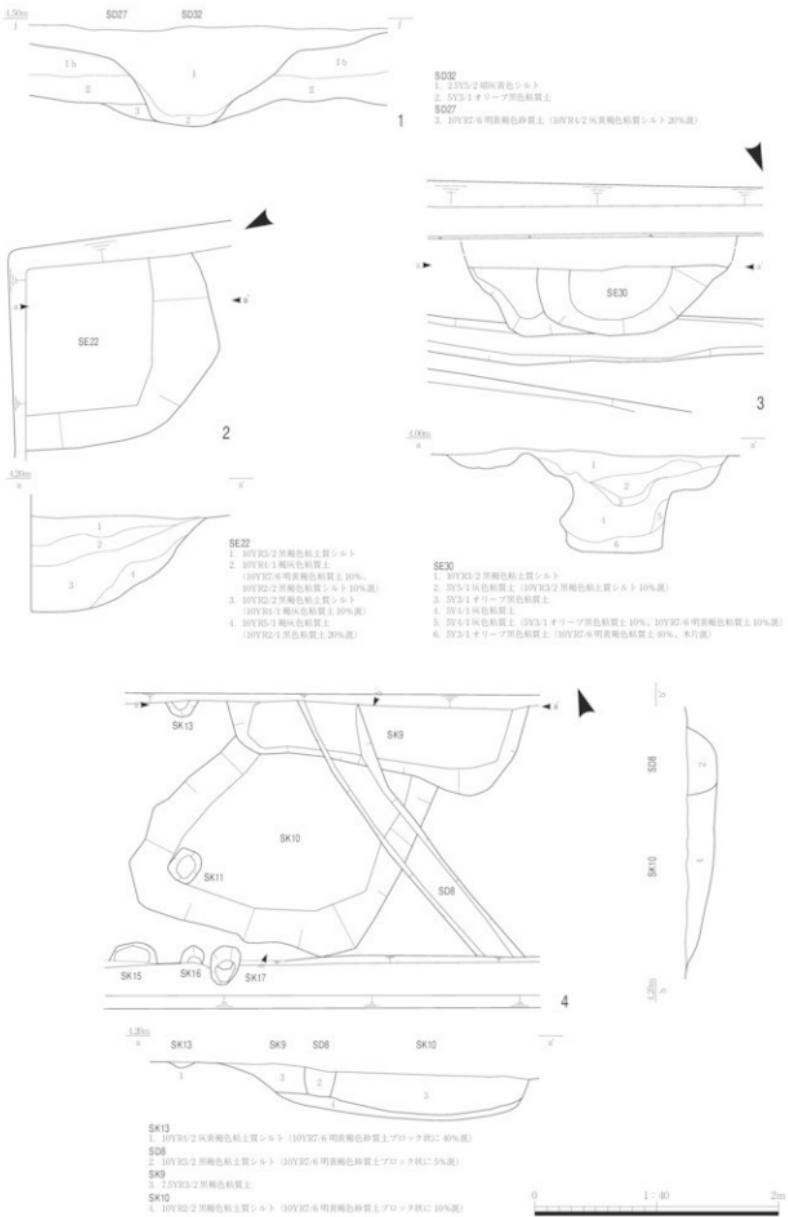
第51図 横越水窪遺跡 全体図 (1/100)
A地区①



第52図 横越水窪遺跡 全体図・遺構実測図 (1/100・1/40)

A地[②]

1. SD1 2. SD2 3. SD20 4. SD21 5. SD23・SD25 6. SD26 7. SD27 8. SD33
9. SD34・SD35



第53図 横越水窪遺跡 遺構実測図 (1/40)

A地区

1. SD32 2. SE22 3. SE30 4. SD8 · SK9 · SK10 · SK13



第54図 横越水塗遺跡 遺物実測図 (522~523 1/1, 516 2/3, 501~515・517~521 1/3)
SD1(510) SD20(509) SD24(516) SE30(502・517) SD32(518) 包含層

第VI章 横越遺跡

1 概 要

横越遺跡はいの風とやま鉄道の北側、浜黒崎野田・平榎遺跡の北東に隣接して広がる遺跡で、その面積は141,676m²である。調査区は市道針原中町浜黒崎線の東側に位置し、東側の雑木林と西側の水田の境を蛇行して南から北に流れる水路部分で、カワニナなどが生息していた。

検出面の標高は3.3~3.9mで、南端から75m付近で検出面が一段低くなっている、旧区画の影響と考えられる。調査区中央以南では、東側にテラス状の平坦部を確認した。調査前まで使われていた水路には、近世以降の陶磁器をはじめ近現代のゴミなども捨てられていた。遺構は溝3条であり、調査区の大半がSD1となっている。遺物には弥生土器2(26g)、土師器6(6g)、近世以降陶磁器6点(319g)の計12点(351g)があり、その多くはSD1から出土した。このうち実測を行ったのは、全体の44%にあたる4点である。

2 層 序

基本層序は、I a層：黒褐色シルト（表土であるが木根が多い）、I b層：黒褐色シルト（床土とみられる盛土）、II a層：暗褐色シルト・II b層：暗褐色シルト・II c層：黒色シルト（湿地土）、III層：明黄褐色砂質シルト（地山）または遺構となり、遺物包含層はない。

3 遺 構

1号溝 (SD1、第57図、図版28)

調査区に沿う形ではば南北に走り、SD2に切られる。断面は逆台形を呈し、埋土は主に黒色粘土質シルトやピート層からなる。大きく蛇行しており、全容をつかめないが、調査区南端から30m地点で東肩と川底の西側立ち上がりを確認した。溝底の標高は調査区南端で3.0m、30m地点で2.9mであり、東側のテラス状の平坦部との比高は調査区南端で0.8m、30m地点で0.4mを測る。

遺物は弥生土器(601・602)、土師器、近世以降陶磁器が破片で出土。底面近くから底部糸切りの土師器挽または皿(603)が出土しており、平安時代まで遡る可能性がある。

2号溝 (SD2、第57図、図版28)

現水路の一部と考える。調査区内を蛇行し、断面は半円形を呈し、埋土は主に黒褐色砂質シルトである。遺物は伊万里(604)のほか、近世以降陶磁器が破片で出土。

3号溝 (SD3、第57図)

調査区北側でSD1に沿い、SD2に切られる。断面は半円形を呈し、埋土はSD1と同じ黒色粘土質シルトであり、併走していることから同時期と考える。出土遺物はない。

4 遺 物

出土量は少ないが、弥生時代～近世以降までの遺物がある。(第58図)

601・602は弥生土器。601は高杯で、内外面は摩耗が激しく、調整は不明。602は壺頸部。頸部外面はタテハケ、肩部以下はヨコハケ、内面は摩耗により調整は不明。いずれも後期のもの。603は土師器碗または皿で、回転糸切の底部。604は伊万里碗。花文と二重格子目文が描かれる。

5 総 括

調査区の大半を占めるSD1は大きく蛇行し、東側にあるテラス状の平坦部から急傾斜で落ち込む幅2m超の溝であることを確認したが、その全容は把握できなかった。出土遺物量が極めて少ないとから、農耕に伴う水路であり、土地境を示す水路であった可能性が高いと考える。

今回の調査では溝のみを検出したが、平成27年度の試掘調査^{注1}で調査区西側に設定された32T～36Tの5箇所では、井戸や土坑群が検出され、弥生土器が出土した井戸や古代土師器が出土した溝などは、遺構の時期の一端を示している。また、出土遺物量は少ないが、縄文土器・弥生土器・古代土師器・磁器や石製品がある。この様相は、南西約200mに位置する浜黒崎野田・平復遺跡D1地区で検出した遺構や出土遺物の組成と類似している^{注2}。遺構検出面の標高は概ね3.4～3.8mであり、標高4mの浜黒崎野田・平復遺跡D1地区から緩やかに傾斜した地形に広がる、近接した集落、もしくは同一集落の縁辺部であると考える。

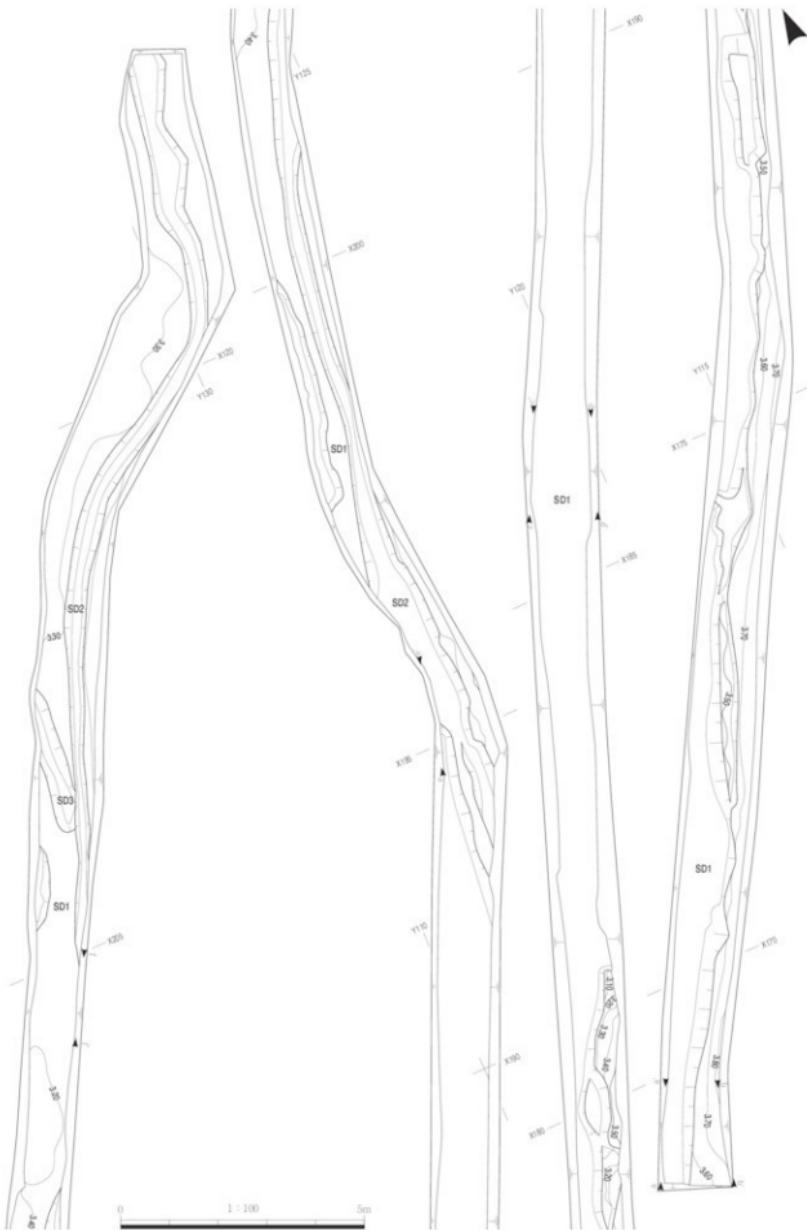
(田中道子)

注1 富山市教育委員会による試掘調査報告(平成27年度)による。

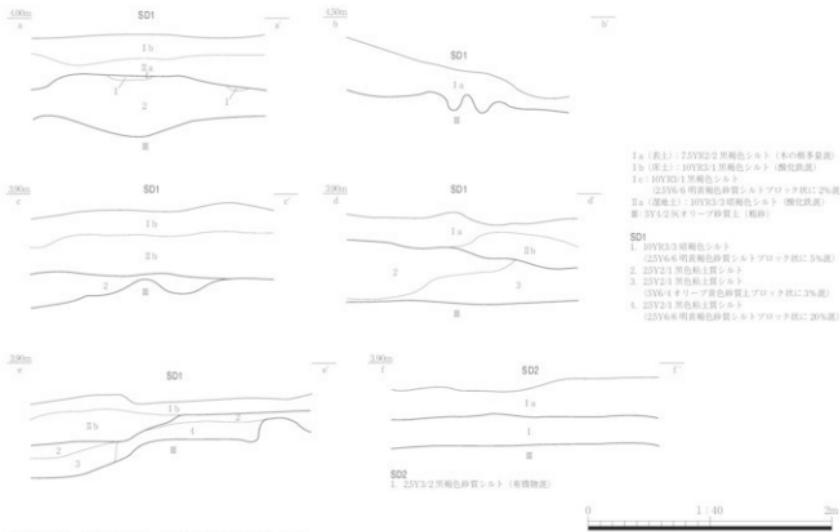
注2 第IV章を参照。



第55図 横越遺跡と周辺の遺構図 (1/600) 平成27年度富山市教育委員会試掘調査結果に加筆



第56図 横越遺跡 全体図 (1/100)
A地区



第57図 横越遺跡 遺構実測図 (1/40)

A地区
SD1・SD2



第58図 横越遺跡 遺物実測図 (1/3)

SD1

第27表 横越遺跡 満一覧

遺構	地区	幅(m)	深さ(m)	出土遺物		時期	切り合い	備考	地図	図版
				種類	器種					
SD1	A	20	0.50	弥生土器、土師器、近世陶磁器	弥生～江戸	<SD2			57	28
SD2	A	0.5	0.25	伊万里、近世陶磁器	江戸～明治	>SD1・3			57	
SD3	A	0.5	0.18			弥生～江戸	<SD2		57	

第28表 横越遺跡 土器・陶磁器一覧

序号	遺物番号	地区	遺構	出土地点	種類	器種	法量(cm)			時期	調査・文様			地図	図版
							口径	底径	高さ		外面	内面	底部		
58	601	SD1	X171Y113⑤層	弥生土器	高杯					後期	磨耗	磨耗		石英、白色粒	
	602	SD1	X171Y113⑤層	弥生土器	甕					中～後期	タテハケ ヨコハケ 磨耗 酸化鉄	磨耗 酸化鉄		石英、白色粒	
	603	SD1	X173Y114⑤層	土師器	碗?				5.6	9～10C	磨耗	磨耗	工具痕	赤色粒	回転系切
	604	SD2	X199Y112	伊万里	瓶	106				丸窓V型(18D～1860年代)	花文 重格子文	口縁部 二重團縁			

第VII章 浜黒崎野田・平榎遺跡の石器・石製品の石材

富山市の神通川右岸の河口近くに位置する、浜黒崎野田・平榎遺跡の石器・石製品の石材利用について特筆される点は以下のとおりである。

1 剥片石器の石材

剥片石器は少ないが、横山真脇石、碧玉（鉄石英）が比較的多い。このほか、無斑晶質安山岩、流紋岩などがある。

CL-M 横山真脇石 玉髓質珪質頁岩（写真1-2）：剥片4点みられる。暗褐色で、白色の挟在物を多く含む。円形の挟在物の多くは、珪藻化石である。玉髓が多く充填しており、樹脂状光沢を有する。能登半島先端の珠洲市横山産の玉髓質珪質頁岩である。

JA 碧玉（鉄石英）：玉髓に酸化鉄などの不純物が混ざって透明感のないもの。JA-1赤色系、JA-4黄褐色系がみられる。南砺市周辺などに産地がある。

AN-1 無斑晶質安山岩（写真1-1）：黒色緻密質でガラスを多く含むが、斜長石の小さな斑晶を多く含む。富山県の岩稲累層起源のものである。

SA-HOR 砂質ホルンフェルス：砂岩起源のホルンフェルスが若干用いられる。

2 磨製石斧・打製石斧の石材

TR 透閃石岩（写真1-4）：透明～灰色の透閃石と緑色の緑閃石からなる岩石で、透明感をもつものは軟玉（ネフライト）である。暗色・透明感のあるA1、暗色系のB、明色系のCタイプなどがみられる。比重が大きく、約2.9である。姫川、青海川流域（新潟・長野県境部）が原産地。

AM 角閃岩：黒色の角閃石が集合した岩石。透閃石岩と同様な産地のもので、比重も大きい。

DOL 粗粒玄武岩（写真1-3）：輝緑岩（DIA）ともいう。黒色の輝石や角閃石の結晶の中に拍子木状の斜長石が入り込んだオフィティック組織をもつ。玄武岩質の貫入岩として産する。本遺跡では、打製石斧の石材として多数が用いられている。日本海側の新第三紀の地層中に含まれる岩体が多い。

3 磔石器の石材

SA-A アレナイト質砂岩（写真1-5）：砂岩の中でも泥分が15%以下で、砂優性のもの。石器に用いられるものには、石英を多く含むものが目立つ。砥石の石材に多用される。

GR-DIO 花こう閃緑岩：花こう岩よりも角閃石、黒雲母などの有色鉱物がやや多く含まれる岩石。これらは、ともに神通川上流域に分布するもので、河川礫を採集したと思われる。

4 石製品の石材

GT 緑色凝灰岩：緑色変質した凝灰岩。県西部の医王山累層などが起源と推定される。

JA-5 碧玉（写真1－6）：緑灰色の碧玉。加賀地方産の玉石材と推定される。白色の小さな長石の結晶が含まれることから、脈状に産する典型的な碧玉でなく、溶結凝灰岩中に含まれるもの可能性がある。

JAD 翡翠：緑がかかった灰白色。透明感があり、モザイク状の結晶面がみられる。玉類の石材。

SL 粘板岩：黒色の泥岩が圧密を受けた岩石。石棒の石材。

SCH 結晶片岩：片理がみられ、レンズ状になった白色の鉱物（曹長石？）を多く含む。石棒の石材。

5 浜黒崎野田・平榎遺跡の石器・石製品石材の特徴

本遺跡の使用石材で特筆されるのは、打製石斧などに粗粒玄武岩が多くみられることである。粗粒玄武岩は一見すると砂岩のように見えるが、構成粒子をみると白色の斜長石の長柱状の結晶が入り組んでいることが特徴。上流の布尻遺跡でもみられる特徴である。また、砥石にアレナイト質砂岩が多く用いられている。

磨製石斧には透閃石岩が用いられる。剥片石器は少ないが、能登の横山真脇石、富山県域の碧玉（鉄石英）、無斑晶質安山岩などがみられる。石製品には、ヒスイのほか弥生時代の緑灰色の碧玉がみられ、石川県側の医王山累層に報告されるものに類似する。
(中村 由克)



写真1 浜黒崎野田・平榎遺跡の主な石器・石製品石材の実体顕微鏡写真



航空写真

1975年 国土地理院撮影

図版2



1



2



3

平櫻龜田遺跡

1. A4・A5地区遠景(東から) 2. A4地区(南から) 3. A5地区(南から)



1



2



3

平櫻龜田遺跡

1. C3地区遠景(南西から) 2. C3地区(東から) 3. C3・C5地区(東から)

図版4



平櫻龜田遺跡

1. C3・C4地区(西から) 2. C5地区(西から) 3～5. SD801遺物出土状況 6. SD801(西から)



平櫻龜田遺跡

1. C6地区(東から) 2. C7地区(南西から)

図版6



平櫻龜田遺跡

1. D地区遠景(南西から) 2. D地区(北から) 3. SD715・SD716(北東から) 4. SD274(北東から)



平櫻龜田遺跡

C8・C9地区遠景(西から)

図版8



平櫻龜田遺跡

1. C8地区(北から) 2. SK2101(西から) 3. SK2102・SK2103(西から) 4. SD2106～SD2108(北から)
5. SD2109(南西から) 6. SD2110(南西から) 7. SD2112(北西から)



平櫻龜田遺跡

1. C9地区(南東から) 2. C9地区(北東から) 3. SD1201(東から) 4. SK1211・SD1212・SD1213(南から)
5. SD1209遺物出土状況(東から) 6. SD1210遺物出土状況(東から) 7. SD1210遺物出土状況(北から)

图版10



平梗龟田遺跡 土器・陶磁器

SD801



平櫻龜田遺跡 陶磁器

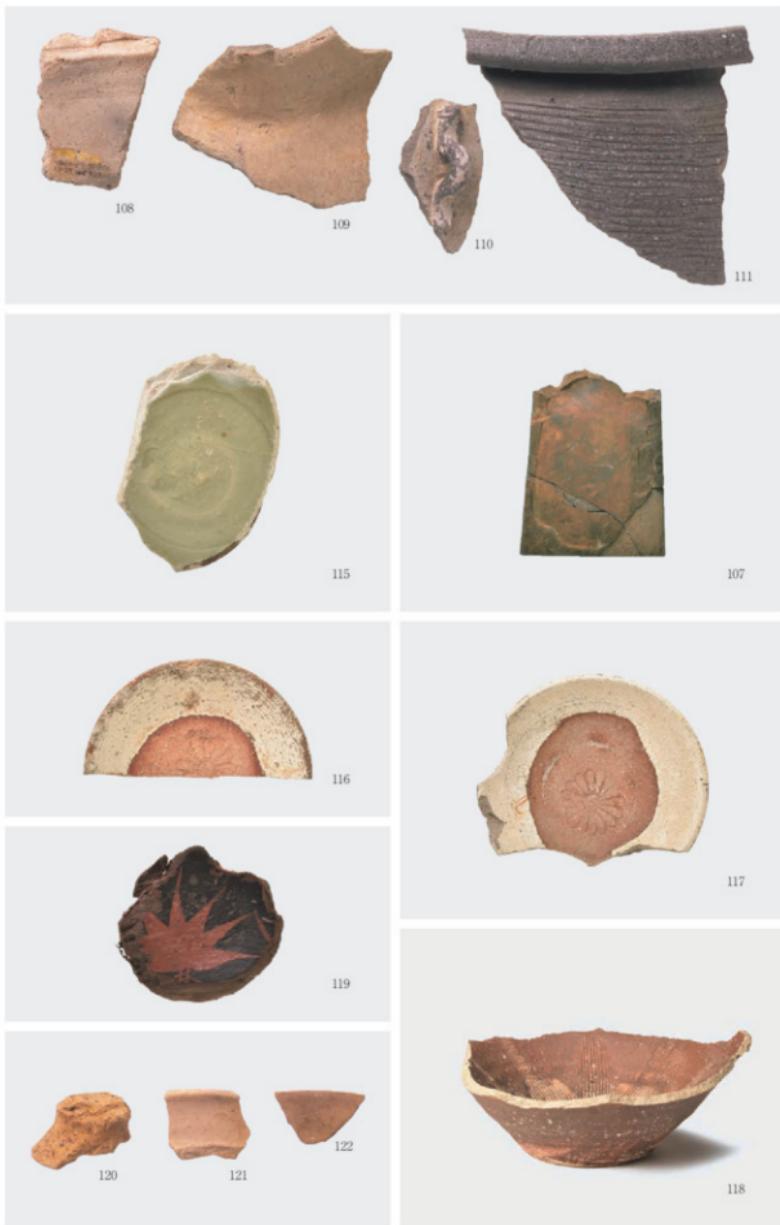
SD801

図版12



平櫻龜田遺跡 瓦質土器・土製品・木製品・石製品・ガラス製品

SD801



平櫻龜田遺跡 土器・陶磁器・木製品・石製品

SD805(107) SD806(108~111) SD1209(115~116) SD1210(117~119) SK1101(120~122)

图版 14



平櫻龜田遺跡 土器・陶磁器
包含層



平櫻龜田遺跡 陶磁器・土製品・石製品・金属製品
包含層

図版16



浜黒崎野田・平櫻遺跡

1. B地区(東から) 2. B地区西半(東から) 3. SD102・SD103(東から) 4. SD106・SD107(西から)



浜黒崎野田・平櫻遺跡

1. C地区(南から) 2. C地区(北西から) 3. SD3(南から) 4. D2地区(北から)
6. SD301遺物出土状況(北から)

図版18



浜黒崎野田・平櫻遺跡

D1地区(真上から)



浜黒崎野田・平櫻遺跡

1. 柱列・SD203(東から) 2. SP204(南から) 3. SP209・210(南西から) 4. SD202・SD203(南から)
5. SD202(東から) 6. 7. SD202遺物出土状況(西から)

図版20



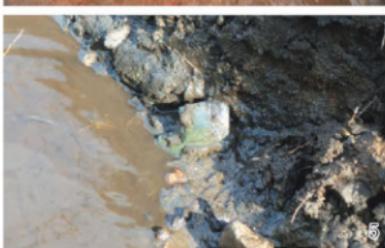
3



4



2



5

浜黒崎野田・平櫻遺跡

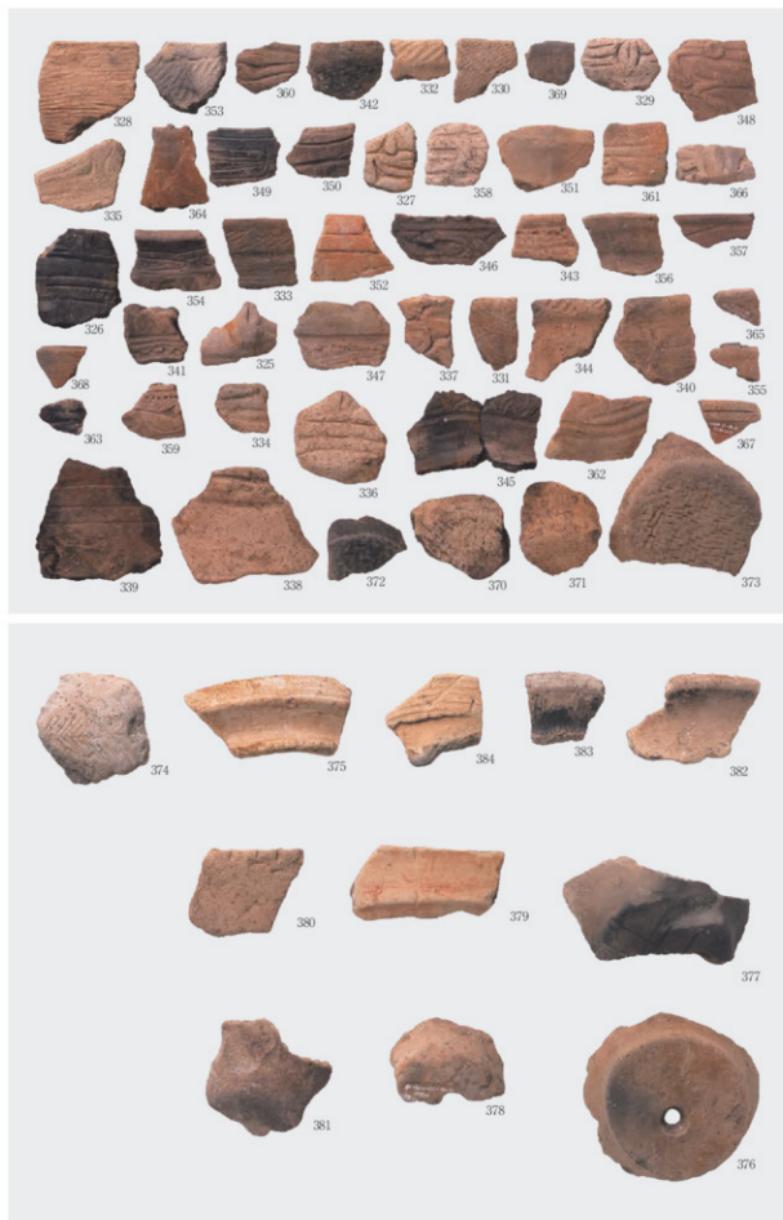
1・2. SD201(北から) 3・4. SD201(南から) 5. SD201遺物出土状況(南から)



浜黒崎野田・平櫻遺跡 土器・陶磁器・石製品

SP205(301・302) SP206(303・304) SD1(305) SD2(306) SD7(307・308) SD101(309) SD102(310)
SD201(311～321) SD301(322～324)

図版22



浜黒崎野田・平櫻遺跡 土器

SD201



図版24



浜黒崎野田・平櫻遺跡 土器・陶磁器・土製品・石製品・鉄滓

SD201



浜黒崎野田・平櫻遺跡 石製品・金属製品
SD201(435~465) 包含層

图版26



浜黒崎野田・平権遺跡 横越水窪遺跡 土器・陶磁器・石製品・金属製品

SD1(501) SD20(509) SD24(516) SE30(502・517) SD32(518) 包含層



横越水窪遺跡

1. A地区東半(西から) 2. A地区(東から) 3. A地区西半(東から) 4. SE22(西から)



横越遺跡

1. A地区(南から) 2. SD1・SD2(南から) 3. SD1(南から) 4. SD1(北から)

報告書抄録

ふりがな	ひらえのきかめだいせき はまくろさきのだ・ひらえのきいせき よこごしみずくばいせき よこごしいせき はつくつちょうさはうこく							
書名	平根龜田遺跡 浜黒崎野田・平根遺跡 横越水窪遺跡 横越遺跡 発掘調査報告							
副書名	県営農地整備事業平根地区に伴う埋蔵文化財発掘報告							
巻次	II							
シリーズ名	富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	第75集							
編著者名	田中道子、高柳由紀子、町田賢一							
編集機関	公益財團法人富山県文化振興財團 埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒930-0887 富山県富山市五福4384番1号 TEL 076-442-4229							
発行年月日	西暦2018年3月16日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地 市町村	コード 道路番号	北緯 °°°	東経 °°°	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
平根龜田遺跡	富山市 平根	16201	201039	36度 44分 33秒	137度 17分 2秒	20160822～20161118 20171013～20171020	1,667.2	県営農地整備事業 平根地区に伴う事 前調査
浜黒崎野田・平根遺跡	富山市 野田	16201	201037	36度 49分 49秒	137度 16分 53秒	20160908～20161011 20171010～20171110	605.2	
横越水窪遺跡	富山市 横越	16201	201658	36度 44分 46秒	137度 17分 5秒	20160808～20160902	296.0	
横越遺跡	富山市 野田	16201	201035	36度 44分 55秒	137度 16分 57秒	20170929～20171017	119.4	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
平根龜田遺跡	集落	中世以降	土坑 溝 35基 58条	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、中 世土師器、珠洲、瀬戸、中國製白磁、中國 製青磁、越中瀬戸、伊万里、唐津、土製品、 木製品、石製品、金属製品、ガラス製品			中近世の溝を検出した。	
浜黒崎野田・ 平根遺跡	集落	古代以降	柱穴 列 土坑 溝 1列 9基 17条	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、灰 陶器、綠釉陶器、中世土師器、珠洲、中國 製青白磁、中國製白磁、瀬戸、越中瀬戸、 伊万里、唐津、土製品、木製品、石製品、 金属製品			弥生時代の溝と古代の柱列を 検出した。	
横越水窪遺跡	集落	中世以降	井戸 土坑 溝 2基 22基 15条	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、中 世土師器、珠洲、越中瀬戸、伊万里、唐津、 木製品、石製品、金属製品			中近世の溝や井戸を検出し た。	
横越遺跡	集落	近世以降	溝 3条	弥生土器、土師器、近世以降陶器			近世の溝を検出した。	

要約

平根龜田遺跡をはじめとする4遺跡は、常願寺川左岸の平野部に位置し、常願寺川の旧河道の間に点在する微高地など安定した土地を選んで形成されている。

平根龜田遺跡からは縄文土器や弥生土器が出土したが、当該期の遺構はなく、集落が営まれるようになるのは、平成27年度調査で堅穴建物を確認した古代以降と考える。中世の遺物は少ないが、遺跡が位置する平根地区には「平根城」があったと伝えられ、平成27年度調査では関連する可能性が高いとみられる築城施設を確認した。今回の調査では城の延長部分を確認したが、築城施設ではなかった。近世以降は、水路や旧水田の区画とみられる落ち込みが検出され、集落は現在とはほぼ同様な立地に形成され、周辺に水田地帯が広がっていたと考える。

浜黒崎野田・平根遺跡は古い風とやま鉄道の南北に広がり、その様相は遺跡中央を南北に貫く市道の東西で異なる。東側は中近世の溝が主体であり、集落周辺の水田地帯と考える。西側は弥生時代の溝と古代の柱列を検出すると併に、近接して流れる溝から縄文土器をはじめとする多量の遺物が出土しており、集落の縁辺部と考える。

横越水窪遺跡は耕作に開わる水路や井戸を検出した。

横越遺跡は土地境として、耕作に開わる水路を確認した。

2018（平成30）年3月5日 印刷
2018（平成30）年3月16日 発行

富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第75集

平 檻 亀 田 遺 跡
浜黒崎野田・平檻遺跡 発掘調査報告
横 越 水 窪 遺 跡
横 越 遺 跡

—県営農地整備事業平檻地区に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅱ—

編集・発行 公益財團法人富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所
〒930-0887 富山市五福4384番1号
TEL 076-442-4229

印 刷 北 日 本 印 刷 株 式 会 社
〒930-2201 富山市草島134-10
TEL 076-435-9224